
『シレーナ・ダジリタ』

石川零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『シレーナ・ダジリタ』

【Nコード】

N1813Q

【作者名】

石川零

【あらすじ】

オンボロ潜水艇を相棒に運河を渡る運び屋ラウ・ジャウへ届いた一通の招待状^{いびい}。敗戦国のオペラハウスで復讐劇の幕を上げたのは、八年前ラウ・ジャウの前から姿を消した、かつての戦友だった。愛する人を奪われた憎しみのために、今宵も人魚は歌う Cノベルス大賞（第5回）一次選考通過作を一部加筆修正

?

?

メインタンク・バラスト排水65%。目標深度5'5。都市流域
下限深度まで上昇。到達。

推進スクリュー回転数減速。

速度30Kt.....25.....20.....15。速度固定。

充電残量がエンプティを示す電動機からエンジン航行にスイッチ
切り替え。

「フランチ・カトラ? 依頼人だろ。.....え? 知らないよ、新聞
なんて取って読む生活してないもんよ。ましてお高級な娯楽なんぞ」
ラウ・ジャウは潜水鏡から眼を離し、シートに寝転がった。

エイ・エクス
海鷲X は順調に運河を帰投航行中。

何百回と往復をくりかえして慣れ切った航路だったから、手持ち
無沙汰なラウ・ジャウは伸びをする。

拳がつかえる極小の彼の個室に甲高い女の声がスピーカーから割
れて聴こえる。

鉄の壁に響いて震えた。

『ボンボンのくせに庶民ぶってんじゃないわよ!』

音量ツマミを絞り、その隣に落ちていたダーツの矢を拾う。前方
部に集まる計器の隙間へ埋め込んでいるコルクめがけて、ねらいを
定めた。

「いやほんと、肌に合わないんだって」

『どーでもいいのよボンボンの小憎らしい言い訳は。開演は夜八時、
開演前はせわしないから幕間に来いとガイジンの注文よ』

「西海人は指定が細かいね、いつもいつも」

無線向こうの女の、呆れたように息を吸う気配。

『フランチ・カトラは西海人じゃないわよ。いやあね本当に疎いの

ね。これだから“大戦くずれ”はダサくて嫌。とにかくうちの信用を疑われないよう、ちゃんとした格好で届けにいつて頂戴よね。ボンボンなんだからね燕尾の一つも持ってないとは言わせないよ！……ん？ はいはい何でちゅ？ あっそうごはんでちゅねーラオチユー！ 待つてねーチユツチユツチユツ」

人が変わった猫なで声の向こうでぼふぼふと犬の無駄ばえが背景に交じったと思うと、通信は一方的に切られた。

「ボンボン、ボンボン、つて人を酒太りの菓子のように……」

口先横暴な雇い主への愚痴を、鳥籠の中で黄色い小首をかしげるミス・フウフウだけが聞いていた。ティリティリ、ティリティリ。慰めのような歌をカナリアは鳴いた。

「ほんとayingって燕尾服なんぞ持つてない」

運び屋ラウ・ジャウに正装が必要だったことは一度もない。今度の依頼はそれだけ珍しいものだったということか？ いや、そうでもない。ラウ・ジャウが登録するリン姐御の斡旋会社は、裏世界から生まれて表世界に看板を掲げた、ようは金次第のよろず配送屋。犬の毛皮以外はなんでも運ぶ、が原則の意地汚い稼業だ。高額料金と引き換えの早さと自由度に必要を見いだして持ち込まれる依頼の主は、地の人間、租界の人間問わずのことで、国有の潜水艇郵便に載せられない荷のバリエーションも千差万別、聞いて驚けのたくいばかりだった。

依頼が珍しいのではない。届け先がイレギュラーなのだ。

「演劇ねえ……。世の中、平和になつたもんだな」

良いことなのか、悪いことなのか。

裸足の足指で、命中した矢を抜き取つてもう一度、ねらいを別のコルクに変える。

(普遍的幸福か)

そうは思わない人間もいるだろう。という想像力で、一瞬だけ心が曇った。

ねらいが外れ、計器のガラスに当たった矢がカチンと音を立て、

跳ね返されて落ちる。

「ち」

失敗に反応したように頭上の赤ランプが灯った。

籠の中でフウフウが飛び回った。

「なに？」

ガタン、と艇体が拉ぐ。急ぎ上体を起こして計器群へ目を走らせたラウ・ジャウは、ガソリンタンクの残量値の異常な目減りに舌打ちする。失速した艇体はバランスを崩し始めた。水圧がまともに当たることによる不安な音をさせながら艇首を沈めゆく。急いで取り付いた艇首浮力用トリムタンクの排水操作に安全装置がはたらき、電流が来ない。……このままでは操舵が利かず、無様に回転立ち往生しかねない。

座席後部に移動し、機関部とつながるハッチをひらく。上半身をねじ込むのがやつとのスペースに這い、備え付けの消化器を固定バンドから剥ぎ取るように掴んだ。ガソリンタンク内の温度計は振り切れ間近。機関部全体が熱を帯びており、隙間に埋まったラウ・ジャウの額からは汗が噴き出た。タンク上部にある親指大ほどの丸いスライド窓をずらし、消化器のノズルを嵌める。ピンを歯で抜く。消火剤注入。表面火災を覆う消火剤の白濁色をスライド窓から確認。消火完了。リン姐御みたいにカツカしていたタンクの温度計も常識を徐々に取り戻す。ポンコツ艇のトラブルはいつものことだ。いや、七日に一度程度のことだ。そして大体、老朽火災とそれによる残量計の誤作動は十一分の一のサイクルでやってくる。

パイプの迷宮から這い出て再び座席を乗り越え、エンジンを完全停止。一回限りの予備電源に切り替えてスクリューを回す。艇体は運河の水圧に逆らってしなるように鼻先をすべらせ、いったん水面へ乗り上がるように突き出たあと、水平を取り戻す。

バラスト量を調整しなおしてラウ・ジャウは元のシュノーケル深度と速度をもう一度取った。

ガスエンジンを再始動する。不純物の交じったオイルの燃焼が上

がらないため、都市流域制限以上の速度はどうせ出せない。

「おうおう、また洗淨か……、最近ガソリン高いんだぜ……」

シートに汗かいた全身を投げ出し、ラウ・ジャウは息をつきながらこちる。

やれやれ。だましまし使うにも金が要る。

ただラウ・ジャウは、けして艇の中で《海鷗X》をポンコツ呼ばわりはしない。

心の中で思っても言わない。艇には耳がある。どこかでラウ・ジャウはそう感じているのかもしれない。切実な思いのこもる人の手で造られた潜水艇には、彼らの魂が写し取られているかもしれない。頭に腕組んで天井を見上げると、貼り付けたモノクロ写真が愛艇《海鷗X》の来歴帳であるかのようにその一角を占めているのが心にとまった。《海鷗X》に魂を込めた者たちの顔だ。

《海鷗X》を造り出した工場と、痩せて日焼けした若い工員たち。技術主任と肩組む技術者たち。

港に礼軍装で並んだ《海鷗》乗り士官たち。

停留した《海鷗X》を後ろにして、馬鹿みたいに笑い合うラウ・ジャウと彼の親友。

全ての写真の中で生き残ったのは、二人だけだ。

（お前は、今はどっちだ。良いことだと思つか、それとも……まだ許せずにいるのか？）

まだ親友は許せずに、祖国とその敵国だった国とを恨みつづけているだろうか。おそらくは、そうであるからこそ、親友は、いまだに行方知れずのまま、ラウ・ジャウの前にさえ姿を見せない。

そしてラウ・ジャウが、良いか悪いかの答えに行き詰まるのも。

八年前、ぼろぼろになった鉄の塊とともにこの地へ帰ってきて間もないころ、親友の慟哭を先に見なければ、ラウ・ジャウは躊躇わずに現状を否定して悪態吐いていただろう。この国から消えたのはラウ・ジャウのほうだったかもしれない。あのころラウ・ジャウのやさぐれにストップをかけたのは、先を越されたという天邪鬼な思

いだった。

（八年経った今の態度が決められんじやないか、お前の答えがわからないのうちさ）

否と言うなら是と思おう。是と言うなら否と思おう。

今からだって遅くない。ラウ・ジャウがその役を成り代わったところで、大した変わりはない。誰にも、何にも影響を与えられない。今も昔も。

ラウ・ジャウも親友も、既に決着の見える趨勢をひっくりかえすことなどできはしなかった。彼らはただの潜水艇乗りに過ぎなかった。

（だから、俺は今もこいつに乗ってるよ）

そして意外に沈まず生きていけている、と、モノクロの親友につぶやいた。

東西を横断し大陸奥地へ流れ込む運河はこの国の官民同舟した幹線輸送路である。敗戦後、空路は占領駐留軍に押さえられ、さきごろ号令がなされた縦横幹線道路の建設は十力年計画が見込まれている。いずれ占領国群ローグランド同盟の国々と同じように、この国もモーターゼーションの時代に入っていくのだと新聞は囃したてる。その前に飯が食えるようにしてくれと庶民はがなりたてている。横目にローグランド同盟の西海人連中は、租界に持ち込んだ贅沢な暮らしの内側から事業展開の指図を取る。

首都中心部 逆目橋 の手前、第五区棧橋に《海鷗x》を係留し、ラウ・ジャウは税関を通って運河沿いのアパルトマンに一旦帰った。集合ポストにリン姐御を経由して届いた劇場招待チケットが入っていた。一週間ぶりに戻った家で、シャワーを浴び、ワードローブを開けると、ぽっかりと寂しい空間に見返される。右に寄せて整備用ツナギが二着と乗員着の替えが一着。左に寄せて、ほこり除けの布

をかけたクリーニング済みの服が二つ。一つは海士校時代の制服で、もう一つは姉に贈られた一張羅だった。着る機会から逃げ回っているために滅多に着たことのない一張羅のほうを手にとって、ベッドに投げ出した。

一時間後、西海製のテーラーメイドスーツを身につけ髪に櫛を入れたラウ・ジャウはアパルトマンの部屋を出た。

廊下に置いたスクーターを路上へ担ぎ出して跨いだ。

第五地区からオペラハウスのある租界まではそう遠くない。距離としては七ブロックほど先が 明真相界 との一番近い境だ。だが心的距離感というやつでは、地の人間と租界の住人たちとの境界は道路や建物ほど密着しているとは言えない。

生ぬるい風に生臭い魚の匂いが漂う商店街を抜け、物理的な壁や警戒が備わっているわけではない租界区画に直進した。租界の南の端から目指す目的地は北東の端、ほぼ 逆目橋 中央市街に接する辺りに、戦前から建つオペラハウス。

明真相界 自体、戦前から外国人居留地として西海人が住み着いてきた区域であり、町並みに劇的な変化は見られない。戦前戦後で変わったのは、この国の名前と、政治と、それから。

租界中心部に出ている屋台で夕食をすませ、しばらく車道脇へ停めたスクーターに腰掛けて時間をつぶした。

ちらほらと黒塗りの車の流れが出来てくるころ、その列に混ざって加わる。ベルトコンベヤに乗った気持ちだ。ペースに乗ってしまえば、運ばれる先は選べない。

運ぶ先も選べない。運び屋の仕事は、操艇のメカニカルさの延長線上にあるごとく機械的であって、意見を持たないラウ・ジャウには持ってこいの職だった。ラウ・ジャウは依頼を選ばないことでリン姐御から重宝されている。

オレンジ色に照明されたオペラハウスが見えてくると、夜空の紺色とのコントラストそのものが作り物めいた座興にも思え、人工の別世界へ足を踏み入れる心地がした。昔から、子供のころからこの

辺り一帯より北側に広がる世界が、ラウ・ジャウは苦手だった。租界に限らず。

「お車、預かっついてくれるかい？」

ロータリーに吸い込まれるリムジンを駐車スペースへ案内する黒服の一人に、強引に鍵を握らせ、さっさとラウ・ジャウは歩道へ上がった。

お恵みを。ご寄付を。どうぞ。明日食べるものを得る職に就くことが不可能です。どうぞ……

カタコトのローグランド語で喜捨願う声を張り上げるのは、植え込み前の地べたに片方膝から下のない足を投げ出して座した傷痍帰還兵。

煮しめた色の歩兵服と軍帽を看板代わり、それとわかるよう主張していた。

目の端で眺めても金の洗面器には西海人の善意がかさかさ音を立てそうに溢れている。それは取引だった。男は呵責のかき立てをセールストークとして、良心の証しを売っていた。占領者と被占領者の関係は五分五分だった。

この五分と五分を是認する限り、この国は平和でいられるのだ。た。

ロビーへの石段を昇る人波は西海人と東海人が半々混じっている。富裕と中流層が興を求めて集まった今宵の出し物は、ローグランドで知名な演出家となったフランツ・カトラなる人物の凱旋公演初日であるということだった。リン姐御に言ったとおりラウ・ジャウは、世事にはほとんど関心が持てないため、依頼人の来歴はおるか、名前すら聞いたことがなかった。

「ラウじゃないか？」

ロビーの雑踏を歩いていると、前方、ボックス席へ続く通路から西海人の女性を伴って出てきた同国人がラウ・ジャウの顔を見とめて意外そうな声をよこした。

「ジエイ・チェン」

旧知の男の名前を呼ぶ。

手を挙げ近づいてくるチエンは、海軍士官学校時代の同期だ。

「珍しい男に珍しい場所で会うものだなあ。実家嫌いをいよいよ克服したってことかい？ 次は選挙報に名前を見ることになるのかな？」

「そんなわけはないだろ。今日はちよつと、この場所で約束を入れられたものだから。……仕事だよ」

「配達屋をやつてるとか、聞いていたが？」

「ああ、それだよ。その関係でね。お前こそ、貿易業だって？ 順調みたいじゃないか、チエン」

チエンは胸を反らすように立ってまあね、と言い、隣の女性と顔を合わせる。

彼を「ジエイムズ」と呼ぶ彼女を、取引相手のご令嬢だと説明してラウ・ジャウに紹介した。

彼女へはラウ・ジャウを戦友だと言ってみせた。大袈裟な感動をあらわして頷く令嬢に、ラウ・ジャウは苦笑して握手を交わす。ともに戦場に就いていたことは確かだが、海士校卒業後はチエンとは配属が離れ、戦後二年ほど経って一度顔を合わせるまで消息の知れなかつた程度の戦友だ。それでも、貴重な友の生き残りであることに変わりはないが。

大柄なジエイ・チエンは輸送飛行機のパイロットへ回され、兵站を担っていた。今の彼は主に小麦穀物の輸入に精を出し、やはりこの国の求める糧を担おうとしている。

「君も何か始めればいいんだ。せつかくのバックグラウンドを使わないのは馬鹿だぜ？」

以前会ったときもラウ・ジャウを共同起業に誘ったチエンだ。あの頃はラウ・ジャウの実家の力に魅力を見ていたのだろうが、軌道へ乗って必要の薄れたらう今となっても、今度は純粹にラウ・ジャウの立身のためにそれを持ち出して薦める彼の、根っからのビジネス好き気質に、ラウ・ジャウはむしろ気持ち良く笑った。

「親父はともかく、考えなくてもなかつたんだがな。その前に人待ちをしたくてね」

ああ、とチェンが頷いた。

「ツエーか。……そうだと思ってたよ。お前が何かするなら奴と共に始めるんだろうと。だから断つたんだよな、僕の旨い話を。ツエーの噂は相変わらず聞かないけれども、どうした」

ラウ・ジャウは肩をすくめる。

「何の手掛かりもない。だが、まあ、そのうち帰ってこないわけもないと思ってる」

「そうだな。我々の故国はここにあるんだ」

「相変わらず前向きで」

僕にはしがらみがないからな、とチェンは妙に神妙な顔になって言った。

「クアン家の前をたまに通るが、嫌な気持ちになるよ、僕でも。奴にしたら、たまらないだろうとは思う」

開演のブザーに会話は中断され、ラウ・ジャウはチェンたちとりあえずの別れを交わした。

ラウ・ジャウの席は一階の半ば付近だった。良くも悪くもないような普通席である。別に演劇に興味もないし、幕間に控え室を訪えばいいだけの仕事なので、ロビーで待とうかとも思ったが、あとで感想でも訊かれて答えられなければリン姐御からどんな嫌みや蔑みを受けるかわからない、という塵のごとき理由が天秤をかすかに傾けて、ラウ・ジャウの足をチケット指定のブロックCへ向かわせた。C 23。探し当てた空席に座ろうとして、ぎよつと隣席を見た。

「リン姐御?!」

真っ赤なイブニングドレスのスリットもあらわに脚を組んだリン姐御が鎮座ましましていた。

まっすぐの黒髪を珍しく肩に解きおろし、その艶めく漆黒の額縁の中から値踏みの眼差しをつりあげている。

ほどなく、赤い唇の口角もつりあがる。

「スミス&テニエルのテーラーメイド？ 微妙に型が古いわねえ」

「余計なお世話。おいおいおいリン姐さん……」

C 23の座面を下げて座りながら、ラウ・ジャウは呆れた。

「あのねえ、ラウ。観劇チケットつてものをペアで送ってこない馬鹿ってこの世に存在しないと思うの」

「いや、うちには一枚で届いたから確実に一人はいるだろう」

「確実に連れ立つ女もいないと察したあたしみたいな気遣いができる雇い主もこの世に二人としないの。わかる？」

二人いなくてこの世が喜んでるよ。ラウ・ジャウは場所を幸いと好きなことを言っただけ、噛み千切る口元ジェスチャーを横目で見ただ。

事務所だったら物が飛んでくるところだが。

衆人環視となりかねない今は、悠々とラウ・ジャウは席に背をうずめる。紳士淑女の頭を眺め、昨今の流行を知る。

「これだけ上等な客を集めるカトラとやらが、何故にマフィアの娘のけちな商売へ大事なものの往来を託すんだ？」

「理由不問中身不問がうちの専売なんだから、その答えがわかるよ。うだったら店じまいね」

「そりゃそうだけど」

妙な引つ掛かりを拭えないのは、久しく味わうことがなかったこの居心地悪さのせいなのか。

談笑が反響して混じり合う上品な喧噪で耳がおかしくなりそうな頃、舞台上に降りていた深紅の緞帳が上がりはじめ。

一台のグランドピアノが、天窓から降る月光を浴びている。

一幕一場の舞台装置は、ただそれだけだった。

歌劇とピアノとは、取り合わせが利くのだろうか。とラウ・ジャウは眉をよせた。

思う間もなく、舞台袖から手に手を取ってもつれながら現れた男女。はしゃいだ一巡りの末、女を椅子に座らせ、男が黒塗りの杵に身体をもたせかけ、オーケストラピットの楽団より先に、鍵盤は音

樂を鳴らした。

弾きながら女は台詞を歌いだす。男もそれへ応えて歌いだす。小道具であるピアノの音色と、オーケストラを伴うレチタティーボとは、別のものとして語られているようだ。つかず離れずするピアノとレチタティーボの旋律同士は、しかし一つの音楽としても成り立っている。おそらくこの辺りの新趣向が、フランツ・カトラという気鋭演出家の持ち味なのだろう。

「通訳しようか？」

ローグランド語ができないリン姐御に気を使い、耳打ちする。

「見ればわかるわよ」

リン姐御は反対の肘掛けへ肘ついて、細い顎を手に支え、長丁場を覚悟する姿勢になった。短気な姐御にオペラは性に合わんのじゃないか。他人事ながらラウ・ジャウは心配したが、他人の勝手であり、舞台へ首を向けなおす。

そう、確かに見ればわかる。二人は恋人同士で、今は恋の時間だ。交わす台詞は愛の歌そのもの。

交歓のち暗転して二場へと続く。戦争の足音が二人の屋根裏に近づく。

そこで描かれる戦争は、舞台衣装を見ても、ひとつ前の大戦ではなく、その前に別の枠組みにおいて西海側同士の国のあいだで起こったものをベースとしているのだろう。

恋人を徴兵された女は、独り屋根裏で、遠く離れた彼の心に力を注ぐようにピアノを弾きつづける。祈りむなしく、やがて戦死の報がとどき、震える孤独のアリアを歌う女のうしろで、どういつ仕掛けなのか白い鍵盤は赤い血を流して舞台をとめどなく濡らした。再び暗転。

街は敵軍に占領され、女が演奏者として勤めるクラブは敵軍将校の溜まり場となる。

それはおそらく幻覚なのだが、将校達の傾けるビールジョッキは戦死者の頭蓋骨だ。女は一人の将校の手に最愛の男のしゃれこうべ

を見つげ、闇に倒れる。

四場は再び屋根裏であるが、心の闇の隠喩風景とも見させる幻想的な照明が使われている。部屋の隅に、人形の座る椅子が、ぼうつと浮かび上がって見えていた。否、人形と思っていたそれは人だ。生身の。白い長い髪を肩に垂らした少女が、猫足の椅子に寝間着姿で座っている。

じつと動かない、口もひらかない少女の言葉を、主人公である彼女だけは聴くかのように、あたえられし契約の刻だと歌いあげる女の心の闇との契約は、女の指に、ありえぬ力を宿らせる。

女が毎夜、クラブで弾く一曲が、次々と将校に憂鬱をもたらしてゆく。一夜、一夜、一人、また一人と、その曲を聴いて憂いに溺め捕られながら席を立つ男たちは、ぼうつと浮く白髪の少女が座る椅子の横を素通り、店の入口を出て、こめかみにピストルを当てた。一夜、一夜、一人、また一人と、彼らはそして引き金を

「……ラウ、ねえちよつと、ラウ？」

「ん、ああ？」

シャンペングラスを額につけて目を閉じていたラウ・ジャウは、横ざまから頭をこづかれて我に返った。

幕間のロビー。

「あたし、飽きたから帰るわって言うてるの。報酬の残りは明日朝イチで届けにきなさいね。あんならしくすねたりはしないでしょよ」

「信用ありがとう。何だろうなこれ、人酔いか？」

脂汗をかくような薄い疼痛の感覚に、頭を振る。

「土管引きこもり男がたまに文明社会に出てきたからよね。というか、あんまり気持ちの良い劇じゃなかったからじゃない？ 血漏らしピアノだとか、趣味悪いわね」

「《海鷗X》は土管じゃない。……暗い物が流行るのは、景気が良い時だというのがね、してみるとローグランドはよほどのような」
「でもこれ、新作だって話よ。今日がお披露目」

だから周りの休憩の客たちの表情も戸惑い気味なのだろうか。占領地でやるに相応しい内容とは言い難いからというだけでなく。

「さつさと行ってきて、あんたもさつさと帰れば」

無線のときの前振りには、結局みずからの妖艶なるドレスアップを見せつけただけのものだったのか、あっさりと言ってリン姐御はヒールを返した。人込みに消えゆくマーメイドラインのドレスは背中も大胆に露出した最新型のスタイル。着慣れている姐御は幾人かの富裕層の知人から声をかけられて応じたりもしていた。視界から完全に消えぬ間に、ラウ・ジャウはラウ・ジャウで、目的の方向に身体を返す。

配達は幕間に。

そういう依頼だった。

依頼主はフランツ・カトラ。

さっきの悪趣味な物語を書き、演出した張本人だ。

今となつてはその人物への興味と、忌避とが、二つながらラウ・ジャウに生まれている。幸福な終わり方する物語でなければ許せないというようなポリシーは、ラウ・ジャウにはないのだが。

それにしただって……。

ズボンの両ポケットに手を突っ込んで、特等のボックス席へ向かう階段をあがった。

最上階廊下に並ぶボックスの扉を素通りし、突き当たりの角、ブルンズ像で客の意識からは塞がれた壁の切れ目、奥に続く通路へ入り込む。関係者用の通り道は人気なく、毛足の短い紺色の絨毯の上でラウ・ジャウの革靴が一人足音をたてた。

楽屋裏へVIPが通されることも少なくないだろうオペラハウスの裏方は、ところどころ石膏の胸像が置かれるなどしてホテルの廊下ほどに装飾的だ。間接照明のほの明るい壁に並ぶドアが見えてく

る。手前の一つをラウ・ジャウはノックした。
返事はない。

もう一度、扉を叩こうと拳を挙げた、ラウ・ジャウの耳が、人の
気配をその向こうに聴く。

曲線の取っ手が動き、扉がひらいた。

「無老配送公司コンスです。依頼の荷物をお届けに」

立っていたのは、白髪の少女。

舞台上で妄執の亡霊を演じていた、あの少女だった。

ラウ・ジャウは少し首の角度をかしげ、少女を見つめ返す。

「フランツ・カトラ氏へ」

「……」

まだ舞台上の演技が続いているごとく口をひらかない少女から部
屋の中に目を移した先で、白いシャツの人影が続間の奥を横切った。
依頼人はいたようだ。薄い身体を躲してラウ・ジャウを招き入れた
少女にしたがい、彼は部屋に入って、せわしく紙束をめくる音を
たてる奥の依頼人を待ち、突っ立つ。

うしろで閉まった扉に首だけ振り返って見ると、少女は小さな白
い指で、何故か用心深く内鍵を掛けた。「そこで待っていてくれ。

すぐに受け取る」背後からかかったローグランド語にラウ・ジャウ
は気をひかれながらも、少女の沈黙を目で追った。

舞台照明がなくても青白い横顔を、まっすぐと扉近くの角隅に向
け、少女はそこにある猫足の椅子へ歩いた。

「すまない。明日のための修正稿を揃えていて着替える間がなかつ
たもので」

母国語になり近づいてきたその声に、息詰めてラウ・ジャウは首
を直った。

左のカフスを留めながら燕尾上着の置かれたソファへ足を向けて
入ってくる、男の顔を凝視した。

「ツェー」

言ったラウ・ジャウを見て、彼は戸惑う表情で他人行儀に首をひ

ねった。広い額へ癖毛を垂らし、きつい目尻に生意気な知性を刷いた、何一つ変わらぬ友人の顔がそこにある。

「どうかしたのかね？」

親しみのない上からの口調で、彼は燕尾に袖を通しながら返した。ラウ・ジャウは眉をひそめる。

「どうかしたかって。お前、何をしてるんだ、ツエー」

「ツエー？ 誰だ、それは」

ますます怪訝そうに訊いた。ボタンを嵌める手元と交互にラウ・ジャウを窺い、テーブルの腕時計を取る。

「私が似ている？ それより、君の仕事を先に果たしてくれないか」

ラウ・ジャウは馬鹿らしさに苦笑いを浮かべる。

「……冗談はやめる。三文芝居じゃあるまいし」

「嫌な言葉を使うものだね。芝居屋に対して」

「友達に御挨拶なしたらばつくれを演じておいて何だ。おい、ツエー・クアン。生存報告もよこさずに。 劇作家のフランツ・カトラだと？」

相手はまるでその名前を当たり前のものとして頷いた。

ラウ・ジャウは目を細める。

あくまでも目の前の男は、ツエー・クアンであることを否定した。沈着な態度から知れることは、ラウ・ジャウの反応をあらかじめ予期していたような了解が彼にあることだ。つまりはラウ・ジャウの登場もわかっていたらしいことだ。ある種の予定調和。消さない作爲の思惑がそこに感じられた。冗談でも、別人でも、まして記憶をなくしているわけでもなく……。

演じている？

「依頼した荷物は？」

「」

ラウ・ジャウはポケットに突っ込んでいた左手を、外に出した。握った黒革の小箱を依頼人に示す。

「軽い荷だ。これが目的？ それとも呼んだのは俺か？」

「中身を開けてみたまえ。確認する」

ラウ・ジャウは睨むように上目で相手を見たのち、手元に視線して蓋をひらいた。

ビー玉。

のようなものがシルクの台の凹みに嵌まっている。蓋の裏にもクツションが内張られていて、転がる玉の音がしなかったのは道理だ。青い水底を結晶させたようなガラス玉は、指輪になっているわけでもなく、ただの珠だ。高価なものとも思えない。わざわざリン姐御の店を頼んで運ばせるような危険物のわけもない。

「これは？ なんだ」

「待望のものだ。契約を取り戻す鍵だよ」

契約。それこそ嫌な、不吉な言葉だ。さっき見たばかりの劇の後では。

「メイファン」

フランツ・カトラと言い張るツエーは隅を向いて呼ばわった。名前をあらわした少女は、読んでいた分厚い本から目をあげて、カトラを見た。表情のない青ざめた顔は人形のように、からくり仕掛けみだいにおもむろに本を閉じ、椅子を離れる。

「君に声をもどそう。今日がやっとその日だ。メイファン」

穏やかに優しいカトラの声が、やけに悲しみを帯びて耳へ響くのにラウ・ジャウは目をひらく。

言われて少女は、ラウ・ジャウのそばにやってきた。手を伸ばし、ラウ・ジャウの手から小箱を取り上げた。

両手に抱えた小箱の中身を、無表情ながらも大事そうに見つめ、そしてふと、カトラに駆け寄った。

無表情ながらも、子供がプレゼントにはしゃいで、親にありがとつを叫びにいくような、それは場面だった。

フランツ・カトラは少女の抱く小箱を受け取り、見上げられるまま白髪をなでて呟いた。

「待たせてすまなかった」

光景に割って入る言葉をラウ・ジャウは選り損ね、ただ傍観を続けた。

カトラは小箱を持った手に、腕の時計を見た。

ちらと手持ち無沙汰なラウ・ジャウへ視線をすべらせ、「観客は一人」口の端に笑みを薄くかたどり、言うつと、またメイファンを見つめる。

髪を撫でる右手が、メイファンの青白い顔の輪郭に下り、頬をなぞった先、細い顎のおとがいに親指がかかる。左手から落ちた小箱はカタンと床に鳴る。指に取り出された青いビー玉を、カトラは少女の色のない唇へ近づけた。

「ツエー」

(何をしてる)

何度目かの同じ言葉がラウ・ジャウの頭を占める。

「幕間は終わりだ」

言ったカトラはガラス玉をメイファンの唇に吞ませた。

ほどなく少女の喉が、飲み込む反射にうごめくのがラウ・ジャウにも見えた。

「よく無事に届けてくれた。報酬はそのランプテーブルに」

封筒を目端に入れながら、ラウ・ジャウは険を深めた。

「お前は帰ってきたのか？ なぜ西の名前を名乗る。ママには知らせてあるのか？」

カトラは横目にラウ・ジャウを見やる。

「仕事の完了に詮索が必要なかね？ 面白い配達屋なんだね。まあ、それもドラマと言おうかな。……ならば、こちらも面白いものを見せようか」

少女は徐々にわずかず息を荒げ、開いた唇をふるわせた。すぐるようにカトラを仰ぎ、懸命に空気を嚙んだ。声をなくした人魚姫の、ように。喋らなかつた少女が、喋ろうとしている。

「……グーグ」

努力はかすれた声に突つた。哥哥^{グイグ}　メイファンはカトラを兄と

呼んだ。

「もどつたね」

勇気づけるよう、メイファンの額をそつと触り、カトラは頷く。

「歌えるね」

メイファンの無表情に、一瞬光が宿つたように見えた。

「歌つてごらん」

ラウ・ジャウは額にこもった気分の悪さを思い出す。

一夜、一夜、一人、一人。

だがあれは、演劇だ。ただの。

「月の歌だ。君が往復してくれた群島の一つに伝わる、生命と死の歌。原初に地を揺り動かし、エネルギーを生んだ人魚たちの歌」

メロデイも歌詞もなく、すでにメイファンは喉を身の内から沸き起こる旋律に委ねていた。

「聴こえるだろう？ 今となれば、精霊もこの地に蔓延つた人間を軽蔑するだろう。彼らが創造した生命の楽園で人は命の無駄遣いに狂奔してばかりいるのだ。だからこれは、過去からの罰と復讐の歌だよ」

語りながら、カトラでありツエーである彼は、部屋を横切り窓辺に立つ。六階相当の高さにある窓を押しひらき、夜の空気に顔を晒した。そして振り返る。

「君も、復讐の動機を捨ててはいないはずだ。経歴は念のため、ミス・リン・リーから聞いて知っているよ。ラウ・ジャウ元大尉」

「……復讐？」

「八年経つても君が、地に根を下ろさないでいるのは、この地が汚れたからだ。君が命懸けで守ろうとしていたこの国が、蹂躪され、壊されていくのを正視し得ないからだ。そうだろう」

棧に両肘を預け、寄りかかって、こちらを睥睨するように見る瞳は、昏く輝く。その光はさっきのメイファンの顔にあったものと同じだ。

「そんなわけがあるか。ツエー、俺は」

「私にかつていた親友ならば、この手を取るだろう。だが、彼はすでに死んだのかもしれない。君が私に見るらしい親友も、もう死んでしまっているのかもしれないよ。あの戦争の終わりにね。だからこそ、私たちは仇を討たねばならないのじゃないか。二度と帰らぬ日々への贖いに」

「お前は何を言ってるんだ！」

目を伏せて男は再び窓外を振り返った。

「君が運んでくれたものはトリガーだ」

そこから官庁街までぽつかりとビルのない空を見晴るかす窓だった。

劇場に二幕は始まっている。一際かん高いアリアのクライマックスが壁を越えてホールから響いて聴こえてくる。西海人のソプラノはメイファンの歌い続ける旋律に重なり、表と裏を演じ合う。それは、王子の愛をそうと思わず横取りした王女と、儂くも泡と消える運命の人魚姫のような、表と裏だ。

轟音が空と地に響いた。

オレンジ色の爆発が官庁街の闇の一角を染めた。

「なん」

ラウ・ジャウは起こった光景に絶句する。

立ち上がる黒煙が、燃える炎を映して空を覆っていく。

駆け寄って、窓枠に取り付いた。

「破壊活動……?!」

官庁街の東南、公安庁舎の屋根に国旗がはためく隣。占領軍高官の宿舎があのだりにはあつたはずだ。元は社交サロンを内包した高級会員制ホテルだった建物だ。接収前、そのホテルの持ち主は、クアン財閥総帥、タウジン・クアンだった。ツェー・クアンの今は亡き父。

悠然とした友人の顔を間近に見上げて、ラウ・ジャウは息を呑む。
「言っただろう。幕間は終わった」

俺達は、間に合わなかった。

八年前、刃で引き裂くような自責とともに胸に刻み付けられた言葉。思い。

『何ができた？』

洋上に開けたハッチに立ち、夕日で顔を赤く染めた僚友が、泣きむせぶラウを見て小さく言った。

『ともに死ねただけじゃないか、ラウ』

遠くに見晴るかす島影の上には、無数にたなびく白煙。母基地の置かれたその島で、戦闘は既に終了していた。

今朝四時十二分。《海鷗X》二十三番艇乗組みの操艇士ラウ・ジヤウ大尉及び索敵・火気管制士ツエー・クアン中尉は敵占領地間洋上通商路の待ち伏せ攻撃に就いていた。大破させた民間徴用船の任務記録から、搜索部隊が発見した補給予定書。近日中に我が軍前線島基地のいずれかに対し、中規模攻勢の可能性ありという解析内容を彼らは知らされた。電信に基地からの応答はなかった。敵は広範囲に電波妨害をかけていたのかもしれない。それでも《海鷗X》が包囲網をかいくぐって急を知らせられたならば、機動性を重視して基地移転を繰り返す第二潜水艦艇部隊は速やかに散開退却して敵を躲せるかもしれない。《海鷗X》の設計は高速潜行が可能だった。命令を受け、彼らは装備を最低限に母基地へと取って返してきた。

水中拾った玉碎信号で、彼らは自艇の正確な現在位置と、進むことの無意味を知った。午前九時五九分。それはまるで、近付くな、と警告するような通信打音だった。前席の中尉がエンジン停止を言い始めても、ラウは了解せずに艇を進めた。それ以上接近すれば、居残る哨戒艇に捕捉攻撃される恐れがある。しかし彼は操艇をやめなかった。中尉は食い下がらなかった。やがて中尉が目視確認のための浮上を求めてきたとき、やっとラウは我に返った。それこそ無

謀な露出だったからだ。今度はラウが、理性で自艇の艇首を返す番だった。

午後四時二十九分。終焉の煙が島を覆っていた。

敵艦隊の船影さえない。上陸隊を残して艦隊は十八海里離れた隣島基地を叩きに行った。そこに主力はない。海軍虎の子の第二潜水艦艇部隊基地は目の前の島にあった。精鋭の乗組員も、整備員も、艦艇も、すでに鉄屑と死体になった。

ラウは泣いた。愛艇の鉄の肌を殴り、拳の節に血が滲んだ。そしてそれを見下ろしたツエーが言った。

「何ができた？」

と。

何も。

寸前に間に合ったところで、何も。

我が軍は劣勢にあり、戦況好転の道筋を誰もひねりだせない。もはやまだらの制海権海域を縫うしかできない我が軍にとって、部隊にとって、いつかは有り得る壊滅だった。

「ともに死ねただけじゃないか、ラウ」

たとえ重装備だったとしても、華と散るのは同じことだっただろう。考えられたよりも圧倒的な戦力を投じて、敵は来た。

やりきれない。

そこに加われなかったラウたちと同じように、不意打ちを受けた潜水艦艇部隊とても、本来の戦いをしないままに砲火を浴び、魚雷の的になって、徒や命を散らした。

「ガウ……ホアン……ヤン……タオタオ……イエーン……テイ……」

仲間の名前とともに落ちる熱の滴が、艇を洗う波に消されていった。

ラウ・ジャウは寝汗にまみれて目を覚ました。夢の続きにいるよ

うな疲労とともに。まだそれほど暑くなっていない六月、夜中から降り続ける雨が老朽アパートメントの部屋に湿気をこもらせる。フウフウのかまびすしい鳴声を聞きながら、うつ伏せに倒れていたベッドから立ち上がった。剥ぎ取ったシャツを引きずって、重い体でバスルームに行った。一週間かけて往復した群島は大陸の内奥内海にある、大小の島が密接しながら浮く僻地だ。入り組んだ海路を縫って奥地に分け入ってきたラウ・ジャウは疲れを溜めていた。

『……偶然だよな』

浴室で冷水を被った頭が徐々に、昨夜の会話を思い出す。

『何を見せたつもりだ。あの子の歌があんなことを起こしたとでも思わせたいのか。あるわけがない』

ラウ・ジャウは混乱を牽制の薄ら笑いに変えながら食ってかかった。

思いもしない場所で再会した親友が、平然と放った答え。

『月夜の晩だ。奇跡も狂気も大した違いはない。親戚のようなものだ。私はどちらも喜べる』

望んで自分は狂ったと言うのか。

こいつは、本当にツエーなのか。

ツエーではないから、フランツ・カトラを名乗るのか。

ああ、簡単なことだ。

理解したラウ・ジャウの足は、その場をあとずさった。

男がかつての親友でないだけは、確かなことだった。

少女の高音には、人酔いと同じ気分の悪さをもたらす何かがあった。めまいにも似た覚束無い身体感覚を、どうにか制してその部屋から出た。

万雷の拍手が劇場から響いた。オペラハウスの観客はまだ外の騒ぎを知らなかった。

ラウ・ジャウは重いほどの耳鳴りを抱えながらアパートマンに帰ってきた。その後を覚えていない。

「馬鹿が……」

便座に座って歯を磨きながら、ラウ・ジャウは呟く。

復讐のために、戻ってきた？

馬鹿みたいに針が振り切れ過ぎている。

振り切れて壊れている。壊れることを厭わないまでに、憎しみを溜め込んだっていいのか。

八年前の冬の海から。

ラウ・ジャウがぶつける先のない憎悪をぶちまけたあの海の上で、吠えたラウ・ジャウにも見えていなかったわけじゃない。沈着に立つツエーの拳に浮いた、骨と血管の青さ。だが僚友は一言も怒りを口にしなかった。吐き出そうとしなかった。彼はそういう人間で、強く思う感情ほど、表に出すことがない。だからといって、人よりも人間ができていたりとか、けしてそんなことはない奴なのだ。見栄を張るのが巧いだけだ。

そしてツエー・クアンが、その生意気な外面をどうしても保てなかったときに、ラウ・ジャウの視界で一度だけある。彼がラウ・ジャウの前から、この地から姿を消した一日前のことだった。

あのときが、“檄鉄起こし”。

ラウ・ジャウはフウフウに餌箱の餌を換え、自分は水を一杯飲んで、雨の町へ出た。

(ぜんぶ知っているのは俺だけだ)

ツエー・クアンの物語を知る人間は、感傷でもなんでもなく事実としてこの国には今ラウ・ジャウくらいしかない。

(書き換えることができるのは、筋を知る人間だけだ)

灰色の町並みをなお暗い灰色に塗り込める雨の中、傘を持たずに軒下を伝い歩いて、租界と反対方向の繁華街を越える。

繁華街のあちこち、東海人の女たちが派手な化粧をして、駐留軍人とたむろしている。しな作って西海人に媚び売る女たちは、舶来の煙草を吸い、わざと舌つ足らずにローグランド語をあやつった。

運河沿いに出てしばらく真っすぐ歩き、こじんまりとした商店の立ち並ぶ通りに折れ曲がった。六件目に月餅屋がある。ラウ・ジャウ

ウは立ち寄って好物の胡麻揚げ団子を買った。その隣に立つ雑居ビルの、半地下になった一階店舗へ短い階段を降りた。張り出した二階部分のコンクリート壁に掲げられた看板には、赤い筆書きで「無老配達公司」とあった。

ドアを押し開けた瞬間、白い物体が襲いかかる。

「ぼふっ」

かばった腕に両脚と体重を掛けて毛ぐるみが舌を垂らす。

「ラオチュー、看板オスというより、関門だよなお前って」

目の隠れたむく犬はぼふふと吠えて尾を振り回した。

老犬ののべつまくなしな好意と巨体をやんわりとおしのけ、空の受付を左手に素通りして、入り口壁に「福」の字が倒れた事務所の中へ入っていった。

顔めがけて飛んできたゴム毬をとっさに団子の包みで打ちよける。

「何時に来てって言ったかしらあ、お姐さんは」

デスクに腰掛けたリン姐御が、いつもどおり左右三つ編み輪っかにした若作り頭を昂然と反らし、腕組んでいた。ゆうべ拝めたおみ脚が、革のパンツに消されているのを、ラウ・ジャウはちっとも残念に思わない。……とも言いきれない。

「犬も飼主も挨拶が乱暴な足技とはすてきな。……だから朝イチで来ただろ、……朝イチつつつたよな確か」

記憶が頼りなくなつて訊き返す。

「朝。 八！ 土管男の時計感覚はどうなつてんのよ。十一時じやないのよ、今」

「だから俺の朝イチだって。飯も食わずに来たんだぜ。何、不渡りでも出しそうとか？」

隅の事務机でタイプライターを打ちまくる事務員に向かってわざとらしく訊いてみる。忠実なるリン姐御のしもべ、ウーピン青年はかたちのよい頭を振った。「すぐく儲かっています」

そんなにも怪しい流通物があるのか、とうすら寒い気持ちにならないでもないが、それで食っているラウ・ジャウだから顔には出さ

なかった。

ゴム毬にじゃれついて遊ぶラオチューをまたいで、事務所中央にある黒檀の円卓の椅子を引く。

朝食の包みをひらく。

「それで後払い金はどこ。ほーらー、さっさと出しな」

「忘れた」

「つりあがる^{まなじり}眦は見ずともわかる。

「ラーウ」

「いいや、家に忘れてきたんじゃない」

前方は困惑の気配に変わる。

「ラーウー」

笑いまじりの猫撫で声を聴きながら、それが金切る非難の前触れと知りながら、ラウ・ジャウは揚げたての団子を無心に食った。

「あれは受け取らないほうがいい、リン姐御」

一段まじめな困惑をリン姐御がまとう。

「ラウ・ジャウ？」

指についた胡麻つぶを舐め、ラウ・ジャウは椅子の背にもたれて首の後ろへ腕組んだ。

「フランツ・カトラは俺の知り合いだった。軍隊時代の俺の相棒だった男だ」

「ウソ、土管仲間？」

《海鷗X》は土管じゃないって何度言えば。頷くラウ・ジャウは小さく溜息を紛らせた。どうやら閉所恐怖の気があるらしいリン姐御だったが、多数の潜水艇乗りを登録させている無老配達公司にとっても艇は大事な商売道具だろうに。

「もっと嘘みたいなことには、俺よりも三枚くらい上のボンボンだぜ。クアン財閥の御曹司だ。……だった、か」

ラウ・ジャウは卓上の新聞を引き寄せた。

「クアン財閥……」

リン姐御の声は心当たりをさまようように語尾を濁した。

一面の大見出しに占領軍高官宿舍爆破の字が恐怖を撒き散らすように植えられている。軍政幹部二人、民政駐留官五人を含む六十九人の重軽傷者を出したが、死者はなかったらしい。爆発の原因はまだ特定されていない。火元は地下のワインセラーの可能性があり、さらに上階ガス設備への誘爆が火災を広げた、と書かれてある。壊滅的に破壊されたセラーの状態からいつて自然発火とは考えられぬが、犯行声明の類いは出ていない。

犯行声明、か。

公に発表されているにも関わらず、気づけていないというだけかもしれない。

ふとそう考えて、俺もだんだん馬鹿になってきてるな、とラウ・ジャウは思った。お伽話を信じかけようとしていないか。

「なによそれ、じゃあフランツ・カトラの父親は戦犯ってこと？」
「そうさ」

クアン財閥総帥タウジン・クアンは政治家でもあった。政権中枢に身を置くことこそなかったが、莫大な財力と各国との人脈を背景として与党政権と密接に関わり、政策にも影響を与えたという。敗戦後、戦勝国群ローグランド同盟は、軍産特需を凶り国を開戦に導いた罪状で、戦争犯罪人リストにタウジン・クアンを連ねようとしていた。逮捕の気配を知ったタウジン・クアンは、自宅にて自殺を遂げた。

のち、占領軍政によってクアン財閥は解体され、クアン一族は関係会社の役員から追放された。

「ローグランド的にどうなのかしら、それ」

「知らないんじゃないか？ だから偽名なんだろ」

「フランツ・カトラはローグランドに有力なパトロンがいるのよ」「それも別におかしくない。ローグランドはツエーの顔をほとんど知らない。あるいは、もしかしたら親父さんの知り合いに拾ってもらったのかもしれない。親父さんは若いころローグランドに遊学していたらしいし、わりと人望を集めるタイプだったそうだ」

姐御の向こう、ブラインドの巻き上げられた窓の外は、壁のほう
が白く感じられるほどに暗い。暗転して場面変わりを待つ間のよう
に。

「で、で、で？ ふん。それとこれとに何の関係があるってわけな
のよ。まさか、友情割引き？」

いつときの脱線から興味を引く剥がし、リン姐御が足を組み直し
て詰問の調子に立ち戻る。

「町はやけにMPが通ってたな」

ラウ・ジャウはマイペースに呟いた。

「爆破事件があつたんですよ」

タイピング姿勢で声だけを聴いているウーピン青年が、寝坊のラ
ウ・ジャウが事件を未だ知らないと思つたらしく、親切に教えた。

「これだろ、高官宿舎」

ラウ・ジャウは青年に相槌しながら、卓上の新聞記事を指さし、
リン姐御のほうへ示した。「通称クアン・サロンね」

リン姐御の眉間が皺寄る。

「ちょっと、あんたにしちゃ話が回りくどいのよ。あたしが帰った
あと、何かあつたわけ？」

「あつたつて新聞に出てるだろ、爆破事件が」

「ラオチュー、ラウ・ジャウ好きにしちゃっていいでちゅよー」
ぼふっ。

「待て、説明するから待て！」

ゴム毬のごとく涎まみれにされてはかなわない。

「ラオチュー、お預け」

ラウ・ジャウの真横に垂直に立ってラオチューは寸止め、ハアハ
アと舌を見せ、もう一声ぼふつと吠えた。毛ぐるみに隠れて見えな
い目でしばしラウ・ジャウと見つめあつたのち、あきらめて忠実に
円卓の下へ潜った。

「姐御は商売替えても今以上稼げるぜ。……みんな随分と器用だな。
俺は劇作家じゃないから誇張はできない。だから事実だけ言っけど、

昨夜の復讐劇は姐御も見ただろう。あの後に会ったツェー・クアンは俺の前で官庁街に面する窓をひらいて爆破の瞬間を見せた。ツェーは復讐を否定しなかった。この国の今を認めないと言った。とりあえず事実はそれだけだ」

女王様はオレンジに塗った唇を噛んで無表情にラウ・ジャウを見ていた。

「社長、もしかして……」

いつの間にか茶を淹れてくれたウーピン青年が、盆を抱えて円卓の脇に立ち、険しい顔をデスクに向けた。

「だからさ、あの金は受け取らないほうがいい」

茶をすすり、卓に両腕を預けたラウ・ジャウは、彼に見返ったウーピン青年へ上目で頷く。

「高い料金で何を運んだんだと疑いをかけられるぞ。万が一にも取引がMPに知れたら」

「……何を運んだの」

ラウ・ジャウは上目を姐御のほうへずらした。

「それを知ったら店じまいなんじゃなかったっけ」

「苛々させないで、ラウ」

「うん、ビー玉」

言ってラウ・ジャウは椅子を立ち上がった。

「あんた何帰ろうとしてんのよ。ビー玉？」

「人魚姫が泡と消えないためにはどうすればいいんだっけ？ 王子

を刺した血がいるんだっけか。でも青いビー玉だったよな、あれ」

童話の記憶を揺り起こそうと目を細める。

その後頭部に無情な言葉がかかる。

「報酬払わないからね、ラウ」

「えっ」

あわてて振り返ると、当たり前、という顔でリン姐御が頭を反らす。

「だって後払い金は回収してこないし、そもそも我が社が当て馬に

されたってわけでしょ、あんたを釣るための？ いい面の皮だよ」
「《海鷗×》に飯食わせないといけないんだよ。ガソリン代くらい出してくれるよな」

「まさか」

女王、いきなり憤怒の瞳に変わって、にべなく却下。

ラウ・ジャウは肩をすくめる。

これ以上はおそろしい。

「甘ったれてんじゃないわ、どうせしこたま貯金してるんでしょ
うが」

「貯金とやりくりは別の話」

「いやーね。ボンボンってほんと、ケチで嫌」

片手を振って出ていこうとするラウ・ジャウは逃げの心地だ。

折りよく、外のドアの開くドアベルが聴こえた。

「お客さんだよ、じゃあな」

事務所の出口で、ラウ・ジャウは立ち止まった。

彼の目の前に入ってきたのは、黒いレースの傘を差した子供。

黒いエナメルの靴。黒いシルクの靴下。黒いワンピース。黒い手
袋。

降ろした傘の下から現れた、白い肌と黒のボンネット。

少女はボンネットと一緒に、その中にまとめて隠していた白髪を
解いた。

「……メイ……ファン？」

少女はじつとラウ・ジャウを見上げた。

人形。

肌を湿らす雨の匂いを漂わせていてさえ、その印象が変わらない
少女の、静謐な無表情。

「ミス・リン・リーは」

ラウ・ジャウから目を外し、メイファンは色のない唇をひらいた。
発音の流暢なローグランド語で訊ねた。

「あたしよ」

応えたデスクの姐御のほうへと、メイファンはラウ・ジャウをよけて歩いた。

デスクの正面、少しだけリン姐御から遠い位置に立ち、ハンドバッグから取り出した封筒を、斜め後ろにある黒檀円卓に置いてみせた。

「報酬の残りを忘れていったから、届けにきたの」

ウーピン青年がさかさず通訳し、彼女の言葉をリン姐御に伝える。

「それは助かることだわ」

「これで依頼はおしまい」

「領収しました。またのご利用をお待ちしているわ。誠実なお客のようだから。……ぶしつけを承知で、一つ、伺ってもいいかしら、昨日の舞台のときから気になっていたの、嫌なら答えないで？ あなた、西海人の血が入ってらっしゃるの？」

「いいえ、一滴たりとも」

「そう、じゃあ、いろいろとアンバランスなだけなのね。お年は訊かないわ」

「ありがとう。では失礼するわ」

くる、と踵を返し、メイファンは再び戸口へきた。

「メイファン、君は、知ってるの？」

自分がさせられたことを。

自分が演じる役柄の意味を。

知っていてツエーのそばで歌わされたのだろうか？

「彼はもうあなたには会わないわ。ミスター・ラウ・ジャウ」

メイファンは視線を合わせ、そう言っつて、彼女を足止めたラウ・ジャウを戸惑わせた。

「ツエーが言ったのか？」

「あなたは昨夜、哥哥^{グーグ}を裏切ったから」

「賛成しなかったことか？」

メイファンは非難の色もなく頷いてみせた。

深淵を蓋するような真つ黒な瞳はどこか、ツエーに似ていた。

「ごきげんよう」

立て掛けた傘を取って歩きだす。

「群島の祭壇を知っているか？」

追いかけるように問うと、暗い待合室の影から少女は白い顔を返した。

「半魚の像があつたでしょう。私が生まれ育つた村よ」

存在そのものが幽霊のごとき少女は影の中へ消えた。

ラウ・ジャウは密かに少女の後を尾けて彼女が租界の輸入書店に入っていくのを確認した。しいて尾けようとして追つたというよりは、彼も社を出て帰るところだったから、ついでのことだ。確かめるべきことがあつた。それがわかればラウ・ジャウの次の行き先も決まる。

劇場の一座は今は自由時間なのだろう。

彼は租界でタクシーをつかまえ、宮城外郭へ行ってくれと乗り込んだ。

「南4 9番辺りへ」

湾曲した運河に抱えられるような円形の首都中心部、逆目橋の南には、九十年前に廃された旧王朝の外城郭とそれを囲む堀と緑が点在する。立憲革命後に内城郭から内側は国立美術館として生まれ変わり、宮の保存がなされたが、外城郭部分は切り売られ、閑静で広大な住宅地域がそこに出来上がった。

そんじよそこらの金持ちが住める場所ではなかった。少なくとも立憲革命時代から三代続いているような商社、財閥、立憲元老の血筋、豪族議員、……そういう種類の血族たちによって、趣を凝らした庭園邸宅が昔建てられ、今も維持されて、深い緑の敷地に隠れている。

整備された道路が、迷路のように幾重に張り巡らされた外城郭を

ある程度単純に切り開いて、家と家とをつなげていた。

「お客さん、傘売りましようか」

4 9番の門扉前に停車すると、商売上手な運転手が中古の黒いコウモリ傘を束で差し出した。

状態の良さそうなのをこちらの言い値で買って、ラウ・ジャウはタクシーを降りた。

前に停まる別のタクシーをよけて車は水しぶきを跳ね上げ、走り去る。

ラウ・ジャウは太い鎖をかけられて封印された正面門扉を素通り、深緑のつるの生え蔓延る城郭をたどって右手にあるはずの通用門へあるいた。

鍵は開いていた。

水の滴る鉄扉を押しひらいて、ラウ・ジャウは中へ入っていく。

邸宅の前庭に横たわる堀は正門と玄関をつなぐ車道部分だけ埋められているが、ほかはほぼ九十年前の王朝時代からそのまま、苔むし緑色に濁った水をたたえてある。いくつか瀟洒な橋がかけられ、庭の散策道が設計されている。覗く堀には色もかたちもとりのりの模様を水底に沈めた鯉たちが雨の起こす波紋の下でゆら、ゆらと蠢いた。水面はやや低い。

「やっぱりここか」

橋の半ばに屋根をつけた四阿屋の手前、佇む人影の近くでラウ・ジャウは傘をかしげた。

雨に波打つ前髪のしたから横に見る目がこちらを見た。

無言。

「寛州に行ったのか。……また」

欄干に載せられた骨壺の、中身は濃い土だ。

寛州の黒い土。

「邪魔を……するつもりはない。門で待とう」

来るだろう場所を予想し、するだろうこと、しているらしいことも、近づくとつれ順に察して近づいたはいいが、神経のない土足の

ふるまいを今さら自覚し、ラウ・ジャウは踵を返そうとした。

「待て、ラウ。……スイは、おまえを慕っていた」

振り返ったラウ・ジャウは、堀に目を落として立つ男の横顔をわずかの間、見極めた。

「僕よりもということとは、なかったが」

ふと取り戻した兄の顔で、ツエーは言った。

「弔わせてもらえるか、俺も」

訊いたラウ・ジャウに、頷きが返る。

石橋の敷石を泡立たせるように降る雨の溜まりを、ラウ・ジャウは踏んだ。

欄干に肩を並べ、二人は一掴み壺の土を掴んでは、堀の水に撒く。その粒子のどこかに身体があつて、スイが、好きだった家の庭へと帰ってこられるよう。

スイは疎開先で死んだ。

中学校ごと移った街が空襲を受け、亡くなった。学園都市寛州の大空襲。はるか遠方の海上から飛来したミサイルの衝撃と火勢は、人々に避難場所を与えず、また崩壊と火災は、過ぎ去ったあとも人々から顔と名前を奪った。街中、焼け落ちた校舎の下からは、炭となった数万の死体が掘り出されたという。

だから、壺の中は校庭の土だ。

八年前ツエーが復員の途中に寛州へ寄ったときは、彼は何も持帰ることができなかった。

「明るい子だったからな。お前には似てない。スイとはすぐに仲良くなれたもんな」

兵学寮にスイが初めて兄に会いに来た休日のことを、よく憶えている。黒塗りのリムジンから降りてきた、まだ幼い面影の女学生が、差し入れの竹籠を抱えて面会室に入っていた。窓から見ていた寮の皆がそぞろに注目を移した廊下を、すると、普段ろくに仲間と口も利かない生意気な新入りが、慌てた走りで通り抜けた。誰しもぽかんとしたものだ。

ツェー・クアンは戦争の長期化による文系学部閉鎖で海士校に編入してきた特別学生だったから、純学生とのあいだには特に溝があったが、この日以来は可愛い妹のことを毎日からかわれて、徐々に孤立を保てなくなった。その弱みは彼に出来たほころびというか、糊だった。

ラウ・ジャウがスイと言葉を交わしたのは、二週後の休日、一人外出して街にいたところで、通りがかつたリムジンの窓から声をかけられたのが最初だ。海士校の生徒さんなら、兄に渡してほしいと言って、分厚い手紙を手に彼女は車から出てきた。家族の面会は月に一度しか許されていないから、スイは偶然を祈って街を車で流していたのだろう。一途な兄妹愛だった。戦地へ配属されれば葉書一枚すら滅多にままならなくなるだけに、今のうちという思いがあっただろう。少女にとっても戦時下の日々は心細く、兄の教えを乞わねば不安なこととてあるのだろう。家族の結び付きに感心したラウ・ジャウは、ツェーに提案を持ちかけた。休日にあまり一人で外出すると不審を持たれるかもしれないが、二人なら体裁が成り立つ俺が共犯してやるから、隣町で妹と会ったらどうか。ツェーは即座に苦笑した。それで君は誰に会うんだ、と訊いてきた。いないいな、とラウ・ジャウが首振ると、驚いた顔になった。呆れたような怪訝そうな、複雑な表情をしてラウ・ジャウを眺めた。

スイは実際、ツェー・クアンの弱点だった。ツェーはわりと素直に提案にのってきた。

縁のはじまりが、スイだった。今、並び立つツェーがラウ・ジャウを寄せ付けるのも、ここにスイが居るからこそ自然なことだ。

「スイのためでも言うなら、俺はお前を許さないぞ」

「スイをなくした、僕のためだ」

「そっちでもな、俺はお前の邪魔をしてやる」

「もう止めることは無理だ、ラウ・ジャウ」

「スイは望まない」

彼女は明るく澁刺とした娘だった。いつも笑顔でいた。お喋りだ

った。家族や友達のことを照れもなく話した。人が好きだった。だからスイは、堅牢な地下壕のある自宅にとどまることをよしとせず、仲間と一緒に寛州へいったのだ。

「スイは、お前を誇りにしてたんだぞ！」

横顔へ向いて、その頑固に叩きつけた。

(俺は天邪鬼だが、お前は我儘だ。沈着の下は、昔から……)

ツエーは軽くなった骨壺を手に取り、堀の水面へ腕を降ろし、そつと落とすように、沈めた。

白磁の肌が藻に吞まれて、輪郭をなくし、淡いまるい光のようになり、底に消え入った。

守れなかった命の光を悼むように、彼はそれを黙って見送る。

「ツエー、勝ったからとか、負けたからとか、そういうことじゃないだろう。俺達は戦っていたんだ。やるべきことをやった。スイの期待だつてそこまでだ。妹らしい願いはもつと別にあつただろう。

でもあの時代には、戦う兄を鼓舞するしか出来ることはなかったんだ。結果は誰のせいでもない。あれは、戦争は、世界が繰り返してこじらせる風邪みたいなものだ。人を恨む筋合いじゃない」

「……それにしては作為が大きいな」

冷然と彼は呟く。

作為とは、人の思惑と関与のことだ。

あの戦争。

切り分けられるべきチーズがネズミの巢に変わること怖れた西海人が剥いた牙。先に爪をかけたネズミの悪知恵。一事が万事、転がりだした両者の闘争は善悪の判定権を奪い合い、残虐さにおいてしのぎを削った。

かくて正義は勝者の手に掲げられた。

学園都市に夥しい数ミサイルを降らせて無辜の市民を虐殺した同盟の言い分は、攻撃目的は学校疎開地指定にカモフラージュされた兵器製造施設だったというものだ。

欺くためにわざと子供たちを集めていた敗戦国政府こそが、悪で

あると決めつけられた。

そして、それ自体はありえないこととも思えなかった。ラウ・ジャウもツエーも、政治を間近に育った。個人が潔癖な考えを持って国のすることを眺めれば目が潰れると知っている。同盟の主張は同盟にとって正しいかもしれない。だが、だからと言って、正当化される虐殺などないと、感情が抗弁する。

そもそも惨劇を成立させた駆け引きそのものを、作為と感じ、母国もローグランドも許せなく思う気持ちはラウ・ジャウにもある。

「許せないから国に向かって戦争するのか。馬鹿げてる」

「復讐だ。それで僕の気が済む」

骨と骨のぶつかる音が雨に溶けた。ツエーを殴りつけたラウ・ジャウの拳はすぐに冷やされる。頭にのぼった血は自制でしか戻せない。

睨みつけるラウ・ジャウの目の前でツエーは、顎を押さえもせず傘を拾った。口の端から鮮血が滲み出た。踏みとどまったのはまともにラウ・ジャウの拳を受けようとしたからだ。どこまでも意固地だ。

「気が済むだと……」

国と国との利害衝突よりもなお、夕チが悪い。

個人の感情で、世界に混乱を持ち込もうなどと。

「これ以上は待てない。充分すぎるほど時を費やした」

「ツエー」

転がるコウモリ傘とラウ・ジャウのあいだを通り抜けて去ろうとする相手にかけられるのは、かすれた繰り返しだけだ。

「させないからな」

「止められるものなら」

どこか生意気な冷笑の思いを含んだような声を残して去った。

やってみる。できるだろう？ 友情と手段にこだわらず、頼るべきところを頼ればそう難しくなく親友の身柄を押さえることが可能だろう。でも、おまえにそれが出来るとは思えない。そう見抜

いているようだった。

信頼されているのか、見くびられているのか、よくわからない。実際、ラウ・ジャウを計画に関わらせて動機もあましさえも明かすのは、感情を脇へ置けば相当にリスクのあることだ。何のコネもない一般庶民ならともかく。

ラウ・ジャウは取り上げた傘の柄を肩にかけ、欄干へ背を預けた。頭上、傘に当たる雨粒の協奏が、しばらく無心を許した。

わからない……。

車の遠ざかる音を聴いたあと、振り向くように、庭の奥を見上げた。

四阿屋越しに瀟洒な邸宅は朽ちる気配なく永らえている。今は誰も住んでいない、その邸だった。すべての窓の鎧戸は閉じ、陰鬱に雨を浴び、押し黙って歴史を封印している。

邸が一発の銃声に震えたのは、……ラウ・ジャウたちの復員から一カ月経たない頃だったか。

敗戦の日を越え、海から戻ってきた彼らに突きつけられたスイの死と、家路の荒廃。

飛び地の焼け野が原、瓦礫の山。 首都には人が、少なかった。

市民は都市から離散したのだった。孤児とドブネズミの姿が目についた。そのうち占領軍が上陸してくると、彼らに押さえられたメディアが旧体制と軍を声高に非難しはじめた。

ラウ・ジャウはあの日は、運河に《海鷗X》を見に行つて一日を過ごしていた。

……スクラップにされるだろう潜水艇は武装を外され、オイルを抜かれ、ほかの艦艇と折り重なるようにつながれていて、すでに占領軍管轄となった桟橋には降りて近づくこともできなかったが、家に居ずらい彼には、いよいよ他に行くところがなかった。運河の景色は飽きもしなかった。

夕暮れにツエーが来た。ラウ・ジャウを探して来たわけでないことはすぐにわかった。居るところがなくなったのだ。そういう顔を

して来た。

《海鷗X》を見下ろして立ち尽くすツエーに、何かあったのか尋ねたラウ・ジャウは、タウジン・クアンの自殺を知ると同時に、親友が理性のタガを飛ばして崩れる姿を初めて目にする事になった。かけられる言葉は少なく、時代にかげがえない身内を奪われていく友を悲しく思い、そしてわずかに、ツエーが家族に持てる悲しみを羨ましく感じていた。

家と折り合いの悪いラウ・ジャウにとっては。

だが、あのとき、ツエーの中で起きていた変化は、そんな天邪鬼なラウ・ジャウの羨望がイメージするようなものじゃなかったのだ。愛は生易しいものじゃない。

狂気を生むのだ。

ラウ・ジャウはあのときと同じように、途方に暮れ、傘越し重たげな空を仰いだ。

情景ばかりが脳裏に浮かぶこの場所には、時が流れていないようだ。

そういう場所で一人でいることに馴染んでしまう自分も。

「思い出ばかりで止まってるな」

たしかにフランチ・カトラの言う通り、俺達は死んでしまっているのかもしれない。

?

?

遙か太古の精霊時代。月が落とした涙が島になり、人魚たちが住み着いた。人魚の歌は大地を海にさまよわせ、大陸移動のエネルギーにかきまぜられた海は熱く煮えたぎり、初めの生命が生まれ たという。

内奥内海に浮かぶ群島の、最も小さな島に伝わる伝説である。

月落島、という通称は、現地对岸の主流民族が付けた名前で、島には主流民族の文化が流入する一方、原住民独自の生活様式と言語も共存して残る。原住民とはいえ、目と髪の色、顔付きは我が国の主流民族とほぼ変わりがない。

共通する精霊時代の神話概念に見られるように、同根と言える出自を持つ人々なのだろう。

月落島の伝承の一つに、人魚と混血した村の記録らしきものがある。その村の人達は不思議な歌声を生まれ持つ、と民話は語る。島の口はその村のありかについて固く、外部の史学者による特定は未だなされていない。

そういう場合は、むしろすでに島全体が伝説の末裔なのであることを疑ったほうがいい、とラウ・ジャウは読みながら考えた。どこかにあることにして、全体を隠しているのだ。そのくらいの知恵がないわけがない。しかし社会的に進んだ主流民族の傲慢さは、原住民を無垢なものとしたがる。

かび臭い図書館での調べをその辺りで切り上げる。

ラウ・ジャウは人の少ない 逆目橋 の大通りに出た。街路の時は計は四時。雨はまだ降り止まない。

ここからは見えないオペラハウスの方向を見やるが、何の予感も湧かない。

彼の言葉をそのまま取れば、破壊活動は続けて起こるはずだ。だが反面、そんなことが可能だろうかと思う。

警戒態勢に入ったろうMPと官憲が、爆発物を見つけないということがあるだろうか。

場所が無差別ならともかく、標的は占領軍が政府の施設に限られるはずだ。

見つけにくい、辿りにくい、何らかの方法でもないかぎり……。

(人魚の歌、か……)

本当に、存在するのだろうか。

メタファーではなく、劇でもなく、現実として。

ありえない、とまだ思う。

ラウ・ジャウは中央棧橋へ歩いた。そこからボートバスの切符を買って第五区棧橋へ向かう。《海鷗x》の中で作業着に着替えて、ガソリントankの洗浄作業に取り掛かる。小屋から持ち運んだポンプで消化剤と混ぜて駄目になったオイルを抜き出し、洗浄液を注入する。ブラシをかけて、洗浄液を吸い出した後、送風装置を仕掛け、薬剤の気化を早める。棧橋のガソリン屋で知った時価に肩をすくめた。台車を押して戻ってきた係留橋から赤紫の陽に照らされた運河を眺めると、ひしめく船の器用に行き来する相も変わらぬ風景。戦後すぐは、地方へつながる道路も鉄道も爆撃による寸断で使え物にならなくなっており、運河路が物資運搬の生命線だった。今に至ってもそうだ。《海鷗x》たち潜水軍艇がスクラップを免れたのは、運河の水深も有効に使って交通量の確保をひるげようという暫定政府の方針による。

ラウ・ジャウは姉に借金して《海鷗x》を買い取った。

レストアと係留費にかかる額の半分で、軍からもらっていた給料が吹っ飛びかけたところに、まがりなり軍開発の新鋭艇である《海鷗》に目を付けて声をかけてきたのがリン姐御だった。

運送業へ就く艇に求められるのは積載量であって、速度を重視した小型設計の《海鷗x》は就職活動には苦勞しそうだった。しかし

リン姐御の要求はすばり速さと小回りと、金に目がくらんだ操縦士だったので、ラウ・ジャウは迷わず契約した。どんな犯罪の片棒かつがされるかわかったものじゃない仕事内容だが、丘のことなどどうでもよかった。《海鷗X》に乗っていられば。

それに、法をくぐると言っても大半は占領軍が決めた検閲要項や流通禁止物に触れるという意味でのものだ。運河運営当局の抜き打ち捜査に引つ掛からないのは、リン姐御が手を回しているのもあるが、当局員の敗戦国感情も買収が容易に利く一因だろう。

情けない、微々たる反抗ではあるが。

反抗。ルサンチマン。自分にもあるのかもしれない。チンピラ運送業でローグランドの鼻を明かす気になっているのだとしたら、復讐者に偉そうなことは言えない。

仕事終わりの整備としてフィンを掃除し、各種タンク排水口を目視点検したのち、クレーンを降ろした。

目の前を下がっていく、二つのハッチ。

日は暮れた。

夜八時、開演の時間だ。

ラウ・ジャウは昨夜スクーターを預けっぱなしにしたらしいことを今更思い出して租界に足を向けた。

昨夜と反対の道から近付き、見上げたオレンジに映えるオペラハウス。チケットを持っていないラウ・ジャウは、今夜はその建物に入れない。

ロータリーで昨日見たような黒服を掴まえて、キーを返させた。

周辺にMPの警戒はどんな意味でも張られていないようだ。租界を流すポリスカーの数は多いにしろ。

(白髪の少女に歌を歌わせるな、か。俺が狂人あつかいだな)

ラウ・ジャウはロータリーの向かいからしばらくスクーターに掛けてオペラハウスを見上げていたが、やがてハンドルを返し、家路を取った。

家に帰り着くと、玄関ドアを開ける前から電話が鳴っていた。

慌てずに、羽根をばたつくフウフウをなだめつつ受話器を取る。

耳に遠く、不機嫌な声が聴こえた。

『私だ、やはり帰っているな』

父だった。

「一週間いなかったけど、そのあいだに電話を？」

『いいや、さつきからだ。今から私のところに来い。話がある。党本部だ』

それだけ言つて一方的に切れた。通話孔に顔をしかめる。

態度としては大体いつもこんなものだ。しかし、寄り付かない息子に腹を立てていても無理やり呼び付けるようなことは今までにそれほどなかった。ゆえに意味合いを変えてラウ・ジャウは顔をしかめ直した。何か……。

党本部に呼んで見合い話ということもあるまい。

まして母への誕生日プレゼントの相談という訳でもなさそうだ。

「フウフウ、また留守番だ。悪い」

ダイヤが慢性遅延気味の地下鉄を使い、
逆目橋 北東側の官庁街へ出頭した。

議会場の裏手、議員会館の隣に建つ与党本部ビルは背の低い赤レンガのクラシカル建築で目立つ。公安部派遣の通常警備を横目に、ラウ・ジャウは父の秘書である義兄を受付で呼び出した。内線はすぐに上がって来いとこの返事。

「遅かったな」

応接と執務の二間続きになっている役員室のデスクで迎えた父は、義兄を後ろに立たせて従え、黒光る机上に仕出しの夕食をひろげていた。

「お久しぶりです、パパ。大哥も。^{ダグ}地下鉄が遅れていてさ」

「何故タクシーで来ない」

「昼間も乗ったから気分を変えたんだよ。相変わらず改善がみられない地下鉄だつてことがわかったよ」

「見越したわざとだろう。まあいい、突っ立っていないで座れ。お

前の分もある」

ラウ・ジャウはデスクの前のテーブルを見やる。父と同じ仕出し料理が用意されていた。

ポケットに手を通り込み立っていたラウ・ジャウは、しぶしぶソファに座った。

ガソリン代で財布に手持ちの金を空にしたため、夕飯を食いはぐれたラウ・ジャウではあった。デザート皿に胡麻揚げ団子を見つけずかさず摘む。

「占領軍から照会がきている」

箸を手に取りながらラウ・ジャウは目を上げた。

「クアンの息子が帰ってきているそうだな。会ったか」

「ツエーが？」

揚げ茄子餡かけに箸をのばす。

ラウ・ジャウは次に呆れた声を出した。

「息子のツエーまでマークされるのか。あそこまでクアンを根こそぎにしておいてか」

「正確には、その僚友の君までをだ。ラウ」

義兄が口を挟む。

「その様子では、すでに会ったな。初耳であれば、おまえが所在を問わない訳がない」

「そんなこともないさ、なにしろコンビは解消しているし」

食事に向いたまま目を細めてラウ・ジャウは父に返した。

「知らぬ振りが賢明だ。その調子だな」

突き放すような父の言に彼は振り向いた。

「何かあったのか？」

「何も。ローグランドも人に言われて確認を取ってきただけのようだからな」

爆破事件と結び付けられているわけではないということか。まだ。

「人に？」

「オペラハウスでの公演のために入国している一座の主宰が、ツエ

「クアンに似ていると、クアン家と親交があった複数の客から伝わったということのようだ」

言葉を受けて義兄がデスクを回って歩いて来、紙挟みに挟んだ書類と夕刊をラウ・ジャウに差し出した。

書類の一番上に挟まれた一葉の写真には、シルクハットの西海人初老紳士と並んでツエー・クアン いや、自信に溢れる芝居がかった顔をしたフランツ・カトラが収まっていた。背景のマントルピースには初老紳士の家族と思しき人々の写真が飾られているから、場所はローグランド、そして国力の豊かなローグランドの中でもおそらく、かなりの邸宅と言えるような家だ。

「彼には才能があったようだな」

比べて自分の息子はいつまでもうだつがあがらない、とでも言うように父。

ツエーは元々は文系学生だった。幼少から軍人志望だったラウ・ジャウとて、一度は成りたいものに成った。皮肉なことに、存在理由であるはずの戦争がラウ・ジャウの職を結果的に解体した。それ以前に戦争はラウ・ジャウの抱いていた志を解体したから、職の消滅に思う気持ちはけして怒りや悔しさではない。けれど空しさは否定しがたい。

夕刊には爆破事件の続報の下に小さく公演の成功をつたえる記事が、肖像入りで載っている。

事件がなければ一面冒頭記事だったのかもしれないそれを、事件に関わることがなければラウ・ジャウは一体どういう気持ちで眺めていたろうか。

「この紳士は誰なんだ？」

紙挟みへ戻り、ラウ・ジャウは義兄を見上げて訊いた。占領軍からの照会を受けてから集められたはずの資料だ。すでにローグランドでのツエーの写真まで手に入れていることに舌を巻かざるを得ない情報力の取りまとめは、義兄の実力だろう。

「ツエー・クアンのパトロンだ。フランシス・スチュアート。ロー

グランドで五指に入る大実業家だが、本人はすでに一線からは引退を表明し、文化福祉方面に積極的且つ道楽的に関わって余生を過ごしている。書類は氏についての資料だ」

「六番街スチュアート・ビルのスチュアートか」

「そうだ」

ならば写真の老人はモーターリゼーションの権化のような大企業の創業者だ。ラウ・ジャウが昼間乗ったタクシーも、租界をオペラハウスに向かうリムジンも、スチュアート・モーターズのエンブレムを鼻面にくっつけて走っている。

「彼は、タウン・クアンのローグランド遊学時代の知己でもあるのだ。タウンジンがその名を親しげに持ち出すのを聞いたことがある」「パパは会ったことないのか？」

ローグランドでの滞在経験を持つのは父も同じだ。当時財閥御曹司であったタウン・クアンのような派手さとは無縁のものだったとしても、駐在外交官の息子として、また戦後は開戦反対派議員としての面目躍如、暫定政権から現政権にかけ内閣の重要ポストを昇りローグランドに太く知脈を通じる政治家として、誰と顔見知りでもおかしくはないし、だからこそその、この情報収集力だ。

デスクからやれやれという溜息が聞こえた。

「無論ある。子息である現会長が我が国へ来たとき相応しいホテルの手配がつかず、だから家に泊まってもらっていた。お前は呼んでも来なかつたが」

「ああ、三年前のあれか」

姉が新調スーツを贈ってよこしてくれたのが、確かそのときだったはずだ。車屋が営業をかけた程度に思い、再三のプレッシャーを受けても家に顔を出すことはなかった。そんなことも記憶の砂底にさつさと沈めていた。

スチュアート関係で手にした筆笥の肥やしだが、今度ゆかりの人物に呼ばれたとき役に立ったのは奇なる縁だ。

「とにかくも、スチュアートがバツクについている人物には、所詮

ジエネラルがトップの占領軍司令部は容易に探りを入れられない。代わりに、お前に面通しをさせたがっている。その前に話を訊いておこうと思ひ、ここへ呼んだのだ」

父は声音を変えずに聞き捨てならない説明をした。

「ずいぶん大袈裟な話じゃないか」

「依頼はお前の所在不明を理由に当座躲してあるが……」

「何も俺じゃなくてもツエーの知り合いくらいいくらでもいるだろう。クアン夫人だっている。……夫人は今どうしているんだ？」

ツエーとスイの母親は、娘と夫を亡くし息子が行方をくらませたあとは実家に身を寄せたと噂に聞いていた。

「実家のホン家で何不自由なく暮らしている。精神的には今でもかなり参っているという話だ」

気の毒な話だ。

「それは置いといても、どうも引つ掛かるな。なぜ俺なんだ。占領軍が……」

「ラウル・ジャウツァイ。本当にわからないのか」

横合いから堅い声を落とされて、ラウ・ジャウは義兄を仰いだ。

苛立つように眼鏡を押し上げる姉婿の顔はいつになく厳しい。

「何？ 何のことだ？」

「少しは丘の事情にも気を払うべきだ。君は私達を云々する前にまず自分の立場がわかっていない。占領軍に平素からリストアップされているのはクアンの息子だけじゃない、君も同類なのだ」

「……俺だと？」

驚きより心外さが先にきて目をひらいた。

引き取ったのは父だ。

「おまえの怪しげな商売のことを彼らは知っている。ということは、お前に反占領軍政の気があることもな。彼らはしかし手綱のゆるめ方を熟知しているから、小規模な闇流通を問題にする気は今のところない。占領軍の裾のほうはリー・ファミリーとも裏でつながっているのだろう。実際、一時期の治安維持には彼らマフィアを使って

いたわけだからな」

「信頼関係じゃなくて、金のやりとりの話だろう。そのくらいは俺だって薄々知ってるよ。占領軍人も聖人君子じゃないんだ、私腹ぐらい肥やすさ。彼らも、つけこむ敗戦国民も、持ちつ持たれつの化かし合いでやってるんだ。五分の話だよ」

「権力も財力もない一介の敗戦国民なら、な。なんとでもなる」

「俺は違うと？」

内閣官房主席ラオゾー・ジャウツアイの長男であることがか。

次かその次には国家主席の座につくとも噂される父が、偉大な政治家であることは認める。だが、父の跡を継ぐつもりはないし、ラウ・ジャウには資格もないだろう。

「チンピラの息子を持ったぐらいで上から嫌みを言われて睨まれるような地位を相続するのは御免だね。占領軍も小姑みたいな心配をしてないで、やることやれって感じだ」

反抗的なボンボンが財と人脈でけしからんことを始めやしないか気にしているなら杞憂、まあ、そうとも言えない現状が他方に展開されつつあるのが困ったところだが、政治的な意味に限った懸念ならば、政治家個人の信用や影響力までは一朝一夕に引き継げるものではない。家に寄り付きもしないラウ・ジャウには今更無理だ。「いつそ勘当してくれるってのはどう、パパ」

「占領軍が主に考慮しているのはお前自身の経歴だ、ラウ」

「……どういうことだ」

「大戦中現役の『《海鷗》乗り』生き残りはお前とツエー・クアンだけだ。海軍緒戦から中期までの『《海鷗》』の活躍は今でも国民の心に刻み込まれている。私としても、お前を後継にできれば反ローグランド感情を持つ有権者を取り込めると考えたことはあった。私はそこが弱いからな」

ラウ・ジャウはそれを聞いてもう少しで箸をテーブルへ叩きつけるところだった。だが衝動は自嘲の笑みになんとか切り替えて、昇華させた。

父の言いように感じた怒りではない。

「大戦のヒーロー？ ……まさか。国民はそんな風に思っちゃいな
いさ。みんなの顔は復員兵をこう言って迎えていたよ、『ああ、死
ねなかつた奴らか』。夫をなくした女の目付きはこうだ。『死なな
かつた人たちね』」

責めるでも憎むでもなく、敗北が突き付けた現実を目を覚まされ
た人々の視線はただただ事実を見つめ、真実をえぐり出していた。
人々を鏡にして帰還者は自分の姿を見た。敗残兵の命の醜さを。「
八年しか経たないんだ。むしろ、旧軍否定は順調に進んでる今じゃ
ないか」

「個人の印象など私は話題にしていない。争いに必要なのは流れと
大義だ。大義は物語とも言う。国民は《海鷗》の物語をまだ憶えて
いる。もっとも、絶対に勝てる選挙というのもない。故にこそ流れ
のコントロールが肝要なのだ。流れが勝負を決めるのだ。仮にお前
が表舞台に出たとして、占領軍は扱いにくい駒を望まない。勝敗の
確率は半々と言ったところだろうな。奥の手として占領軍が闇商売
の件を持ち出せば、確実に負けた。わかるか？ お前の稼業が今ま
で黙認されてきたのは、ラウ、いざとなれば、《海鷗》の栄光を裏
商売で汚したとして物語を壊し、お前を簡単に追い落とせるからだ」
「……なるほど。だけど、俺はそれでかえって都合がいい。過大評
価は気に入らないがね。まあ、八年ぶりに国へ帰ってきた元相棒の
とばっちりでまとめて監視対象に引き上げられる煩わしさを除けば、
悪い身分じゃない。踊っているのは周りだけだし」

「踊り、か。本当にツェー・クアンの舞台に興味はないのか？」

父が、めずらしい神妙さで問うてきた。

粥を喉に詰まらせかけ、なんとか食道に飲み込んだラウ・ジャウ
は身体ごとデスクのほうへ向き直り、父親の顔を窺う。

鎌かけか？ それとも。

「爆破事件を知っているな」

「クアン・サロンだろう」

父は口を閉じた。何か言いよんだのがわかった。

「ラウ・ジャウは父と義兄の沈黙を交互に見、勘を働かせる。」

「まさか、また今夜もあつたのか？」

「お前の到着する少し前に情報が入った。今夜のそれは世間への影響を考えて公表されないかもしれない。小規模のぼやで済んだ。ジエナルルの転々するホテルの部屋の一つから出火した」

「ラウ・ジャウは思わず窓を見た。八割ひかれたカーテンの隙間に雨の筋の光るガラスが黒く見えた。急に雨音が耳に大きく捉えられ始めた。」

「雨……」

「雨がどうかしたか？」

「……いや。……ツエーを疑っているのか」

「符合が気にかかるだけだ。私が知りたいのは占領軍が彼を疑っているのかどうかだ」

「俺に訊いたってわからんよ」

目を細くした父は息子の中にある情報を盗み見ようとしようだったが、やがて疲れた溜息をついた。

「彼はなぜ身分を隠して登場したと思う。お前のように家の名前を嫌い抜いていたわけでもなかるう」

ジャウツアイの息子はけして人に本名を呼ばせなかったが、クアンの息子はとくだん家の名を気にする様子はなかった。もちろんツエーは家族を愛していたからもあるだろうが、しかしクアン家というもの、財閥というもの、父親の公の顔というものについてどう感じ、思っていたかは、それだけではわからないし、ラウ・ジャウは知らない。少なくとも否定を口にするだけはなかったが。そもそも好き嫌いで断じるには、クアン財閥は巨大で複雑過ぎた。

学友達であれ隊友達であれ、親ローグランド派の代表ジャウツアイの息子と常に国家主席以上の力を持つとされるタウジン・クアンの息子のそれぞれについて、興味と先入観をそう長く持ち続けたりもしなかった。戦時下の軍学校と軍隊の連帯とはそういうものだ。

嫌われるときは個人が嫌われる。個性を隠しようがない生活であり、局面の連続だからだ。

「ツェー・クアンという人間は死んだからじゃないか？」

「確かに、名を変えるのも一つ再生の手段ではある。我が国のように」

言わなくていいことをわざわざ言ってみせる父は相変わらずだ。

神経がないのではなく皮肉屋なのだ。

デスクの電話が鳴り、義兄が取るうと歩みかけたところを父は掌で制する。

「はい。私だ。　なんだと」

父の応答が鋭くなる。視線をラウ・ジャウへ向け、眉間に皺寄せた。「通せ」

珍しく苛立つように音立てて受話器を戻した。

「議員」

「？」

二人の息子に怪訝を向けられつつ、苦虫を口に放り込まれた顔で父は革椅子に背を沈める。

待てばわかるというように黙り込んだ。

ややしてラウ・ジャウは人の気配に廊下のほうを見た。そろそろと来て応接室のドアを激しくノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

踏み込んできたのは占領軍警察の制服を着たローグランド人が六人ほど。

「ラウル・ジャウツァイ氏に召喚状が出ている。同行願いたい」

先頭に立って応接室と執務室との境を越えた中年少佐は、きびきびと動く相貌の中の青い瞳で部屋を見回し、ラオツォ・ジャウツァイに敬礼し、用件を述べた。

「召喚だと？」

言ったのは父だった。

「はい、閣下。彼がご息子のラウル氏で間違いありませんね」

「法根拠を訊いても？」

義兄が眼鏡を押し上げる。

「軍の治安維持権限だ」

…… ラウ・ジャウはおもむろに立ち上がって膝を伸ばした。

「何かよくわからんが、久しぶりに挨拶しに寄つたらとんだご挨拶が押しかけてきたもんだな。取り敢えず行くよ、パパ、……ご馳走様でした。ママに宜しく。 姐シエに宜しくな、大哥ダイグイ」

「シャオランの誕生日にも帰ってこないつもりか？」

「多分ね。水の中は日にちの感覚を保つのが難しいんだよな」

適切なことを、と父は嘆息で見送った。

MPたちのあいだを擦り抜ける勢いで部屋から出たラウ・ジャウに、戸惑ったように一瞬出遅れた下士官らだったが、困む陣形を素早く取った。

「お騒がせしました。閣下」

背後で中年少佐の慇懃な挨拶が聞こえた。

占領軍警察本部の取り調べ室に案内されたラウ・ジャウは、元は銀行だった建物の簡素な白壁を眺めて10分程度独り待たされてから、入室してきた若い東海系の少尉の敬礼を受けた。彼は名前と所属を名乗り、自分は通訳だと言った。

「通訳は必要ない」

ラウ・ジャウはローグランド語で返した。

「それは失礼しました。ローグランドにいらしたことが？」

ローグランド軍の制服を着た中肉中背の東海人というものは、おしなべて似た印象を与える。どこが、とは言いづらいが、恐らく私服で街にいても顔で彼らの見分けはつく。育った環境の違いが、骨格の似通った顔に如実に差異として現れるからか。

二世か三世だろうと思われるジェイジェイ・ヤン少尉のローグランド

ンド語に劣らぬ早口でラウ・ジャウは答える。

「いや、ない。ないが、ガキの頃はローグランド人やら西海人の子供がよく家に来ていて相手させられたんだ。そんなのはいいが、なぜ俺に敬礼をしたんだ？」

ヤン少尉は照れたように苦笑しながら、バンカーズライト一つが置かれた事務用机の横に立った。

「あなたは元大尉でいらしたんですね。退役されたとは言え、職業軍人同士、当然です。しかも、《海鷗^{フラウンダー}X》に乗られていたのでしよう。やはり、当然かと」

「《海鷗X》がローグランドでもそんなに有名か？」

「ええ、てこずらされましたからね。脅威だったと聞いています。ですので、半分は僕として自然に出てしまった畏敬ですよ」

弱い敵よりも強い敵のほうが勝ったとき気持ちが良いものだから、ローグランド国民から見た我が軍の実力評は幾分誇張されている部分があると思う。ただ、《海鷗》シリーズは唯一、戦争末期まで鹵獲を免れた自力開発艇であり、相当の新技术が織り込まれた最新鋭艇であったので、畏怖のかさ上げもむべなることかもしれない。

「それに、実は僕は……」

言いかけたヤン少尉は廊下の靴音に顔を向け、扉をひらいた入室者を敬礼して迎える。

今度入ってきた二人はともに大柄な西海系ローグランド人である。

一人は連行に当たったシルバークレイの髪のパール少佐。もう一人は書類とノートを抱えた書記らしき赤髪緑瞳の青年で、階級章は大尉であることを示していた。大尉がラウ・ジャウの対面に座り、パール少佐はヤン少尉と対角線上になる机の角へ立った。

「いよいよ姐御の神通力も効かなくなったか。商売道具も没収か？」
先んじてラウ・ジャウは少佐に問うた。「くっそ、オイル満タンにしたばかりなのに」

召喚の理由はまだ教えられていない。下手に予感していた素振りは見せられない。といって、とぼけて怯えてみせようとしても演技

力に自信はない。蓋然性の高いほうを取りつつポーカーフエイスでいくしかなかった。ラウ・ジャウが官憲に引つ張られておかしくないと普段から覚悟している理由のほうを、だ。

「母国語を介する必要はないということだね」

少佐はラウ・ジャウの意を了して頷き、背中に両腕を組んだ。

「その前に形式を。 当聴き取り室での聴取内容は、ロバート・スピーアー大尉が記録する。立会人はジェイジェイ・ヤン少尉。聴取官はモーリス・マツカラン・パーシバル少佐である。発言は正直に願う。では始める。ミスター・ラウル・ジャウツアイ、その質問の答えは取り敢えず保留して、こちらからまず訊かせてもらいたい」
ラウ・ジャウは机に頬杖ついて、正面のスピーアー大尉がひらいた記録ノートを覗いた。

「君は昨日午後八時以降に明真相界のオペラハウスに入場していたかね」

「オペラハウスに？ 何故だ」

「質問に質問で答えなくてくれ、ミスタ・ジャウツアイ」

「入場していたが、何故だ」

質問の意図と、どうしてそのことが知られているのか、両方の意味で訊いた。質問の意図のほうはわかっているが、眉を顰めざるを得ないのは後者のほうだ。

「君と、君が会いに行っただと思われる人物との、共通の友人からの情報だと司令部からは伝わっている」

「……ジェイユン・チェンか。そうだったな、とラウ・ジャウは納得する。悪意あつての情報流しとは思えないが チェンが二人の名に不穏を予想できる筈もない、と行って、彼にとってビジネスは友情やデリカシーよりも前に来るものなのは間違いない。夜毎どこかの催しやパーティーにパイプ作りのため出入りしている彼のこと、偶然の話題か、自分から進んでちよつと洒落た情報売りしているか、あるいは占領軍側の誘導による協力関係か……いずれそんなところだろうと考える。」

「君は誰に会いにオペラハウスへ行つたのかね」

「人に会いに行つたわけじゃない。オペラハウスとは観劇をする場所だろう」

ラウ・ジャウは聴取官の青い瞳を見上げて淡々と答えた。

「そうかね？ 君の友人の話及び、私達の持つている君のプロフィールによれば、あの手の場所を好む君ではないようだ。なぜ、昨夜に限ってオペラなど観に行つたのか、教えてくれるかね」

胸の前で組み直した腕に、パーシバル少佐は指をたたいた。

ラウ・ジャウは頬杖を外し、顎の骨を搔く。

「落としたい女がチケットをくれたからさ」

「それはもう、半分以上落ちてるんじゃない？」

向かいからきよとんとした緑の瞳をひらいてスピアー大尉。

「値踏みが好き猫女だからなあ。すぐあとで怒らせちまつたしね」

趣味がわからない、という顔で肩をすくめる田舎顔の大尉。

「そういう女性は弱点も多いものだ。研究を重ねれば攻略はたやすい」

余裕の調子でパーシバル少佐。

「弱点の毛ぐるみがまた関門なんだが……」

空気の緩んだせいであくびが出た。すかさず少佐が身を乗り出して畳み掛けた。

「公演の一座主宰が君の艇の元クルーであることは知っているのかね」

「今日の新聞で写真を見たよ」

「彼、ツェー・クアン元中尉と会つたのはいつが最後かね」

「八年前の十二月二十一日の夕方」

「それ以来連絡を取つたことは」

「ない」

「昨夜君はツェー・クアンと会つたはずだ」

「ハツタリだろう？ 引つ掛かりたくても引つ掛かれないさ。俺は昨夜ツェー・クアンに会っていない。暗いオペラに飽きた女が幕間

に帰ると言い出したから俺も帰った」

パーシバル少佐は目を閉じ気味に首をひねった。

「偶然で説明できると思うのかね」

「何故できないと思うんだ……？ あんたたちは？」

「どうにも解せない。」

父から占領軍のツェーへのマークを聞かされたときから解せない感覚がずっとある。

敗残兵が人生を一旦捨て、芸名に名を変えて異国で成功し、密かにではあるが母国へ凱旋した。客観的な事実はそれだけだ。

彼にプロットを直接見せつけられたラウ・ジャウト、軍警察の認識は、ずれがあつていいはずなのに、爆破事件が続いてからのMPの動きはラウ・ジャウトよりも素早く、確信的に見える。

ラウ・ジャウトへの対応を読むに、すでに爆破事件とツェー・クアンが結び付けられているのは確実のようだった。それでいて、本人にはまだ手を出せないでいる。だから闇流通に携わって後ろ暗いところがあるラウ・ジャウトをこうして使う。

証拠はないのに予感がツェー・クアンを指すという、その根拠は何だ。

まるで亡霊の正体を見極めるような少佐らの目付きは、ツェー・クアンの何を恐れているのか。

「俺じゃなくツェーが目当てのようだが、何の容疑をあいつにかけてる？」

「破壊活動企図の容疑だ。これ以上は君には言えない」

そのリンケージを今初めて聞いたように見せるため、ラウ・ジャウトは目を細めて応えた。

「そもそも君たちの間柄で連絡を取り合わないことが疑問なのだがね」

ラウ・ジャウトは椅子の背に寄りかかり、パーシバルの真似ではないがしっかりと相手の顔と対峙する構えで腕組んだ。

「すまないが、俺は疑問を感じない。俺たちにとって、敗戦とはそ

ういうことだった。俺は最初そうは思っていなかったが、この八年をかけて納得した。あいつはクアンで、俺はジャウツアイの息子で、誰だってそこに明暗を見る。あいつは結構プライドが高いからな、帰ってきたからって、ほいほいと過去は再構築できないと、状況から勝手に思ってるんだろ？」

心持ち長く沈黙がひろがった。

聴取官らは三者三様に彼の答えを咀嚼するようだった。敗戦国民の心理も、有名人の息子の心理も彼らから遠いものだろう。その距離のぶん、理解に時間をかけるようだった。

だが、尋問において参考人に思考猶予を与える沈黙は、上策と言えない。

「質問を変えよう。ミスター・ジャウツアイ、直近の君の仕事はいつかね」

「先週の火曜から昨日の朝にかけての一週間だ」

「往復先は？」

「揚州屯口」

往路の最終給油地を答えた。

「依頼主と荷の内容は」

「さあ、それはボスしか知らないんだよ。荷は事務所に届けることになってた。多分、依頼人が事務所まで直で受け取りに来る契約なんだろう。荷の内容はリン姐御も知らない。うちはそういう会社だから……持った感じ小さくて、これぐらいの、指輪の箱みたいなものだったよ。軽かった」

ラウ・ジャウは片手で箱を掴んで持つ仕草を試みせた。「貴金属かなにかかもな」

軍警察はおそらくリン姐御には手も足も出せない。爆破事件の捜査には、火器火薬を裏で取り仕切るマフィアの協力が要だ。リー・ファミリー首領の愛娘である姐御の口を割らせるのは得策じゃない。姐御は引き受けた依頼の秘匿についてたとえ一言でも契約を破るくらいなら事務所に火を放ちかねない女だ。

それよりも、目の前のラウ・ジャウを落としたほうが早いと彼らは考えているだろう。

パーシバル少佐は机に軽く片手をつき、胡乱げにラウ・ジャウを見下ろしていたが、しばらく口を結んでその姿勢のまま固まった。ややして口をひらいた。

「明日の朝一番でオペラハウスへ同行してもらおう。君には二年四月前の三月に流通禁止薬物の運搬に関わった容疑がかかっている。故に今ここで留置の手続きを取り、拘束する」

一度だけ運河管理局の税関で引掛かり、あとで揉み消された件の記録が渡っていたらしい。いざというときまでラウ・ジャウが泳がされていると言った父の推察は、正しかったようだ。

「おいおい、ひとつことも二年前の件なんて質されてないってのに。なあ、フランツ・カトラがツェー・クアンだということはもうわかったんだらう。俺を会わせてどうするんだ」

「同定の証拠がないのだよ。ツェー・クアンはローグランドに密航したのだらう、クアンとしての出入国記録がない。カトラはローグランドに納税して市民権を取っているから、知人の証言だけでは、顔が似ているだけの別人だと白を切られればそれまでとなりかねなくてね。我々だけがカトラの正体を知っている状態は、捜査にとって支障がある」

少佐は態勢を起こし、立つ足を組み替えた。

「そうだな、写真でも撮ろうか。ミスター・ジャウツアイ、新聞的には、なかなかの記事になりそうな再会ではないか？ ローグランドにも配信されるだろう。そしてローグランド人は驚くだろうね、あの戦争の黒幕、タウジン・クアンの息子がローグランドの腹中で成功を収めつつあることを知って驚くだろう。無論、ローグランド国民の公平さはカトラを歓迎するだろうがね」

「マスコミに既成事実をつくらせてツェーを追い込ませてわけか。ずいぶん時間のかかるやりかただな。事件を未然に防ぐほうはどうするんだ」

「すでに一座の監視体制は万全だ」

その程度で防げる破壊計画の仕掛けなのかと訊きかけ、深入りは分を悪くすると思い直し、ラウ・ジャウは唇の端を噛んだ。

身をひるがえし、パーシバル少佐が聴取室を出ていく。

部下たちがあとに続いた。ヤン少尉は去りぎわ柔和な会釈を残した。

そのあとラウ・ジャウは兵卒に連れ出された。地下金庫を改装した留置場が今夜の宿だった。先客で六割ほどの房が埋まっていた。房は《海鷗X》よりは広い空間なのだが、よほど《海鷗X》の中のほうが伸び伸びと寛げると思えた。運河に潜る鉄の塊の中よりも、そこは湿気た空気をこもらせていた。

明朝、ラウ・ジャウが連れて行かれたのは昨夜と同じ聴取室であった。てっきりオペラハウスに向かわされて外の光が拝めると思っていたラウ・ジャウは拍子抜けしつつ、椅子に座ったまま背を反らし、バキボキという骨の継ぎ目の音を聞いた。慣れない堅いマットレスで寝て体中が凝った。

昨夜と同じように、ヤン少尉が入ってきた。

「予定が少し変わりました。パーシバル少佐が所用で不在になったので、今朝は僕が聴取に当たります。あなたは立ち会い人を要求することができます」

「別にいらないよ。あんた、暴力に訴えるタイプには見えないし」

対面の椅子をひき、ヤン少尉は笑みを浮かべた。

「実を言うと人手が足りないのです、ありがたいです。もちろん僕は、格闘はあまり得意ではありませんね」

「それじゃあ伊達で軍服着てるみたいじゃないか」

「それも許される時代になったということでしょうか？」

「俺に訊くなよ」

「僕が軍学校に入る前に、戦争は終わっていましたから」
まるでラウ・ジャウが戦争の体現者であるかのように言う、と思
った。

引き継いだノートをひろげ、ヤン少尉が質問者の顔になる。

「一昨日までの依頼というのは、群島に行ったのではないですか？」
「群島？ それはまた何でそう思うんだ？」

ヤン少尉はふつと笑う。

「質問に質問で」

ラウ・ジャウは首振って遮り、机に身を乗り出す。

「答えるから教えてくれ。証拠がないから君らは俺を閉じ込めて吐
かそうとしてる。君らの心当たりが当たっているかどうかを知りた
がっている。その心当たりの根拠は一体なんなんだ。俺は、確かに
群島へ荷物を取りに往復したよ。だから何だ、と言うんだ」

やや面食らったようにヤン少尉はラウ・ジャウを見つめた。

ラウ・ジャウは房でいくらか考えた。自分は保身のため聴取にし
らばつくれたのではない。ツエーを止めるのは自分だ。それはツエ
ーを救いたいからだ。官憲に取っ捕まるツエー・クアンなど見た
くなく。もしそうなったら自分は、一生答えを選ぶことができな
くなるだろう。隊の壊滅を見、軍の解体を見、今度はクアン家の完
全なる終焉を見届けることになった自分というものに、ラウ・ジャ
ウはいよいよ孤独を感じるだろう。自分は独りが性に合う人間だが、
孤独になりたいわけじゃない、自由でいたいだけだった。ツエーの
敗北はツエーから自由を奪い、それは同時に、ラウ・ジャウから天
邪鬼な選択の自由を奪うことだ。最後の独りになってしまったとき、
ラウ・ジャウは撃鉄を起こさずにいられるかどうか、いまひとつ自
信がない。

だからラウ・ジャウは、ツエーを止めるため、目の前の彼らを出
し抜かなければならない。

「おそらくパーシバル少佐でさえ、具体的なことは何も知らされて
いないと思います」

「これしろあれしろという、上からの圧力に忠実に動いているだけ
つてことか」

「自力で推理の組み立てられるほどの情報は、現場には与えられて
いません」

「いいのか、喋って？」

尋問する立場で口が軽い、とラウ・ジャウは筋合いでもないこと
を思っ、首をかしげた。

「まあ、これもあなたに対する引っかけかもしれません。そのおつ
もりで」

にやりと少尉は笑ってみせた。割りと食えない若造だ。単純に、
素直な良い奴であるだけかもしれないが。 ただのお人よしに見
せないだけのラインは引けている。

「なら俺に予想できることとさして変わらんものを君らは想像して
見ると考えてもいいな。君らの上が恐れているのはクアン財閥の
亡霊、だと思っか？」

「一つのストーリーとしてあり得ると思います。パーシバル少佐の
命で我々が独自に調べたところによれば、たとえば、クアン財閥の
軍産企業にはいくつかの秘密研究機関が設けられていたということ
です。詳細はすべてローグランド本国に持ち去られていて不明でし
たが」

あけすけに手持ちのカードを明かしてしてみせる。尋問ではなく
会話から情報を引き出すやり方にあっさりと変えたのだとしたら、
ラウ・ジャウにしても慎重にならなければいけない。しかし、ここ
ですつと膠着しているわけにもいかないのだ。

「俺が揚州と言っ、君らが群島を連想したのは、群島に機関の一
つがあつたということか」

「昨夜あれから精査したところ、そういった伝聞を伝える資料はあ
りました。ただし、行かれたならお分かりでしょうが、噂のある群
島の月落島は小さく平坦な島で、研究施設の類いの現存は確認でき
ないので。噂が本当だとっ、そのような僻地で一体何が研究さ

れていたんでしょね」

そういう場合は、島そのものが調査の対象だったと考えるべきかもしれない。

額を支えてラウ・ジャウは思いあぐねた。

クアン財閥。

クアン家の、負の遺産……？

「今日は雨か？」

ふと気になって、ラウ・ジャウは顔を上げる。

「いえ、雨は夜半に降り止んで、今朝から快晴ですよ」

急に天気の話などしたラウ・ジャウを、さすがに不思議そうな顔でヤン少尉は見た。

「そうか……」

ジエネラルが確保しているスイートの爆破がぼやで済んだのは、歌声が雨に消されたからではないか。

そんなストーリーが、昨夜からラウ・ジャウの頭には想像されていた。

気象条件に左右されて失敗や成功があるならそれはファンタジーではない。

ラウ・ジャウがしばらく考えながら黙っていると、ヤン少尉は鉛筆を削りながら、動作のみならず話題にも緩急つけるように、口調を変えて言った。

「一昨日の夜は僕もオペラハウスにいたんです」

「ほう、仕事で？」

「いえ、まだ事件は起きていませんでしたし、クアン氏の情報も入ってきてはいませんでしたから、一昨日までは、我々も暇だったんですよ。軍警察に回ってきていた招待席枠があったもので、非番の僕が行きました。……悲しいオペラでしたよね」

なってみてそれが素だとわかる年相応の若者の顔に、最初に敬礼したときも彼は同じ若さをみなぎらせていた、彼は戸惑いのようなものを刻んだ。

「だな。気分が悪くなったよ。悪趣味極まりない。わりには大成功なんて新聞に囃し立てられてたけどな。お上流のお趣味はわからない」

「ええ。一幕はそうですね……」

苦笑を返しながらも、目の前のラウ・ジャウを素通りして、後ろの壁に何かがあるかのような視線を持ち上げる。そうやって自分が感じた戸惑いを解析するヤン少尉は、首をひねりながら言をつないだ。

「ですが二幕、三幕は、それでもなかった気がしました」

「ご覧になっていないんですよね、と、少尉は感想を聞けずに残念だという表情をして戻ってくる。」

「あれからハッピーエンドになるのか？」

「どうでしょうか、救いがないわけではない結末でしたが……。二、三幕の悲しさは、一幕の毒々しい悲しさとは少しずつ違っていくような感じがありました。二幕になると、一人の男が女のクラブを訪ねてくるんです。女の恋人からの手紙を持って」

ラウ・ジャウは目を細めて聞いた。

「それは遺書のような手紙で、最後の戦闘を予感して書かれたものです。恋人は、女が屋根裏で弾き続けた祈りのピアノがいつも聴こえていたと手紙に書いていました。その音にいつも心は慰められ、勇気づけられたと。ほかは女の幸せだけを願う文面でした。女は、祈りが届いていたと知り、今となっては怨念に汚れた自分と、屋根裏で祈っていた自分との心の様相の違いに犯した罪を思い知り、嘆く。でもそれでも復讐をやめられないんです」

「それでも、だからこそ、許せないんだな」

ヤン少尉は頷き、続ける。

「将校たちが一晩一人ずつ死んでいき、不気味な噂に客足も遠のいたクラブへ、男は女の演奏を聴きに通い詰める。彼ほど熱心に聴く者もいないのに、彼だけは死なずに残る。最後の一人となっても、憂鬱のクラブと二つ名が付いた店で、彼が女を見つめ続けたのは何

故か？ 女の恋人を殺したのは彼だったからです」

死骸の懐ふところから見つけた手紙を、彼は女へ届けにきたというわけだ。自分が殺した人間の最後の思いを。

「女にか、音色にか、惹かれた男はその音楽が持つ不可思議な力に気づいていました。自分こそがその魔法にかかって死ぬことを願い、通い詰めていた。でも死ねない。それは、男の心はすでに死んでいたからなんです。過酷な戦場で」

言うとき、ヤン少尉の瞳には思慮が浮かんだ。ラウ・ジャウの過去を気にするようだった。

ラウ・ジャウは静かに首肯してみせた。

わかる、という意味ではない、　　ない。続けていい、という意味だ。

「女の前で、男は自らの意志で、こめかみに銃口をあてる。そして女に言う。もう憂鬱かたきと復讐の音楽はやめてくださいと。絶対に止めてみせると。直接の仇である自分こそが死んだなら終わるはずだと。女は情の涙を流すが、心はやはりその死を望んでいる。クライマックスのアリアが歌われる中、男は引き金を引いて死に、それによって復讐は果たされたとして歓喜と、苦悩からの解放のうちに女は少女の幽霊に喰われて死ぬんです。三幕の終わりです。ええ、ハッピーエンドじゃありませんね。でも、実際あの場所で見ていると、男に感情移入させられるせいでしょうか、二、三幕は優しく切ない感じがしました」

言葉を確信に変えるように少尉は目線を机上に下げ、しかしまた、ふっと顎をもたげる。

「でも、劇として飛び抜けて秀逸なのは一幕だという気がするんです。僕はオペラに詳しくないですが……。作家の気迫や魂のようなものは、一幕にあっただと思います」

劇は劇だと、ラウ・ジャウは思おうとするが、符合が多すぎ、うまくいかない。

巡る考えに言葉を選び損ねていると、ヤン少尉は続けて口をひら

いた。

「どうしてここでこんなお話をしたかというところ、一昨日の僕は、最後の手紙というところで、少し自分の経験で思うところがあったからなんです」

若者の顔のままです。話をすやん少尉にすめた視線を当て、ラウ・ジャウは彼の言葉に耳傾ける。

「僕は、父が移民した二年後に生まれた二世です。父の母国のことは、言葉くらいしか知らずに育ちました。特に郷愁を感じたことはありません。ローグランドは差別もあるが、機会の公平は守られる国だから、努力好きな人間には合っている。僕はローグランドを愛しています。ただ、さすがに戦争中は肩身の狭い思いをしたりして、アイデンティティがぐらつくこともあった。周りのローグランド人に過度に迎合してみたり、逆にどうしようもなく反発してみたり」程度こそ違え、似たような葛藤を持ったことがあるラウ・ジャウには、ヤンの心情が理解できる。

「俺はローグランド鼻眞の親父が嫌いだね。ローグランドがどうってんじゃないんだが。西海人のガキどもが、『ラウル』『ラウル』と俺の名前を呼ぶんだよな。親父の親切的な目論み通りってわけさ」

国際派に育てて自分の跡を託そうという意図が丸見えの名前。ことあるごとく我が国の政治の悲惨を言い立てていた父の志向の、それは一端でしかない。

「確かに呼びやすいですね」

笑ってヤンは頷く。

「留学されなかったのは時局のせいですか」

「親父の思う通りになりたくないがために、さっさと幼年士官学校に入ってやったんだよ」

聞いて面白そうにヤンは両目をなくした。

「悪い、話の腰を折ったな」

「いえ、全然。僕も軍人になろうと決めたのは、葛藤に決着をつけ

るためでしたから。だけど、ハイスクールを出る年に終戦となり、戦争には間に合いませんでした。……戦後になって、父の祖国からの音信が回復すると、父の家族の消息が聞こえてきました。父には十二も年の離れた弟がいたのですが、彼は潜水艇乗りになって戦死なされたということでした。ジャウツアイ大尉、あなたもご存じの潜水艇乗りです」

「まさか……ヤン大尉か？ 君はヤンの甥だったのか」

ラウ・ジャウは率直に驚いて声を上げた。

「はい。海軍第一艦隊第二潜水艇部隊」

「全滅したんだ。俺とツエーだけを残して」

「はい」

ラウ・ジャウは、戦友の面影を探して目の前の青年を見つめた。

あの頃のヤン大尉と大して変わらない年齢だろうジェイジェイ青年であるが、八年ぶん年を取って追い越したラウ・ジャウだからか、重なる印象を見つけたことができなかった。

「ヤン大尉は叩き上げの、いい先輩だった。いい潜水艇乗りだった」

「ええ。それで僕も潜水艇乗りになろうと思ったのですが」

へえ、と眉上げたラウ・ジャウに、ジェイジェイは弱って苦笑いする。「どうしても船酔いが克服できませんで」

「潜水艇以前の問題だな」

「まったくです。通訳が大量に必要となったこともあり、軍警察にスカウトされてしまいました。そうして父の祖国に足を踏んだ僕は、最初の休暇に父の実家を訪ねてみました。そこで叔父が父に残した遺品を受け取りました。包みがひとつだったので、文鎮など幾つかの遺品を包んだその布に隠しポケットのようなものがあるのを僕は見つけた。中に、手紙が入っていたんです。おそらく検閲を逃れるためだと思います。いや、出すかどうか、出せるかどうかも不確定に過ぎる手紙だったからでしょうか」

美しい手紙でした。

と、ジェイジェイ・ヤン少尉は呟いて言った。

「最期を覚悟した人間の、美しい文章でした。幼いころから慕っていた兄への、肉親の情にあふれた別れの挨拶の手紙でした。叔父は父に、父が住まう国と敵対する苦悩を思っているながらも、堂々と戦うことで父の名誉をも守ると語りかけていました。僕は読みながら、もう一つの手紙を思い出した。金色の長い髪がとてもきれいな僕の恋人が、赴任のきわにくれた手紙のことを。彼女の父は爆撃機のパイロットです。この国にも沢山の空襲弾を落とすといっています。彼女はそのことで、そして僕と彼女のあいだにある民族の違いのことで、呵責と遠慮とを感じているようでした。僕への気遣いと、励ましと、離れることへの恐れ、僕が祖国で何を感じるだろうかという恐れ、そういったものが、書かれるでもなく滲んで優しいその手紙も、やはり美しい手紙でした。二つの手紙は同じ、同じ人間の思いで書かれています。呵責があった。もどかしく離れてしまう者への遠慮があった。僕のルーツも、ローグランドも、同じ人間たちの住む土地なのだ、僕はわかりました。僕の葛藤が本当の意味で解けたのは、そのときだった」

ヤン少尉は語り終えて口を閉じる。ふいに立ち上がり、聴取室を出ていった。

同じ、人間。

(……同じ思い、か)

カトラの書いたオペラで、女の恋人を殺した敵国の男が死骸から拾った手紙に見いだしたのも、おそらくは同じだ。心の死んだ男が、あえて運んで結ぼうとした人の想い。殺し合う独善の愛にかき消される、思い合い慮る愛の言葉。

一幕から一転して二、三幕を優しく切ないと言わしめるのは、そういうアンチテーゼが出てくるからだ。

(そんな物語が書けるといふのに)

間もなくマグカップを二つ手にして戻ってきたヤン少尉がコーヒーで喉を湿らせてから零した言葉も、

「ですから、そういうわけで僕は、僕個人的には、ツェー・クアン

という人物がクアン財閥のような巨大な影を背負う怪物であるようには想像できません」

尋問官の顔に戻りながらも、彼という人間の経験をして不可思議に思う気持ちが入ったものだった。

「そう思うには、あの劇にはあきらめが入り過ぎていて……あなたにお訊きしたい。ツェー・クアンとはどんな人物だったか」

「八年前までのことなら」

前置きして、ラウ・ジャウは記憶を掘り返す。

「彼は守るべき大切な者を持つ、ごく普通の御曹司だった。良識的で、端正で、教科は優秀、集団の先頭に立つことはけしてないが、状況に求められれば正義感を見せもした。まあ、どうせ主観なのにこんな言葉を羅列したってしょうがないよな」

ラウ・ジャウは人間性の立体再現に苦心する。

「あいつは俺にとって唯一邪魔にならない人間だったんだ。滅多に感情を表に出さない、くそ生意気なところがね。俺は熱血な人間といると生来の天邪鬼がもたげて舵の取り方が蛇行するから、何を考えているのかわからないくらいのほうが長く組んでいられるんだ。……何を考えているのかわからないってのも結構困るなと思いつたのは今日このごろのことだよ」

「あなたでも今の彼の考えはわかりませんか？」

ヤン少尉の真摯に問う瞳から、ラウ・ジャウはマグの液体表面へと視線を落とした。

「ああ、思ってみると俺なんて、いつもただ傍観しているだけで、半身にも等しいものを失った人間の悲しさには、近づけていなかったのかも知れない」

映り込む照明の電球を見つめ、輪郭が揺らぐ自分へ向けて苦々しい表情をつくった。

「それを自分のものにしていたら、死んだ仲間たちに面目の立つ生き方を俺なりするはずだが、逆走してるわけだからな」

「時間が必要なだけかもしれない」

「まあね、変わり身の早い我が国に呆れてしまっている俺というのもいる。でも、言い訳だよ」

だがそれでも、納得できる答えは人から与えられるものじゃない。せめて腐らないように、《海鷗X》と駆けてきたラウ・ジャウだった。生き恥さらそうが取りあえず生きて、仲間が命を懸けた我が国の未来を見届けるだけは、自分にもできそうなことだったからだ。作家ではなく、作中に登場するという手紙を届けたその男の気持ちならば、だからラウ・ジャウには少しばかりわかる気がした。

なーんかばたばたしてるよな。

房に戻されたラウ・ジャウは、道すがら建物の中で目にした忙しないMPたちの行き来と、次々と留置場へ連れてこられる被疑者の数多さに不審を持った。

いつも本部はこうなのか。

それとも。

「フウフウが飢え死ぬ前に帰らないと」

家の鍵も《海鷗X》のキーも保管没収された。

けっこう情けないことになっている。

こうして自分も地下金庫に保管されているあいだに、順調に劇は進んで幕が降りてしまったら。そう思って気は急ぐが、自分には何の力もあるわけではなかった。

情勢を覆せる力など。

巨大な歯車には、ただ一艇の鉄塊など噛み潰されていくだけだ。

基地島が玉砕した日に、刻み込まれた無力感だ。

ラウ・ジャウはしかし頭を振った。

……だが、鉄塊の中身は人間で、周りには幾多の、鉄塊に命を与える人間たちがいる。戦史をひもとけば、いついかなる段階でも駒の努力がまったく意味をなさないなんていうことはない。秀でた駒

がなければ戦は成り立たない。

そして戦術する人間と、戦略する人間と、もつとその周りで情勢を動かしていく人間、彼らの判断が歴史をつくっていく。歴史はメカニズムじゃない。そこには状況を導く人間の作為が必ずある。

ともするとラウ・ジャウは家を嫌ったのではなく、無数の人間たちの命運を背負うことになる立場から逃げたのかもしれない。

軍人ならば駒でいられる。

（演出側に行きたがる俺じゃないくらい、あいつは知ってるよな。初めから、俺を引き入れるつもりなんかなかったはずだ）

『観客は一人』

フランツ・カトラの台詞だ。

それはラウ・ジャウに、ツェー・クアンの描くシナリオを見届けるといふことか。それが彼の舞台におけるラウ・ジャウの役割か。

（御免だね）

ツェー・クアンに駒扱いされる筋合いはない。

何のために守ってきた自由だ。

ラウ・ジャウが彼を待っていたのは、答えを出すためなのだ。答えを与えてもらうためじゃない。

そして答えは、もう出ていた。

ラウ・ジャウは、今も昔も一介の脆弱な人間に過ぎないが、今相手にするのはうねる巨大な歯車のごとき戦禍ではなく、一人の三文悲劇作家が描いた作為だ。

（たった一人の人間が相手なら　　）

ここから出られさえさえずれば、手はあるかもしれない。

次に空の下へ出られるのは、記念写真が先か、群島行きが先か。

軍警察に群島へ往復したという情報を与えたからには、テロ計画の詳細を掴めていないMPは、クアン家の闇の解明のためにラウ・ジャウを協力させようとするだろう。

あるいは先に犯行の証拠が上がれば、ツェー・クアンとフランツ・カトラの同定が急がれるだろう。

いずれかの機会を利用して逃走を図るしかない。

(真面目にパパに勘当を申し入れとくんだったかな……)

寄りかかって立つ鉄格子越しに、また新たな収監者が奥の房へと引つ立てられていった。

首をひねって見送り、ラウ・ジャウは不思議を呟く。

「なんて騒々しい金庫なんだ？ 街に強盗団でもやってきたのか」

「慌てて場所を移される箆笥の肥やしがおれたちかい。へったくそな例えだなオイ」

返事が聞こえてラウ・ジャウはびっくりした。右隣の房から彼の相手をしたのは酒涸れした男の声だった。奥にひねっていた首を反対に返し、ラウ・ジャウはそちらを覗いた。隣房の格子の中を見ることは当然できなかったが。

「耳いいね、あんた。なあ、あんた先住だったな、ここはいつもこんななのか？ それとも一昨日の爆破事件の影響か？」

「おとといの爆破だって？ おれがしょっぴかれたのは六日前だよ。むしろおれがはしりだよ。そんぐらいから掃除がはじまってるんだよ。なにしろイベントが近いからな」

「イベント？」

「オマエどこの田舎もんだよ」

呆れたダミ声が返ってくる。

「知らねえのか、なんか年一回やってるやつ」

ラウ・ジャウは言われてはつと気が付いた。

六月…… 六月の末には毎年、占領国群次官級会議がある。

我が国とローグランド同盟の各国外務次官が集まってする政策調整会議だ。政治の健全化が進んでいるかどうかの検証と、同盟各国から突き付けられる要求事項に、我が国が答える場。言うまでもなく敗戦国の屈辱の象徴のような会議であって、これまでもテロの標的に幾度もなり、未然に防がれてきた腫れ物だ。

パーシバル少佐の不在など、MPに浮足だった様子が見られるのは、迫ったその日程のせいか、と今更ながらラウ・ジャウは思い至

る。人手が足りない、とヤン少尉は言っていた。

「今年はどこでやるんだ。あんた知らないか」

「知るかつつんだ。知りたくもねえ。胸糞わりい」

会議が、なのか、己が受けたとぼつちりが、なのか隣人は言い吐いて、それから不摂生に焼けた喉ですすすと笑った。

「爆破なんかがあつたのか。そりやおもしれえじゃん。しかしえらくフライングだねえ。つまんねえの」

「グランドスラムって知ってるかい」

「はあ？」

一座の公演は八日間だと新聞に書いてあつた。

ちようど一週間後月末の会議が劇の集大成となる可能性は高い。

(ケレンをかましやがって)

心中で毒づきながら焦りを加えた。

砂を噛むごとき時間が過ぎていく。

夕方まで音沙汰もなく放置され、第三次犯行の時間が迫ることに焦れながら、ぐらつく思案を抱えて天井を睨んでいたラウ・ジャウの耳に、軍靴の足取りをリノリウムに響かせてやってくるものたちの気配がとどいた。寝そべる寝台から足元を見ると、パーシバル少佐が身体を格子に向けたところだ。ヤン少尉とスピーアー大尉を従えて少佐は両足を肩幅に、休めの姿勢をとった。

「ミスタ・ラウ・ジャウ」

参考人推奨の略称をにやけた調子で呼ばわつたのはスピーアー大尉だった。硬軟の軟を受け持つ彼の田舎顔は、硬質に構えるパーシバル少佐の貴族的な顔立ちと対を成した。

「やっとで散歩の時間か？ 待ちくたびれて天井の落書きがゲシュタルト崩壊を……」

「ツェー・クアンがオペラハウスから姿を消した」

寝台から立ち上がりかけていたラウ・ジャウは、苦い声に打たれてパーシバルを見向く。

「なんだと。……やってくれたな、無能憲兵ども！ 俺を引っ張っ

たのが気付かれたんじゃないのか？」

いくらラウ・ジャウが所在不確かなフリーランサーだからといって、党本部へのお出迎えは露骨過ぎた。

非難を聞いてパーシバルは眉一つしかめずに、檻の中のラウ・ジャウを観察した。

「彼にはそのような情報網があるということかね」

「あんたらが奴に目を付けたのはクアンの息子だからじゃなかったのか？」

ラウ・ジャウは格子に近づき、横壁に背をつける。

「それより、監視は万全とか聞いたが、何処からネズミは逃げたというんだ」

訊きながら、整理を要する考えを進め、まとめようと頭を回転させた。

ラウ・ジャウが、ツェーに人殺しをさせないためには 爆破で人死にはまだ出ていなかったはずだからだ、このまま留置からの逃走が無理な場合、MPに情報協力することも必要だった。最後まで取りたくはない選択だった。すべきかどうか、すべきとすればどのタイミングですべきかどうかを、思いあぐねてぐらついて時間に焦れているあいだ、……ラウ・ジャウが尋問に落ちるその可能性をも予期したツェーはまんまと官憲の手の届かないところへと逃げ去った。これはそういうことだ。

「不明だ」

「土地勘のあるツェーに他所者がかなうわけもないか」

オペラハウスなぞ、クアンの子弟は子供のころから出入りしているのだ。

裏口抜け道を知っていてもおかしくない。

「ヘイ、MP」

隣房から声上がる。

「オペラハウスの界限ならよ、あそこらへんはネズミが便利な道にしているのさ。もともと勝手に地下掘って造ったのは西海人連中じゃ

ねえか」

租界に地下道の噂は昔からある。

治外法権が法的には解消された後も名残る租界の独立性によって、国にも把握できていないそれは、昔、西海人が搾取する大陸人の暴徒化を恐れ万が一の備えとして造り上げたと言われる。革命前後の話である。

「どうだこの協力的なおれをここから出せよう！」

わめく隣人に、ヤン少尉が口へ人差し指を立ててジェスチャーした。

「国の管理が行き届かない場所が裏目に出たな」

ラウ・ジャウは引き取って皮肉した。

スチュアートをパトロンに持つフランツ・カトラへたやすく手が出せなかったように、占領軍は被占領国に対しては我が物顔で権限をふるうことが出来ても、租界を自治する本国の高級人種たちとなると目の上の瘤のような存在なのである。今現在、地下道の使い道は租界住人の一部の者たちによる闇流通の舞台なのかも知れず、隣房の住人はその末端に連なる小悪人といったところか。無老配達会社の顧客に西海人が少なくないことからしても、違法の担い手に西も東もないのが我が国戦後の実情のようだった。

混沌こそ金の稼ぎ時というわけだ。

「いなくなったのはツェーだけか？」

パーシバル少佐の慇懃な面持ちを見返しつつ訊く。

「何？」

にわかには少佐は目つきを変えた。

「いや……」

ラウ・ジャウは格子の外から目を離し、前を向いた。

一人のはずもない。たぶん、メイファンも一緒だ。

「貴様、何かを知っているな。ツェー・クアンは何処だ」

「それは知らない。いま何時だ」

「質問に質問で答えてはならないと言っている」

「いま何時だ」

腕時計も没収されたラウ・ジャウは食い下がる。

「さすがドラ息子だ……」とふてぶてしさに目をひらくスピーア大尉。

だが、口を割りかねない変化の気配をラウ・ジャウに見て取つたらしきパーシバル少佐は、右腕に目を落とし、悠然と顔を上げて、時刻を告げた。

「午後五時半だ」

三日目の開演まで二時間半。

ラウ・ジャウは奥歯を噛んだ。

「ツェー・クアンは何処にいる」

質問には首振って、ラウ・ジャウは身体を起こし、鉄格子を掴んだ。

正面に捜査官たちと相對する。

「知らないんだ。それは知らないが、とにかく白髪の少女を探して保護するんだ。それから、クアン財閥関係の建物を中心に、占領軍の主要施設から酒瓶や飲料水タンクの類いを排除しろ。ニトロメタンに中身がすり替えられている可能性がある。燃料（fuel）だ。クアン財閥が工場を持っていただろう。ニトログリセリンでは衝撃に過敏過ぎるが、あれなら……」

攪乱を企んでいると取られても仕方のない説明をしていると自分でも思った。

しかし、パーシバル少佐は怪訝そうに首に角度をつけはしたものの、一拍おいて後ろのヤン少尉へ振り返り、頷いて指示した。ヤン少尉は了解し、ラウ・ジャウの言ったことを実現するべく留置場を出ていく。

向き直ったパーシバル少佐はもう一度首を傾けなおし、訊いた。

「どういふことかね」

「推測だ。推理に過ぎない。俺はあいつの共犯ではない。俺はあいつを止めなきゃならない。止めさせたいんだ。そこはあんたたちと

目的は同じだ。だから話した。俺が往復した群島には伝説があるのを知っているか？」

さらに胡乱げな瞳になり、パーシバルはともかくも先をうながす。「人魚の歌が大地を動かし、海を攪拌し、生命を生んだ、と大陸の伝承には古くからある。月落島には人魚の血を引く末裔が住んでいるというんだ。彼ら島民の歌声には特殊な力があるとして、おそらくその力についてをクアンの機関は研究していたはずだ。これも推測でしかないが……」

「歌声が爆発物に作用して起爆させていると言いたいのかね？」
「ファンタジーだよな。信じないなら別にいい。すでに捜査で爆破手段の目星がついているんなら、俺のはただの与太だ」

だが、話に付き合う彼らの態度からは、現場捜査に進展はないらしいことがわかる。

ならば、クアン・サロンの事例から、事実を拾いだして仮定してみても今のところは無駄じゃない。

爆発はワインセラーから起きた。

アルコールは燃えるが爆発まではしない。揮発発火などとして類焼、ガスに引火するという可能性はあるが、その場合、事件というよりも事故だ。テロ手段として不確実すぎる。ジェネラルのスイートに類似の現象が起きた時点で、事件性が確定した。ゆえにラウ・ジャウが引っ張られてきた。

ワインという嗜好品は、一通りのコレクションを揃えておくことが大事である。これを利用して、滅多に供されないような銘柄と年代を選んで、中身を爆発燃料にすり替えたものを送り込めば、保管されたその場所にしばらく眠らせておくことができる。

ダイナマイトの原料であるニトログリセリンは運搬にも最大限の注意を要する不安定性物質だが、加工したニトロメタンの耐衝撃性は、混合比率で調整が可能だ。

すり替えは出入りの業者を買収すれば済む話で、簡単だ。

起爆の方法が通常ではありえないというだけだ。

ラウ・ジャウの解説に、スピーアー大尉はもともと睦りがちな目を
ぎよるぎよるさせ、パーシバル少佐は唸るでも頷くでもなく、とり
あえず言わせておくように聞いていた。

終わりを見計らって、発端に戻る質問をした。

「月落島の何処へ行って、何を持ち帰ってきたのだ」

「地図通りに見つけた入り江の村に、教会のような石小屋があった。
村はもぬけの殻で、漁師の道具なんかも朽ち放題だった。十年以上
は人がいないようだった。石小屋の奥の祭壇の上に、昨日言ったよ
うな箱が置かれてあった。祭壇までの道に溜まった砂埃には、新し
めの足跡が一人分あったな……」

箱は以前からあったのではなく、依頼のためにそこへ何者かによ
って置かれたということだ。

「中身は俺に訊いたってわからん。少しでも俺の話を信じる気があ
るなら、クアンの闇を突き詰めてみるのもいいだろう。だが、少佐、
それはローグランドの意向に背くことでもあるはずだ。闇はローグ
ランドに引き継がれたんだろう？」

占領軍警察に追及できる案件ではないだろう。

そういう意味では、ラウ・ジャウと目の前のMPたちには大して
立場の差がない。

「端っこ同士、協力しようと言ってるんだよ」

「信用ならない男だな。ツェー・クアンが我々の手の内から逃れた
途端、雄弁になるとは」

相手はすかさず痛いところを突き返してきた。

「まだ三夜目には間に合うだろ。チャラにしてくれ。俺だってツェ
ーには昔の借りも貸しもある。逆に、あんたらには何の義理もない
けどな」

ラウ・ジャウが当然のように薄ら笑うと、パーシバルはもう一度
時計を見て、「滑り込みもいいところではあるが」と言った。

「正確には……」

ラウ・ジャウは格子の棧を見つめて呟く。

「二幕から三幕までの時間帯だと思っけどね……」
人形めいた少女の面影を浮かべる。

聞き伝えの筋を思い出し、格子を握る手に力がこもった。
女は情の移った男の懇願に涙を流すが、心はその死を、望んでい
る。

「おれは戦前は租界で手広くやっててね。いやいや、カタギの商売
だよ。ローグランド人相手にね」

ワンという名の隣房の住人は、よほど人との話に飢えていると見
えて、訊いてもいないのにありあまる暇と静寂にまかせて身の上を
語りだす。

「雑貨屋も料理屋も、いやウマイことウマイこと転がってよう。儲
かってウハウハと暮らしていたんだが、世の中だんだんキナ臭くな
ってきたのは陳東租界にやっと三号店を出したころさ」

ローグランド租界とも呼ばれる明真租界に対し、運河対岸の陳東
租界は西西海のフェニツヒ国人が固まっっていて、二つの街は飛び交
う言語も違った。

バイタリテイのあるオツサンだな、とラウ・ジャウは思った。
いや、かつてはあった、か。

「西海人に引き揚げられたらこちとら食い上げだ、戦争前はだから
ジャウツアイに投票したよ。わかっちゃあいたが、けっきよくおれ
の一票なんかぜんぜん意味なくつてよ、結果世の中あの通りさ」

戦争の発端は、西海人が大陸に持つ既得権を我が国に取り戻そう
という、自立の機運から始まった。

革命前後に内戦状態を長引かせた我が国は、列強の植民政策によ
って危うく分割統治されかけてやっと団結し、近代民主国家建国
を達成したはいいが、新政府の樹立は莫大な負債も残した。借金と
引き換えに国土と経済の自主独立を切り売るとき列強との不平等

協定がそれだった。

教育の普及がある程度の自立心を国民に育て、豊かさに自信が付いてくると、租界の西海人と企業に対する排斥運動が盛んになった。戦前、租界には各国の軍隊が駐留していた。いつしか暴徒と防衛隊が一触即発に睨み合う光景が連日続くようになった。

権益保護を共通目的に列強が組むローグランド同盟から我が国へ突き付けられた要求は、国民のくすぶらせる火に油を注いだ。

事態は国と国との一触即発へと進展していった。

ラウ・ジャウの父が代表する穏健派は、我が国のここに至る成長と繁栄は列強との政治経済交流にて成ったものであるとの正しい主張をしていたが、国民の心にそれは正義とは見えなかった。国民はシビアな現実よりも、理想を求めたがった。完全なる自主独立という理想を。

そして窮鼠猫を噛むローグランド領島攻撃から始まった戦争。

「おれも兵隊に取られてよ。南の島で遊撃やってグルグル彷徨って最後によ壊れた銃も捨てちまって弾倉掲げて突貫したけど、弾倉なんぞでなにをどうするつもりだったんだかな。頭がおかしくなっただんだよ。ま、捕虜に取って貰えて運がよかったのかねえ。しかし、おれの運はそこで使い果たしたんじゃないかねえ」

命あつての物種とは言うが、ワンの戦後は散々なものだった。

復員して帰ってくると女房子供はどこにもいない。空襲でやられたのかと心を痛めたが、近所や知り合いに聞き回ってみるとそうでもないらしい。終戦まで生き延びていたことはわかった。それ以後がはつきりしない。どうも海北島に行ったのではないかとワンには思えてくる。女房は元々海北島の出身で、海北島は敗戦のどさくさに紛れて独立した島だから、ワンには渡航が難しい。つまり逃げられたのだ。女房子供に逃げられた。

心配が失望に変わり、だんだんと腹を立てつつも、それもそうだろうとワンは思った。

戦争前夜、人の消えゆく租界で赤字が増えるだけの店を畳み、転

業を模索しててんでこ舞いしていた彼には今や、二号店を出すときの借金だけが残っている。

そりゃあ女房子供も逃げ出す。

それでもワンは不屈の根性でもう一度一からやり直すことを決めた。もちろん、人が戻ってきた租界での商売だ。

だが、おかしなことに、以前やっていたようには上手くいかなかった。ぜんぜん、何にも上手くいかなかった。笑えるくらいツキがなかった。租界は以前の租界だし、何食わぬ顔で戻ってきた西海人連中も相変わらずの連中だ。あちとらもちちとらも、前と同じにやっているはずなのに、今度はまったく儲からない。失敗続きで、借金が膨れた。

「むかしは三つ大飯店を出した男が、帰ってきてからは三つ屋台を潰したさ」

何がいけないのか。何が違うのか。いったい何が変わったというのか。 かいもく見当も付きやしない、とワンはごちた。

「とうとう首が回らなくなってよ、チンピラの手伝いするようになったのよ。この一年ぐらいのことさ。借金のある奴を雇ってくれるカタギはいねえわな」

自分でへマしたわけでもなく検拳の憂き目に遭った日には、心が折れて大地と精霊を呪ったワンである。

「ワンさん、なににして捕まっただよ」

「西海人に売る猥褻画の印刷工場で雑用してたのよ。その地下室を半分仕切ってチンピラがたむろしてるところをな、ひとからげにお縄にかけられたつてもんよ」

聞いて苦笑いながらも、わりと他人事には思えないラウ・ジャウだ。チンケな裏稼業で糊口をしのいでいるのは同じだ。そこへ辿り着く経緯にしても、けっこう重なるところがある。

「俺たち似てるよ、ワンさん。面白い。面白い」

「別に楽しかねえよ、やってるほうはよ。ま、イビキもかかずに話を聞いてくれる奴もいなかった、その意味じゃ牢屋も悪くないって

かなあ」

「そうだ。そうだ」

顔も見えない相手を応援した。

床にあぐらをかいていた片膝を立て、顎を乗せて、ラウ・ジャウはふと考え込んだ。

(戦前戦後の違い、か)

ワンにとってのその違いとは何なのだろう。彼の戦後の歯車が噛み合わない理由とは。

そしてラウ・ジャウにとってのそれとは？

「ワンさん、あんたさ、戦前はきつと租界人相手に戦争してたんだよ」

商売は、ずる賢くなければ儲からない。

もちろん誠意や信用がなければ成り立たないのだが、ルールを損なわない範囲で競争のしのぎを削るのが商売根性というものだ。

「だけど、戦後は戦えなくなったんじゃないか。……変わったのはワンさんじゃないか。俺たちはさ、戦争に行ってきたわけだから」

肉の世界の戦争に。

彼らはいた。

《海鷗x》で、幾つもの徴用船と戦艦艇を撃った。空いた穴から海に吸い出されていった命も、水底に沈んで閉じ込められたままの命も、爆散した命も、自分の手にかかって逝ったも同じことだ。ラウ・ジャウの指示下に殺したのだ。

やらなければやられる。

奪わなければ奪われる。

戦争がなくても軍人に成っていたらラウ・ジャウには、ずっと前から覚悟があった。あり過ぎるほどあったから、殺されないために殺すことも、奪われなかったために奪うことも、自明の理由であった。言い訳ではなかった。国民の肩代わりして血に手を汚すことを、恐れなかった。むしろ自覚もしないままに初めから麻痺している自分

に気が付いたとき、足元から冷水の迫り上がるように恐怖はきた。感覚がないことへの恐怖が。

もう顔を出して吸える空気も少なくなつて、必死に艇の天井へ頬をへばり付かせ、怖いもの見たさ迫る水を見下ろすとどろりと真つ赤な血の色で。そういう夢を何度か見た。戦争末期のことだ。無論、いつ自分にもやつてくるか今日くるかという死への恐怖も混ざつた夢だ。

奪つた命が、自分の命を奪うのだ、と……。

「なまじローグランド人相手なわけだろ。だから街へ帰ってきてても、金輪際戦うのも負けるのも恐くなつちまつたんじゃないのかな」

黙りこくつた隣人が心配になりながら、ラウ・ジャウは言つて、隔てられた壁を見る。

「……ワンさん」

「むああ……すまん、なんか、思い出してな、胃の腑がよ」
気分悪そうに答えた。

「ああ、悪かつた。嫌なところ掘つたな。ご免よワンさん」

「……んや、いいつてことだ。おめえの言う通りかもしれないよ」
街で金盥を前に置く傷痍兵のように目に見えるものでなくとも、多かれ少なかれ帰還兵はワンのようなのもかもしれない。心に傷口を持つている。記憶に暗部を抱えている。

日常へ戻ってきても。

「でもさ、俺はあんたみたいなの前向きな人には頑張つてほしいよ、ワンさん」

七転び八起きなオッサンの生き方は、尊敬に値した。

ラウ・ジャウのように自己意志で逆走するのではなく、半分くらいは止むに止まれず落ちてしまったワンだから、似てるなんて決めつけるのは本当はおこがましい。

「ワンさん、ローグランド語ができるんだろ。フェニツヒ語もか。なら、俺の友達に輸入会社をやつてるやつがいるから、林秦街十二番のチェン商会を訪ねてみるといい。『ラウ・ジャウの父』からの

紹介だつて言えばお安い御用で雇つてくれる」

ワンは「うえ？」だか、「おお？」だかいう頓狂な声を上げて、突然の申し出に戸惑うようだったが、やがて「……おう、行つてみるよ、あんがとさん。ま、ここから出られたらだけどよう。あつははははは」と、快活に笑つた。諦めも、希望のあしたも、一緒に笑ひ飛ばしてしまふように。

公安部に引き渡されたとして、初犯の下っ端ならだいたい直ぐに釈放だ。

ワンの嵌まつたトンネルが、ほどなく途切れることをラウ・ジャウは信じて祈つた。

牢に囚われたまま、日にちが過ぎた。五つの夜を越し、五日目の夕が来た。グランドフィナーレの前日だった。

ラウ・ジャウは姿を見せないパーシバル少佐らをただ待っている。(そろそろデッドラインか)

このまま人任せにしている、ラウ・ジャウのトンネルは終わらない。

ランチプレートของフォークを壁の染みに目掛けて投げ刺しては捨てる。そんな無為にも限度を感じ、ベッドから立ち上がった。

フォークで鉄格子のあいだをかき鳴らす。

「担当者を呼んでほしいんだけど」

音に寄つてきた看守へ頼んだ。

内線しに看取は入り口へいき、ややして戻り、相手の来ることを告げた。

地下へ降りてきたのはスパアー大尉だ。

「われわれはきみの召使いじゃないよ、ミスタ・ラウ・ジャウ」
開口一番、本気ともつかず、きよろつとした瞳で言った。

「とんでもない。うちのメイドなら三時に胡麻揚げ団子を忘れない」

「口が減らないなあ」

「減らない内に話しておきたいことがある。上へ呼んでくれ」

辺りをはばかりるようにラウ・ジャウは視線と首を左右へ振ってさまよわせてみせた。「明日の山場は確実に乗り切りたいだろう？」

スパアー大尉はいつとき鼻にしわ寄せたが、結局ラウ・ジャウを房から出した。身体の前で両の手首を手錠され、金庫室前面の鉄格子扉を出で、廊下を歩き、階段室へ入った。

背後に着いて連れ歩いてくれるのはスパアー大尉のみだ。手錠の鎖に結んだロープの端を手綱のように握っている。

スパアーは長身だが幅は大してない。

「今夜はどこが狙われると思う？ ミスタ・ジャウ」

「さあね。この五日であらかたやられたじゃないか。そろそろネタ切れのはずなんだが」

爆破対象はどれもこれもクアン財閥系の元所有物で、今は占領軍が使用している建物だった。ジエナルの滞在ホテルだけは例外だったが、MPの調べによればそのスイートは、かつてタウジン・クアンが政談相手との会見場所として密に使っていた部屋の一つだという。

「ここがクアン家ゆかりの建物じゃなくなつてよかつたよ」

と呑気にスパアーは言う。

「でもしかし、逆目橋 一丁目の、経営を変えた元クアン銀行が狙われるつてことはないかな、ミスタ・ジャウ」

「民間を襲うことは絶対にしないとと思うが」

「君経由で知る彼のルールすなわち人物像は今のところ当たつているようだけどね。でも我々からみればテロリストだよ」

「わかつてるさ」

ラウ・ジャウは本心から神妙に答えてみせる。

「せいぜい頑張つて捕まえてくれ。ところで租界の地下道の探検は進んだのか？」

「あれは入り組んでいるよ」

しかめた顔を横合いに見、ラウ・ジャウはせせら笑った。

「運河につながっていると、まことしやかに言われてきたからな。マオ財閥がここの銀行建物を捨てて移転したのは、いつ金庫まで地下道をつなげられかねない位置関係にあるせいだ。噂が流れたくらいだ」

「そのくらい長いこと大陸はぐだぐだだったってことだね」

「ああ、我が物顔でかきまぜるやつらのおかげもあってね」

ラウ・ジャウは階段の途中でふっと立ち止まった。

「どうした？」

怪訝そうに目をみひらくスピーアを振り返り、

「……いや、何だろう、この感覚、どこかで」

耳を押し潰すような響きを感じる。ラウ・ジャウは一瞬とらわれて空白をつくった。

次のとき、足元から轟音がのぼった。地震。

「爆破だ！」

耳元でスピーア大尉が怒鳴った。

あちこちから輪唱のように同じ言葉が聞こえた。

身体が動いた。彼の横を出口へ向かおうとしたスピーア大尉に足払いをかける。大尉はあつと叫んで背中から段を転がり落ちた。ラウ・ジャウが強く引いた縄は大尉の手から擦り抜け、踊り場へ転がった長身がうつぶせにくたった。傍へ飛び降り、仰向かせた胸ポケットから手錠の鍵を失敬。

「悪い。頭打ったか？」

呻きつつスピーアは律義に否定の首を振った。

「元から目玉はちよつと飛び出たよな」

言い置いて、ラウ・ジャウは手錠を外しながら階段を駆け上がった。

一階の廊下に出てすぐ、走り回る兵卒の一人の肩をつかまえ、

「階段室でスピーア大尉が倒れてるぞ！」

有無を言わせず怒鳴り、突き飛ばして向かわせ、自分は黒煙の流れるほうへ駆けた。

階段室と反対にある表のロビーへ出る。建物の西側が崩れていた。削られたように壁は落ちて外の景色を見せていた。手前の床は隕石でも降ってきたように陥没している。地下から爆破されたのだ。怪我人と事態收拾に右往左往する者らで蜂の巣をつついた騒ぎになっているそこから、煙と人に紛れて、吹き抜けの中央階段をのぼった。沁みた目に映った大時計の時刻は四時五分。

(イレギュラーだな)

便乗テロか、それとも……？

右翼に資料書架が並び、左翼には今は詰め所として使用の事務室が並び、馬蹄形の二階部分を左へ行つて、すぐに建材の崩れた山に阻まれる。衝撃で剥落した天井と壁だ。一つ一つは軽いそれらを蹴飛ばして崩し、ラウ・ジャウは奥へ進んだ。「怪我人！ 要救護！」と叫んで走ってくる兵卒とすれ違いかけ、開いた扉の影に避けて隠れる。

各課のプレートを読み取りながら先へ。最奥に保管室をやつと見つけた。人気のない室へ滑り込む。

壁面に据え付けられた木製キャビネットに当たりをつけ、パール少佐率いる二課のインデックスが嵌められてある四角い引き倒し扉を開けた。

ビンゴ。

《海鷗X》と家のキーと腕時計もろもろの所持品がトレイに載ったまま入っていた。

「動かないでください」

振り返ると戸口の枠に背をもたれ、ヤン少尉が銃をこちらへ向けている。

苦痛の表情で立ち、片脚を不自然に外へのばしていた。

足元に滴る血で軸足が滑り、ずるずると戸枠に背中を擦って崩れた。

ラウ・ジャウは彼に駆け寄り、姿勢を助ける。

「ヤン少尉！」

顔は余裕を浮かべようと笑ってみせるヤン少尉の左腿に深く刺さるのは菱形に割れたガラス片だった。出血がガラスのへりに伝ってすじをつくった。

「いやな予感がして来てみましたが、使える勘でした」

軍服のポケットから出してよこしたハンカチを受け取り、ラウ・ジャウはそれを対角線でねじり、すばやく確実に止血処置した。

「病院に着いてから抜くんだ」

ざっくりと動脈がやられている。が、服地の染みが小さいのを見てとる限り処置はまだ間に合うはずだ。

「昼間から派手にやってきましたね」

「ああ……」

肩貸してヤン少尉を半ば担ぎ、ラウ・ジャウは救護班の通るところまで彼を運ぶ。廊下に落ちている血の点線を引き返す。

「無茶したな」

「唯一の手掛かりに逃走されるわけにはいきませんからね」

「パーシバルは？」

「ファイナーレ会場へ打ち合わせに出ています」

それは何処なのか　ラウ・ジャウは知らない。ラウ・ジャウは次官会議の行なわれる場所を教えてもらっていない。

「結局変更はしなかったのか？」

「ええ。もしかすると、犯人を捕らえる最後で最大のチャンスですから」

聞いてラウ・ジャウは唸った。

「上手くいくかな」

「五日間のとおりにやれば、少なくとも被害は……」

姿かたちを現さないツェーとメイファンに、軍警察は臍を噛まされた。逆を言えば遠隔起爆の効果範囲は徐々に絞り込まれて、合理的な捜査が進められている。

少尉の口ぶりからすると、ファイナーレの会場は市街地よりも警備をつぎ込みやすい場所なのではないか。

オペラハウスの公演は日程どおり続いていた。フランス・カトラの不在はマスコミで大きな話題となったが、軍警察は今も彼を手配していなかった。何故ならば、彼の正体が公になった場合、市民が彼を庇い、かくまう可能性を軍警察は恐れたからだ。占領軍施設連続爆破への国民の反応は、残念ながらテロリストに寄ったものだとパーシバル少佐はラウ・ジャウに言い、そのときの少佐の顔にはかすかに侮蔑が覗いた。不正義への軽蔑が。

「ここでいい。降ろしてください」

ヤン少尉が身体を離し、剥落した建材が脇へ片付けられている辺りで吹き抜けの手摺にもたれて座り込んだ。

「担架を呼んでくる」

行きかけたラウ・ジャウを追って銃声が轟く。左手で壁材の小山が弾け飛んだ。身体を返すと、ヤン少尉は襟元から取り出した笛を銜え、両手で狙いを定め直した。

ラウ・ジャウは固まった。

「いま人を呼びます。ラウ・ジャウ。一つ質問に答えてください」
硝煙の向こうから、厳しい黒い瞳で見上げてきた。

「あなたが行くこうとしている、これも逆走ですか？」

ラウ・ジャウははっと驚き、眉間にしわ寄せ、一度、床へとうつむいた。

そして、首をしつかりと振りながらその瞳を見つめ返す。

「いや、違う。やらなきゃいけないことがある。どうしても」

じっとラウ・ジャウの答えを聞いたその瞳は、隊の最年長だったヤン大尉の厳しく親しいそれと、確かにそっくりだ。

「二課の詰め所はいま無人です。下はコンクリートですが二階程度の高さだ」

「ヤン少尉……」

銃を向けたままで少尉は笑んだ。

「割れ残っているガラスに気を付けてください。 叔父の戦友は、ツェー・クアンも同じだ。せつかくつなげた命を、馬鹿げたヒロイズムで無駄にしてほしくない。彼はおそらく明日、死んで幕を閉じる気だとあなたは思っているんでしょ」

「ああ」

ラウ・ジャウは頷いた。

「もちろん我々はあなたを追う。そしてツェー・クアンを逮捕します」

「ああ、わかった」

さっきの銃声を聞き付けて集まってくる者らが中央階段に見えた。「行ってください。彼に前を向かせるんだ。ラウ・ジャウ」

ラウ・ジャウは銃口にこもった叱咤で追い立てられるように、三たび廊下の奥へと踵を返した。

「今度は間に合う！」

二本指のジャンクな敬礼と言い残し、ヤン少尉を通り過ぎた。

あの日のメッセージを思い出していた。

海を渡る最後の音信。

生きる。逃げ延びる。と言っているようだった、仲間たちの声なき声を。

戦友の血を引く若者の顔に重ねた。

だが、いや違う。若者はそれ以上に、一人の軍人だった。

ラウ・ジャウの背中を押したヤン少尉は、一人のローグランド軍人として大戦のフラウンダー乗りを見送った。戦史への尊重を眼差しに込め。

彼の叔父が敵国に住む兄の名誉を守るため誇りを持って戦っていたように、ラウ・ジャウも彼が五分と五分の軍人精神に賭けて託した期待を裏切るわけにはいかない。

エンジンキーを突っ込み、コンパネのスイッチ群を手のきわで跳ねあげる。

走ってきた荒い息を整えながらガソリンエンジンが唸りを上げるのを聞いたあと、電動機が温まるのを待つあいだ、無線のチャンネルを合わせた。

「リン姐御！ ウーピン！ そこにいるか?!」

雑音の向こうはうんともすんとも応答がない。

身体を伸ばし、ハッチのハンドルをきつく閉めなおした。

錠を巻き揚げ、ベント弁をひらく。

エレクトリック・スイッチ切り替えしてエンジン停止。充電池航行に移行。

ベント弁からメインタンク内空気が排出されると同時に、メインタンク下部のバラスト注入孔から河水が浸入する。

前部トリムタンクに60%注水、艇首下げ。

深度メーターの針を目で追う。

音もなく《海鷗X》は河底へ沈んでいく。

「無老配達公司へ。誰かいないか」

『ぼふ。ぼふ。』

がちやがちやした音がして、床に落とした送話管の弄ばれる気配とラオチューの挨拶が聞こえた。『ふん、ふん、ふん。ぼふ。』

『ぼふ。』

「音だけ聞いているだけでもくすぐつたいぞ、ラオチュー」

急速前進させた《海鷗X》の中でラウ・ジャウは送話管を顎で挟んで、引き寄せた潜水鏡に取り付く。

五時過ぎの運河の底はほとんど視界がない。

『来客中でした。応答願います』

突然、通信相手がケモノからヒトに成長した。

「ウーピン、リン姐御をだしてくれ」

『お待ちを』ウーピン青年の落ち着いた声が雑音の向こうから届き、ほどなく、

『あーたしーを呼び付けるつーはいーい度胸じゃなーいのオ?!』
耳をつんざく怒声。ヒトからオニに相手がまた変化した。

「よ、リン姐御。一週間ぶり声が聞けて嬉しいような悲しいような
マゾ検定のような」

潜水鏡に片眼をくつつける。日の落ちた夜よりも船体の識別灯が見えづらくなる時間帯、潜水艇の往来は過疎となる。ラウ・ジャウは《海鷗X》の識別灯を消し、双方向ビーコンスイッチを切った。船艇同士的位置関係を知らせ合い把握するビーコンを無効化してしまえば、運河管理局の捕捉から逃れられる代わり接触の危険は極度に高まる。目視に頼るしか状況を知るすべはない。実質的には目隠しでハイウェイを走るのと同じだ。

『ハア? ええ? あんた今までどこ雲隠れしてたわけ? 依頼が捌けなくて困ってるんだけど? ええ?』

「土管より辛気臭いところだよ。リン姐御、外務次官会議の開催場所を教えてくれ」

『あんた今どこ?』

「《海鷗X》の中。第五区棧橋を北上中」

めまぐるしい水流の渦と泡が潜水鏡越しに襲いくる。

命を預ける操縦桿を余計な力の入らぬように握り締める、

『今年は雲州神弓湖畔のええつと、ロイヤルホテルだったかしらね?』

ラウ・ジャウは予想していた通りの地名を聞いて舌打ちする。

「神弓湖畔、……よりによって何でそんなところで! 雁首そろえて
ノコノコ集まってくるんじゃないわねーってんだよ、くそっ!」

『あたしに怒鳴るんじゃないわよ!』

ドスのきいた超弩級の音声で怒鳴り返されて背筋が竦んだ。

(……MPより怖い)

しかし頭が冷えた。そうだ、予想はしていたことだ。いまさら熱くなることでもない、が。

「神弓湖畔にはクアンの別荘があった。売り払われて建物も建て替

えられると聞いたが……」

『ラウ、あんた追われてるのよね』

はっと、ラウ・ジャウは視線を顎の送話管へと無理に下ろした。
なるほどマフィアの情報網は公安の動きに聡いか。

『警備の渦中に飛び込んでなにしようっての。人生棒に振るつもり？』

呆れる声音に彼は苦笑する。

『俺のパパによるとすでに振りまくってるみたいだけどな』

『あたしの事業をボンボンの価値観で馬鹿にするなら解雇するよ、ラウ・ジャウ』

『いや、まさか。俺は好きだよ。祈祷師のおっちゃんのためのオオアサを運ぶ奴がいなかったら、近所の子供が瞑想中のおっちゃんの顔に落書きして遊べなくなるだろ』

濁った水に漂う藻の群れの向こう、淡く光る識別灯を見分けて舵を切る。

『だからドジを踏むつもりはないよ。リン姐御、エースが不在で立て込んでるところ悪いが、割り込み希望だ。たってコンスに依頼したいことがあるんだ』

『依頼？』

配達人のその言葉にリン姐御は怪訝そうな声を上げた。

『荷物はオペラハウスのカトラ主宰の部屋にある“修正稿”だ。M Pが押収したって気配はないから、どこかに巧く隠してあるはずだ。二番手に早くて頭の回る配達人を指定するから、取りに行かせてくれ』

『一番手じゃないわけ？』

『^{エース}一番手は『海鷗X』だろ？』

リン姐御は鼻を鳴らして笑ってみせる。ありありとその表情が浮かんだ。

『どうかしらないけど、それって高いわよ。あんた土管の食餌代でピーピーしてるんじゃないの？』

「貯金で間に合えば全部はたくさ」

真剣に向き合う潜水鏡へ目をすがめてラウ・ジャウは言った。

口の端には自嘲を刻んだ。

金はなんとなく、リスタートのために貯めていただけのものだ。

目的はない。ラウ・ジャウは戻るかもしれない友人をそうしながら待っていたが、その彼は異国で新しい人生を見つけたのだろう。

今となれば、見つけられたのであってほしかった。

(そうだよな？ ツェー・クアン)

その正否を、ラウ・ジャウは確かめに行こうとしていた。

だから間に合え。

今度こそは。

間に合え！

？

？

真闇が揺れている。

時折り気泡が生まれてからかうように過ぎてゆく。

月明かりが届くはずの水面は遠い。

水底を這い進む。

市街地を離れ、計器計測と彼の勘を合わせれば40キロほどのところ。田園地帯に挟まれた区間を《海鷗X》はのぼっているはずである。

室内灯の落とされたキャビンには、計器の蛍光塗料だけが黄色く浮かぶ。

元々充分ではなかった電動機の充電残量がギリギリを指していた。充電するにはいったんシュノーケル深度まで浮上してガスエンジン航行に移る必要があった。近くに街も運河警備隊施設もない。やるなら今ここが最善だ。

メインタンクに圧縮空気を注入。同時に河水が排出されていく。

《海鷗X》は運河の左隅で浮上した。すかさずエンジンを始動させ、無事に回転がかかったところで動力源切り替えレバーを引く。

キャビンの背後からガソリンエンジンの駆動音と振動が響き伝わった。

X型ガス・エレクトリック。

《海鷗》は、水上及びシュノーケル使用限度でのエンジン航行時も、ガスエンジンで発電機を回転させて得る電力を使う。潜行時はそれによって蓄電した充電力で航行する。このハイブリッド方式が従来の直結式機関と異なるのは充電効率のよさだったが、小型艇への積載に戦時中成功したのは《海鷗》シリーズのみだった。さらに《海鷗X》に搭載されたガス・エレクトリックが特に優れたのは、

その充電容量だった。

モーターの消音特質によって得られる隠密性と、航続距離と、独自設計の高軌道。

それら敵哨戒を擦り抜けやすくする三拍子が、このシリーズを通商破壊の花形に押し上げたのだ。

だが、平時の民間には無用の長物であるかくれやすさ、みづかりにくさを備えた《海鷗x》は、運河を運行する配送業艇の中では単に異端だった。

我が国の運河行路活用のために製造される民間潜水艇は、エンジン・電動機直結式がまだ主流だ。

基地島玉砕のとき初めて敵軍に鹵獲された《海鷗x》は徹底的な解析を受けて、技術のほとんどをローグランド軍潜水艇に应用された。だから現在では、ローグランド軍の小型潜水艇こそが《海鷗x》の後継艇と言い得るかもしれない。

ラウ・ジャウは後方に向けた潜水鏡を覗きながら、徐々にエンジン回転数を上げていった。追ってくるだろう巡視船が危険要素だった。容量に自信のあるx型ガス・エレクトリックも結局、充電のための浮上中は無防備であるという死角は他と変わらない。水面に突き出したシュノーケルが引く航跡ウエーキを視認されれば、自由を賭けた追いかけてつこがはじまる。

(ちくしょう、参ったな)

愚かしいことだと思いつつ、突破の感覚を楽しむ自分がいるのだ。恐らくこの先には、テロを警戒する占領軍の厳重な警備網が運河を埋めている。

ただでさえ、誘導整理を無視して封鎖区域に侵入した艇への処置は、民間艇側ビーコンの故障事故によるものが度々であるにもかかわらず、容赦のないことで知られ、反ローグランド感情の燃料となってきた現実がある。

いわんや《海鷗x》をや。

……けれども感じるのは、恐れよりも。

恐れが当たり前であった日々への回帰にはやる鼓動だった。

かつて彼のいた世界。

それを生きていたときは、一刻も早く終わってほしいとしか思わなかった世界。

終わるべきだった争いの世界。

息もできない闇と無音の水底。

(どうしようもないな)

ある時点でようやく戦^{いくさ}することの麻痺から目覚めようとした自分は、本能ではなく理性でそれをしたに違いない。罪の意識を教えたあの窒息の夢も、恐怖もすべて、踏みとどまるための警告としてあらわれた、良心のかけらだ。

ラウ・ジャウには、本当に守りたいものなどなかった。

彼がいなくても、彼の家族はみな勝手に生きていける地位にあった。今も昔も。

国を守ることが彼の職業であったが、国も、国に付随するプライドも、けっきょくは住み処^かでしかない。

現にラウ・ジャウはそれらを失っても、復讐鬼になどなれなかったし、といって、生まれを利用して復興に手を貸す意志を持つこともなかったわけだ。

彼にはこだわりがなかった。

気に入らないものへの反発だけで生きてきた。

戦争中、彼の命を奪おうとするローグランド艦艇は、垂れ下がる釣り餌のごとく気に入らないものだった。

彼が決めた戦争ではなかったが、軍人にそもそも投票権もなく、それは関係なかった。やらなければやられる。時代は軍人という職業を選ばなかった者たちでさえもその同じ状況へと大量に追い込んでいったのだから、考えることに意味などなかった。選ぶ余地など皆無。

目の前のスリルにただ躍起になった。

生き残るためのアクションだけが頭を占めた。

切り抜けては仰ぐ大海上の空をこのうえなく美しいものと思い、
数えて。

今は見ることができなくなってしまったあの空の綺麗さ。

(戻りたいのか、あんなところへ)

当時の感覚へと帰ってゆきかける自分に呆れた。

(あんな、野蛮な世界)

一度経験すればたくさんだ。失うものないラウ・ジャウだって、
失った人間の姿を見るのは苦しかった。

なのに何故、《海鷗x》が生き生きと息を吹き返したように感じ
るのだろう。

嬉しがっているみたいだ、と。

恐怖や、儂さや、美しい手紙や、失う不幸と哀しみだけが戦争の
遺物なのではないことを、呆れながらラウ・ジャウは自分に思い知
る。

業とでもいうべきものか。

首都から離れ夜通し寛州を横目に北上を続けた《海鷗x》は、午
後七時ごろ雲州入り口の中継駅付近を通過した。

各都市の中継駅は通行料徴収のために存在し、給油地及び操艇士
の休憩地点でもある。バラックの仮眠所や屋台がひしめき、客を取
り合う。夜は酒場が活況づいた。

しかしビーコンを無効にした《海鷗x》はそこを静かに深く沈ん
で通り過ぎた。

腕の時計で八時ごろ、神弓湖手前の陵千駅で検問の気配にラウ・
ジャウは気づく。

前方頭上、定規のような光の帯が水に歪みながら横移動するのが
見えた。サーチライトだ。底に届く強力な光は、占領軍所有のライ
トに違いない。

水路途中からの上陸を防ぐため、通過する船艇はすべて臨検を受けなければならぬというわけだ。民間艇はビーコン誘導で水上へ上げられたはず。

―帯はすでに封鎖されたと見ていい。

ヤン少尉が個人的にあのように策を弄したとしても、脱走したラウ・ジャウは軍警察総体からはテロリストの共犯と判断される。

（喋ってやったのに、……恩を仇でかえすって感覚はないだろうな）
思ったところヘラウ・ジャウの耳が嫌な音を捉えた。
かすかに、彼方から、届く。

……ぴん。

アクティブ・ソナー音だ。

耳を疑うほど久しぶりにラウ・ジャウはその音色を聞いた。

（おいおい、ここ外海じゃない、運河だぞ。バツカじゃねえの）
実際に遭遇してみると、実に馬鹿馬鹿しい。

もつとも、戦争なんぞ実際いつでも、馬鹿馬鹿しいことを我慢しなければやってられないものだった。

ラウ・ジャウは電動機をオフにし、スクリューを止め、じつとわずくまるように《海鷗X》を静める。

哨戒船から発せられるアクティブ・ソナー音は徐々に近付いて、
《海鷗X》を萎縮させる。

過去に運河爆破テロ予告の類いがなかったわけでもない。警戒網の手が混んでいてもおかしくはない、が。

（丸腰相手に大人気ないよ）

もちろん《海鷗X》に兵装は名残すらもない。

++

『こうして敵から隠れまわりながら鉄の塊の中にじつとしていると、子供のころスイとかくれんぼして遊んだことを思い出すよ。家中の

暗がりを駆使して隠れたものだ』

火器管制機器のチェックを終えたツェー・クアン中尉が、報告と一緒に伝えてよこしたそんな言葉に、ラウは軽く眉をしかめた。

「何を呑気な」

戦場でする話とも思えない。

呆れ声で応えたラウだ。ツェーは続いて『パッシブに敵影なし』とソナーを読んだあと、まだ言った。

『そうかな。なあ、ラウ、戦争が終わったら、うちで三人でかくれんぼしないか？ きつと楽しいよ。たとえ鬼に見つかってどうって事はなくて、せいぜい賭けるのは君の場合は胡麻団子くらいのものだ』

「いや、本気になるだろ、それは」

『僕は何を賭けよう』

「スイと楽しげに話す男に嫉妬しない券、とかな」

『いいけど、一日券だな』

手綱を放そうとしない兄貴にラウはにやにや笑ったが、ふと気が付いたことがある。

「お前の家かよ。無駄に広いし俺が思いっきり不利じゃないか」

『一分ハンデを付けてもいいよ』

「ごめんだ。ハンデなんて又ルいもの、いらないね」

返った沈黙はあきらかに、そう答えると思ったと言いたげな微笑を含んでいる。

敵補給船との接触目標地点までおよそ二十二海里。到達は0時の予定だ。

ラウは操舵桿から手を放し、懐のダーツケースから、一本の矢を取り出す。

彼は出撃のとき、いつもそれをお守りのように懐に持った。一撃必殺命中と掛けて、任務の成功を重ね見た。

薄暗い後席キャビンで眉間に皺して、羽に付いた毛羽をはらい、矢先をなでる。

彼が手入れを欠かさないため、銀の矢先はいつでも鋭利だ。

ちくちくとした刺激を中指の腹に当てながら、任務のプロセスを、集中にとがった頭の中で確認していく。

実戦に出てそろそろ半年が経とうとする。ラウとツエーの組は、隊のエースに次ぐ戦績を叩き出しつつあった。単に運がいいだけなのかもしれないのは、深刻な危機に陥ったことはまだなかったゆえに。

戦況じたいはちっとも芳しいものではないが、《海鷗》の活躍はとりあえず途切れていない。もしこれが途絶えがちにでもなれば、それはいよいよ海軍全体として大局的に出来ることを失ったときだと見ていいだろう。

ローグランドとの講和の道がひらけないなら、《海鷗x》に待つのは出口のない敗戦処理、ということになるだろう。だが、先のことや上のことは、現場の一尉官が展望したところでどうもならない。だいたいラウは、《海鷗x》と海に身を沈める以上は、そもそも一秒一秒を生きることのほうが奇跡に近い、自然界レベルの生存競争なのだと思っている。それはたとえ我が軍が戦局を作れていたとしてもだ。戦場に絶対はないのだから。

だから先のことなど関係ない。魚が明日を心配して生きているか？

「戦争が終わったら、か……」

それはラウの中には存在しなかった言葉だ。

夢物語に聞こえて、ラウは苦笑してみた。

言ったツエーは職業軍人ではない。この戦争はたしかに総力戦の様相を極めるが、巨大財閥の跡取り息子であるツエーがこんな前線に出ているのは、ツエーの父であるタウジン・クアンが西海のしきたりで言う貴族精神を重んじたためだった。

政治の黒幕ともささやかれるタウジン・クアンの息子は、問われて戦時の青年として当たり前の愛国意見を答えることはあっても、本心は常にその奥にぼやかしていた。現在の国策にツエーが何らかの異見を持っているかどうか、はともかくとして、我が身の置かれ

た状況への恐怖や、失望や　そうした個人的かつ人間的な感覚の有無、それすら、友人として付き合うラウにも判然としない。

だがまあ、誰よりも“某の息子”として興味を向けられる煩わしさを知るラウは、その賢明さを理解したし、共感もできる。

だからあえて問うこともしてこなかったが、本人から未来のことが話を持ち出されてみると、にわかには、隙をつつきたい気になった。それだけ珍しいことだったからだ。

「俺の親父が、この前なんてったと思う。『終戦後は親西海派閥（いっぴい）が忙しくなる。お前の手でも借りねばならんくらいだろうから、必ず生きて帰ってこい』だと」

『ああ、駅で仏頂面をしてたのはそれか』

ラウは、貼り付けていた苦笑から笑いを消し、苦みだけを残した。ローグランドのみならず、父にまで勝ちを持って行かれつつある反抗息子は、あの父親にして最高の言葉がけだとわかりながらも素直に感じ入ることをやはり拒否したのだった。

「俺の能力で生き残ったなら、俺の人生だ」
『はつきりしているな』

ツエーのその声はどこか突き放して聞こえるいつもの彼の調子でありつつ、暗に彼自身はラウほど割り切っていないことを言い表すような言葉選びだ。

「ツエー、戦争が終わったら、お前は何になりたいんだ？」

『何になりたいか？　子供にする質問みたいだな』

いつもの彼の調子ではぐらかす。

ラウはここぞとばかり食い下がった。

「秘密主義はやめてとつと話しちまえよ。もしも俺だけが生き残ったりしたとき、あいつはあの時こう言ってた、とかの持ちネタがないと話に困るだろ」

『……君だけ生き残る状況がありうるのか？』

「ものは例えつてやつだろ」

『陸で襲われれば有り得るけどね。潜水艇乗りの恥だな』

「御託はいいから」

ツェーは二呼吸ぶん、沈黙を置いた。

『文学部に入ったのは、出版に携わりたかったというのがある。編集者になりたいと思っていた。自分で出版社を立ち上げたいし、翻訳にも力をいれたい。そんな夢はあったよ。我が国に必要なのはそういうものだと思っっている』

「ほう、そうなのか。しかし家はどうするんだ？」

『どうにでもしろ、と父は言ってくれたな。クアングループ総帥と言ってもこれという椅子があるわけじゃない。父が軍需にグループの発展を見いだしたように、僕は僕で次の市場を見つけたら食らいつけということらしい。一つの事業に固執しないことが生存と発展の鍵なんだ、と』

「軍事の次は文化か。すごい変わり身になりそうだな」

クアングループとしては、百八十度のイメージ転換となる。だが、ツェー個人のイメージには、それは聞かされてみればなるほどぴたりと嵌まっている。

『国民はきつとすぐに戦争に飽きてしまう』

突き放した口調でツェーは言った。

有権者が見た理想と現実を、はたから俯瞰するように。

ラウはいつか父ラオゾーからも同じ言葉を聞いた。そしておそらくタウジン・クアンも同じ言葉を持っているのだ。ツェーの視点には、ラウが背を向けた為政者の世界のそれが多かれ少なかれ混じっている。ラウと違って、ツェーにはタウジンへの尊敬が自然にある。主張を異にすれど、ジャウツアイもクアンも見ているものは同じ。というのは、世界の皮肉なのか、それとも黒さなのか。

『で、ラウは？』

「俺は先のことなんて考えない。今は空が見たい。陸にいと潜りたくなる。潜ると空が見たくなる。それだけだな」

2357時。慎重の上にも慎重な警戒を働かせて敵通商海路に近づいた《海鷗X》二十三番艇は、周囲に敵の警戒がないのを確認後、

作戦表通り敵補給商船攻撃準備に移った。

「シユノーケル深度まで浮上」

射程ぎりぎりの距離でのメインタンクブロー・シーケンス。

『二時の方向に中型商船を確認。小型護衛艦が前後に一。三隻とも全長が見える位置にいる』

「前後は無視。商船に全弾集中させる。魚雷管用意」

舵をとり、二時の方向に艇首を合わせながらラウは命じた。

『了解。魚雷管用意』

魚雷発射機構が艇の左右、鋼鉄の擦れるわずかな音をたてて働く。

『面舵三度』

潜水鏡を覗いて照準指示する中尉にしたがい、ラウは艇をあやつる。続いて水平計を見ながら魚雷発射姿勢を取った。

『射撃用意完了』

「斉射しろ」

『斉射』

ガタタン、という衝撃と共に艇を取り残し、魚雷が前へ出た。

二弾の引く気泡音が《海鷗X》を包んだ。

『第二射用意、 斉射』

ラウは第二射の出る衝撃のあとすぐに《海鷗X》を九時方向すなわち敵船進行方向の逆へ回頭した。トリム及びメインタンクに海水を吸い込み、海底へ潜りながら全速潜行。

ややしてソナー担当の前席から報告がある。

『パツシブに全弾命中音を確認。一発は機関に当たった』

「上等。あとは逃げ帰るだけだ」

《海鷗X》は全速力で作戦海域を離れる。小型駆逐艦を凌駕する《海鷗X》の速力は、隠密攻撃が成功した場合にこうして威力を発揮する。

『大尉、機関停止』

二十分ほど進んだころ、クアン中尉が落とした声で言った。

攻撃からの帰路は魔の時間だ。近海哨戒中の敵が無線を受けて迎

撃に集まってくるは必然だからだった。ラウは考える秒もなく機関停止のスイッチを下げた。緊急スクリュー停止。艇は水中に浮遊した。受動ソナーが捉えたらしき敵の音にラウは耳をすます。ソナーがつかんだのは航行音か、それとも。

息の詰まる沈黙が降りた。

耳に痛む静寂。

(耳を)

(澄ませろ)

(息を忘れても)

何も聴こえない。

何かは聴こえる。

水の中でいつも聴こえているものは。

何も聴こえない。

聴こえてならないものは。

……いいや

……いいや、何か。

……何か聴こえた。

……聴こえた？

それは遠く、高い、硬質な。

透明な。水の。しずく。が。落ちたように。

銅の盤の中、張

り詰めた水鏡に落ちたように。

そして、

届く。

p i n g

(探針音……ッ)

ラウは目を開けた。アクティブが来ているということは、その敵に未だ《海鷗x》が捕捉されていないことを意味した。

このままやりすぎす。

敵が通り過ぎるのを待つのだ。

《海鷗x》の艇体を覆う反射タイルは鉄板の塊である艇をアクテイブな探りの前に隠匿する。仲間内で“河童の隠れ蓑”と呼ばれる、我が国潜水艇技術の粋だ。

夜の海中、相手潜水艦にも視界はない。

(無に)

なればよい。

海底で色を擬態する甲殻類のように。

そう念じると、額に浮く汗を拭う気にもなれず、ひたすらに時だけを感ずる。

だが機関停止と同時に時すらも止まってしまったような錯覚を覚えるのは、これが恐怖心というものだろうか。

実戦配置以来ほとんど初めてといえる、あきらかな包囲網との接触。

駆逐艦に追いかけられた経験なら三度あったが、速力と小回りに勝る《海鷗x》は海上艦からの魚雷攻撃をまともに食らわずに済んできた。だがもし、相手が潜水艦ともなると話が変わる。海中自由度の高い潜水艦に大型機関の馬力で食いつかれれば小型潜水艇の《海鷗x》はひとたまりもないのだ。

……ping

……ping

皮肉にも敵の探針音が、止まった時を無理に引っ張るように進める。前へ。前へと。近づく。

ラウたちを時の前に引きずり出そうとして。

渴望が頭を回転させる。幾通りもの逃げ道をシミュレートする。

自由を求める。もういちど空を見るのだ。絶対に負けたくない。誰が負けるか！

音は近づききらないまま、方向を変えて遠ざかるようだった。

ブラフの可能性は？

ある。

今にも、《海鷗x》を捕捉した相手から、一斉に魚雷が向かってくる可能性はある。

全神経を耳にする。

万が一のそのときは、メインと予備タンクを一気に満たして潜ることを想定する。

艇長のラウに二人の命は任されている。ラウが決断し、ラウの責任で生還と藻屑のあいだが隔てられる。失敗すれば、還らなかつた二十三番艇のキャプテンとしてのラウ・ジャウ大尉があとに語られることになる。絶対に御免こうむる。

何がくる気配もないまま十分を数えた。そのときだ。

後方からスクリーン音が迫ってきた。

やや上を潜水艦が通ろうとしている。

(中型……リッツ級か。さっきの艦か?)

静穏設計に優れるローグランド潜水艦の航行音がはっきりと聴こえるということは、よほど真上を来る。

探針音はすでに放っていないが、上と下とで接触したら？

避けるためにいま、沈降するか。気泡を受動ソナーに捉えられる危険と天秤にはかり、ラウは無になり切ることに賭けた。

頭に装着している送受話管装置の送話管を指で叩き、ラウは前席のツェーにそれを伝える。了の返事が受話管に返る。

前席ソナーは今やはっきりと相手艦の動作音を可視化しているはずだ。

生の耳にも、《海鷗x》より二回り大きな鉄の塊が水圧にゆらんとした軋みをたてながら、水をプロペラで攪拌しながら得た推進力で滑りくる様が、ありありとわかった。

目に見えはしない姿を追って、ラウは思わず天井へ視線を釘付けていた。

固唾をのんで通過を忍ぶ。

至近だ。

体積とスピードの余波がくる。《海鷗Ⅹ》が小船のように揺られた。一部、艇尾が接触し、弾かれた。

見つかった。

「くそッ」

ラウは機関を眠りから起こした。フルスロットルでスクリュー回転速を上げる。

全速離脱をはかる。四十五度角に舵を切りながら前進。

前後に魚雷を撃てる相手艦の照準機動速度、魚雷の推進速度、《海鷗Ⅹ》の最速を差し引き計算して、逃げ切れる確率は一割に満たない。

「大尉、再回頭を進言する」

受話管にツエーの沈着な声が響いた。

ラウは耳を疑う。

「意味がわからん。クアン中尉」

さっきの場所に正気を置いてきたか？ ラウは操舵に神経を傾け

ながら眉をひそめきつた。

「魚雷の発射前又は速度を出さない内に敵艦至近に入って、艦首に突っ込もう。リッツ級は鼻面が弱い。そしてそこに圧縮空気タンクとディーゼルオイルの予備タンクがある」

「なら、まだ中魚雷がある」

「中魚雷二本では、この状況では命中も怪しい上に、寸分狂いなく正面に当たらない限り破壊は無理だ。突貫直前に射出しておいて」

「」

「馬鹿かお前」

「離脱後にちょうど破壊部へ刺されれば、撃沈できる。君なら艇を引き抜けるだろう」

「ツエー」

おかまいなし、至極冷静に説明し続けた中尉に苛立ち、ラウは凄

んだ。

それでも送話管越しに届く中尉の口調は揺らがなかった。

『それしか道がない。このままなら二人とも死ぬ。《海鷗X》の設計は』

『もういい!』

《海鷗X》は小型ゆえに丈夫な骨格と装甲を誇り、さらに前席後席が完全に個室化された設計も艇の強度を高めている。

そしてキャビンの独立性は、被弾時の生存率を個別にわかっものでもある。

敵艦首めがけて頭から突っ込む攻撃など、想定されてはいないが。『ラウ、一人でも基地に帰り着こう。現実として、犠牲なしには生き残れない。事実として、敵艦をやらなければこの場を切り抜けない』

やらなければやられる。

敵味方なく、そのルールにのつとれと?

『君の操舵と《海鷗X》の機動ならできる。どうせ死ぬなら僕は、希望を残したい。ラウ』

ラウは首を胸の前へ折って沈めた。目を閉じる。

腹の底からもたげた怒りは、ツェーに対してであり、状況に対してであり、自分に対してのものでもある。

心の底から、低く、

「俺は……」

思いを絞り出した声がかすれた。

「……そういう熱血が大嫌いなんだよ」

取り舵。スクリュー停止。最小軌道で左旋回。

百八十度回頭。

『君の中の天邪鬼は、戦場では悪さをしない。だから僕は君に命を預けていられる』

「いい加減なことを言うな。お前の我が儘こそお見通しでこっちは付き合っってきてんだよ。ボンボンの勝手がこの期に及んで押し通せ

ると思うなよ」

急な挙動に艇の設計の遊びが軋みを鳴らした。それに混じって『……ラウ?』と真意に戸惑うツエーの呟きが届く。

「敵位置をよこせ、中尉」

ツエーは疑問に食い下がることもなくナビゲートを始めた。

計器と首っ引き、ラウは意識して《海鷗x》と我とを一体にイメージする。艇体、その骨格、水に泳ぐフォルム、熟練整備士の手になるメカニックの接続、訓練期間から把握を重ねた二十三番艇固有の癖、動き。水に棲む《海鷗x》の視覚である、ツエーの航行ナビゲーション。すべてを我が身のうちに想起し、我そのものとして《海鷗x》を駆ろうとした。

「懐に入って残弾たたき込むぞ。絶対に鼻面に当てる!」

艇長の判断が絶対だ。

有無は言わせない。クルーを犠牲に生還した艇長などという汚名を引き受けてやるつもりはない。誰がそんなもの。

「距離百で撃て!」

『……了解した』

あきらめと、無謀に呆れる意味での苦笑を浮かべて返事したようだ。向かってくる敵魚雷を躲すのも無茶なら、距離百まで接近したあと敵艦を避けきることの絶望的な難しさも、尋常の策としてあり得ない。頭からぶつけてしまったほうが、半端に避け切れないより少なくとも後席の生存率は上がるという理屈がツエーの意見だ。とはいえツエーがしたその提案もこれも、半分までは同じなのだし、もう半分のやけっぱちさと比べても尋常でないことに大差なんかない。

迷いなくやれるぶん、自らの選択に自らの技量を預けてこそ勝機があるというラウは判じた。

『敵魚雷発射音を確認、四弾来る』

相対速度で襲う魚雷を抜けようと言うのだから、それは勘の世界だった。

敵艦まで距離二二〇のところ、ラウは耳で聞き分けた敵魚雷が噴射する圧縮酸素のウェーキの隙間に《海鷗x》を滑り込ませた。四本の鉤爪のような攻撃が、身体の両脇を過ぎていく、その風切る音を聴いた気がした。現実、周りに満たされているのは塩の水だった。

『魚雷速度、ジャイロ設定完了』

魚雷内のジャイロコンパスは、波の影響を修正して目標地点へ正確に向かわせる。発射位置と座標の計算が命中精度を決定づけることになる。割り出した設定と実際のタイミングとの一致が肝だが、ツエーなら間違えない。彼ならラウの呼吸を読める。

中型艦の大味な扇状攻撃とは違う、こちらは精密射撃でいく。

『次弾の発射がなかったな』

「まさか向かって来るとは思わなかったんだろ。そのまま硬直しているよ！」

追いかけて回して《海鷗x》を弄ぶつもりだったろう相手は、尋常ではない反撃に混乱中と見えた。まさしく窮鼠なんとやら、まるで戦争の構図とそっくりじゃないか、ラウは思った。プライドを選んで破滅に向かうところまでが。

『距離読み開始。 百八十、 百六十、 四、三、二、……
行け』

艇首下部フィン舵を逆回転させた。あたまを上げる。急上昇。

空気注入したトリム・タンクによって浮力を得た艇首は海面めざして持ち上がる。全速力の慣性のまま上へと駆け抜ける。真下で起きたバブルパルスの轟音が《海鷗x》に追いつがった。命中の証しであるとともに、凶暴な噴火口でもあった。衝撃波が艇の腹を襲い、翻弄した。

席から投げ出されてラウは側壁にこめかみと肩を激しくぶつけた。さらに誘爆が続き、《海鷗x》は艇尾をはたかれる接触到コントロールを失いかけたあと、コンソールにかじりついたラウがとったメインタंक・ブローで、その場から離脱を遂げる。

浮上しながらも圧縮空気のメーターが異常な目減りを示していた。

「やられた……な」

敵艦の破片が艇尾を破損したらしく、メインタンク・ブローは正常に働いているが、同時に圧縮空気タンクから漏れが発生している。この一回のブローで使い果たすだろう。

《海鷗×》はもう潜れない。

「ぶかぶかちんたら帰るつきやないぜ、ははっ」

引きつる頬に笑いがこみあげて止まらなくなる。

ははっ、あっはははははっ

ラウはシートに背中から倒れ天井を見ながら笑い狂った。

海中はしんと静まり返っていた。急浮上で耳がやられたのかもしれないなかった。

「……おまえ、大丈夫か？」

喉に空咳を混じらせながらも笑い続けるラウに、沈着冷静なツエーの声がかかる。

「くはっ…… ツエー、てめえ、こういつ時くらい弾けるよ」

笑い過ぎてすぎすぎするこめかみを手で押さえると、ぬめっとした液体にまみれた。手のひらが真っ赤に濡れて帰ってきた。

「怪我は？」

「そっちはどうだ？」

ラウはメインタンクのバラスト・バルブを閉め、電源をガソリンエンジンに切り替えた。味方補給母艦の待つ北々東へ進路をとる。

シートから身体をのばして、頭上のハンドルを回し開ける。内と外、二重のハッチをひらいて、ラダーに手足をかけ、のぼりつめた空。

満天の屑星散らばる空だ。

潮の濃い空気を吸い込み、ハッチ縁に腰掛けたまま、《海鷗×》

の上で仰向けになった。空がよく見える。空しか見えない。一面三六〇度に漆黒の幕が降りた世界。空と海の境は丁寧に塗り込められて上下左右をなくしていた。

「ここは敵の制海空域だったが、海も空も、見る権利は誰のものでもなかった。」

そして制海空域であろうがなかるうが、敵も味方も死ぬときは死ぬ。五分五分の生存競争だ。

「二十人くらい乗っていた筈なんだ」

いつの間にか、そこへ膝を立てて座っていた彼に、首を反らして視線を送り、ラウは海面を見つめる友人の横顔を見い出す。

「ツエー？」

「あつと言つ間に、何も成さない残骸に変わった。二人が生きるために二十余人が消えなければならなかった。計算がおかしいな」

そう言つて、ラウへ顔を向けて少し笑う。おかしなことをしているものだと、諧謔を刻んで。

ラウは視線を外し、うなじの下で腕組んで再び星空を見た。

「しかし色んな意味で、それは仕方ないさ。ローグランドだって我が国だつて、民主的な政治つてやつでこの道を選んだ。この道に入った以上、この道のルールに従つて生きて死ぬだけさ」

基地島の浜から見ると、大海のただ中に浮かぶ月も、この夜にあるべき同じ色と形と位置取りで、ラウを見下ろす。形の変化で日一日を数え、運行を以って船乗りへ水先を案内する、月と星々。

「こう言えば怒るに違いないが、ラウはやはりジャウツァイ氏の息子だよ。そうやって、けして人の耳に聞こえないよくない正論をはっきりと言つところは」

自嘲めいたおもしろがりやを口先にぶらさげたままのツエーの声だった。

「……………お互い様だろ」

自分とて、つい一、二時間前シビアな民心分析を口走っていた。

口まねではなくとも、知らず出てしまうのが親の影響力というもの

だろう。

だが、相手がツェー・クアンなのであれば、指摘されてラウの神経が怒気に染まることはなかった。やつかみも、敵対心も、下手なやじ馬根性も、そこには混じっているはずがないからだ。

なのでラウは、もっと別のことに今は神経を使えて、気づいていた。ツェーが表現してみせた生死の無常感、その感覚は、戦場ではあまり有益なものではない。よくない兆しだ。

作戦行動の少し前から彼は、いつもはない感傷にとらわれているようだった。

「ツェー、《海鷗X》が、ローグランド側になんて呼ばれてるか聞いたか？」

「いや」

「《フラウンダー》だったさ」

「《フラウンダー》？ フラウンダーは、たしか平目のことじゃなかったか」

「ああ、誤訳だな。笑うよな、ヒラメとエイじゃ、なんか違う……」

《海鷗》の名は、元はノコギリエイから来ているので、訳すならソーフィッシュが正しい。

ノコギリエイは泥に濁った水を好む夜行性の底性生物であることから、隠密性が武器の新型艇名称に採用されたという。一般的なエイのように平べったくなく流線型で細長いその姿形も、《海鷗X》のフォルムと重ならないことはない。

「ノコギリエイとは、さらに全然違うな」

「あいつら分かってないのさ、俺たちの語感なんか。人の名前だつてちゃんと正しく呼ぶつもりがない」

ラウは洒落のめすように吐き捨てた。

「生態も政治形態もやってることの本質も同じ人間かもしれないが、分かり合おうという気がないんだ。絶望的に断絶してるのさ」

同じ人間だが、同じ視線や思いや価値観を共有できるかは難しい。そして譲れない視線や思いや価値観が人間にはある。

分かり合えないから力づくの戦争になった。譲れないから奪い合
いになった。

なった以上は、やらなければやられる、それだけだ。
ルールに適応できない人間も、ここでは真つ先に死ぬ。
迷いや感傷は命取りになる。

ラウにはツエーを死なせるわけにいかない理由が三人ぶんあった。
艇長である自分と、彼の親友である自分と、もう一人は……

「ツエー」

黙り込んだ友人の葛藤に蓋するように、呼びかけた。

譲れない、奪われたくないものの存在が、人を戦に縛り付け、己
の命に執着させるならば。

「俺さ、スイと約束してるんだよ。絶対に、宵の明星にかけて絶対
に、兄貴だけは生きたまま連れて帰るつてな」

約束、させられた。

ラウならできるよね？ ゲーゲー 哥哥の親友になれたくらいだもん。

にっこり笑った顔に一生懸命不安を隠して言われれば安請け合
いするしかなかった。兵を送り出す銃後の者にも弱気があつてはな
らないと知っているからスイはいつでも無邪気に笑って、勝利をねだ
る。でも多分、あの約束だけは。

横つ面に水しぶきを浴びてラウは跳ね起きた。

「冷つてーな」

睨みつけると、水面に片足を伸ばしたツエーは胡乱げに目を細め
てこつちを見ている。

「僕の許可なく、勝手にスイと約束するな」

「お前、ガキか。スイに俺が手を出すとも思ってたのか。相手は
中学生だぞ」

「そうか、今度の手紙でそれは伝えておく」

「いや、別にわざわざ、やめるよ」

目付きに込めた牽制をふと解かし、口の端でゆるく笑みながら、
聞き入れてやらんというように首を振り、ツエーは水面に向き直る。

ぼつと出ごときに負けじとして、言う。

「約束なら僕もした。必ず、真昼の月にかけて必ず、勝って帰ってくる、ついでにラウも一緒に、と」

「俺、ついでかよ！」

抗議を横目に、ツエーは肩を震わせて笑った。やがて声に出して笑い始めた。さっき笑っていたばかりのラウにまで、また新しいおかしさを伝染させた。そして二人はひとしきり、首をうつむいて肺から空気を追い出し続けた。

しばらく喉に引き攣る発作をひきずり、途中からは、だんだん何がおかしいのかラウはわからなくなっていた。おそらく敵の縄張りで無防備なまま確認する約束じゃないなということに笑えてきたのだ、と考えて納得させた。約束に誠実であるだけでそれを守れるなら、こつとも笑える空しさを感じることもない。だが現実は違った。さっきの海中には二十余人分の約束が果たされず沈んだはずだった。

+++

(まだ俺が、感傷を拒否していた頃の)

……それは出来事だ。忘れていた。今まで。あるとき交わした会話の細部は。

なぜ急に思い出したのだろう。

逃げて、隠れる、その同じ状況だから、思い出したのか。

(無感覚だったんだ、俺は)

そうであるべきだと思っていた。自分は純学生、ツエーは特別学生、心構えが最初から違っている、だから自分はよりプロフェッショナルであらねばと、どこかで差別化していた。

何に関して？

呵責の引き受け方についてだ。

《海鷗X》は水上警戒艇のアクティブ・ソナーによる底ざらいを脱し、神弓湖駅めざして北上している。《海鷗X》がまとう反射タイルはまだ威力を失っていないかった。ところどころ欠損して、補充修理のあてもない部品なのだったが。幸運にも言うべきか、健気にも言うべきか、この今も《海鷗X》を守りきったのだ。技術者の努力の結晶としての《海鷗X》が、あの戦場でもラウたちを生き残らせた。

だから、《海鷗X》をスクラップにされてしまうままには放っておけなかった。それもまたラウ・ジャウの本心だ。

（俺は結構どうしようもない人間だが、気持ちに正直に生きるのは、そう悪いことでもない、思ってる）

戦争は八年前に終わった。

自由に、正直に生きられる世の中がその瞬間、戻った。

得ようとしたものは得られずに、失うばかりの戦争だったけれど、敗戦は、長い暗いトンネルの向こうの、鮮烈な光でもあったのだ。茫然としてしまうほどの光で、それは無にも近かったが、無差別に死んだり殺したりはもう、しなくてよかった。死んだり殺したりすることの愚かさを、せめて国民はその光から学んだ。そして自由を選び直した。

ラウ・ジャウもその一人だった。

《海鷗X》と共に運河を走る生活は、ラウ・ジャウが正直な気持ちで選んだ自由だ。

日常は何も街にだけあるのではなくて、一人の自由だって、運河の水底の往復だって、れっきとした日常だった。ラウ・ジャウは《海鷗X》を、英雄的な戦争の道具ではなくて、どうしようもない彼の商売の相棒にすることで、ただ水を泳ぐ機械に返したかった。怨念からも、羨望からも、《海鷗X》を解放したかった。

スクラップよりはその余生はマシな筈だ。人間みたいに馬鹿げた

プライドを、合理的なメカニズムである《海鷗X》は持たない筈だから。そりゃあ、そのために作られた性能を発揮できる逃走劇は、《海鷗X》とて楽しいだらうけど。

「だけど、たまの年寄りの冷や水なんだからな、わかっつけよ？」

ロートル爺ちゃん（イエイエ）。

「俺だつてもうトシだしな。お互い様だよ」

業だなんだと格好つけたところで、大したことは出来ないに決まっている。精一杯をするだけだ。

ラウ・ジャウは時計を見た。もうすぐ朝。夜が明ける。

そろそろ神弓湖駅に近い。神弓湖へは陸路、小高い山の峠を越えていくしか道がないが、もちろん駅周辺は占領軍の警備で固められていることだろう。湖を囲む避暑地一帯、及び山の一周も同じことだ。

（でも、前にあいつから聞いた話が本当なら……）

ラウ・ジャウはそのまま全速力で北上を続け、神弓駅を計算上の距離感で通り越した。午前九時ごろ、神弓の市街地を外れた10キロ先で《海鷗X》を浮上させた。

ラウ・ジャウはハッチをひらき、艇外に出た。

検問の合間と読んだ通り、ここまで過ぎると警戒艇の姿はない。

運河の中央を、三隻のタンカーが連なり、南下して過ぎようとしていた。のどかな水上の光景を眺める暇なく、ラウ・ジャウの手は前席ハッチのハンドルを回しにかかる。暗く冷たい空席に滑り込んだ。

運搬する荷の置き場になっている前席である。残っている装置は半分もない。レストアしたとき、潜水鏡は後席に付け替え、火器管制卓は廃棄処分した。絶縁テープでぐるぐる巻きに処理した配線の束が、装置の剥ぎ取られたスペースにいくつも垂れ下がる。

生きているのは、通信とソナー装置だけだ。

表面の錆び付いた機械がまだ動くかどうか心配だったが、取りもなおさず起こしてみる。

十秒ほどで、受動ソナーモニターに通電し、円形ガラスで蓋された真白い漉き紙が淡く下からの電球光を通した。漉き紙に張り巡らされた磁気発生線へ張り付く砂鉄が、三つの点を映し出す。四時の方向すぐ近くに三つの機関音。タンカーの音影だ。

卓に掛けられたヘッドホンを装着し、次にアクティブ・ソナーの健在を確認する。前方探索テスト。耳に ping 音の発信を確かめると、艇首から右斜め四十五度に向けて最小出力で探針音を放つよう設定し、記録紙への結果打ち出しを仕掛けた。

急ぎ後席キャビンへ戻り、ラウ・ジャウは《海鷗x》の艇首を回頭して運河の岸壁すれすれに寄り、潜行、今きた10キロをゆつくりと戻った。

潜水鏡で岸壁を視認しようと試みるが、藻に汚れた壁面は闇と同じ色をしていて、やはり無理である。

九十分後、中間の5キロ地点でラウ・ジャウは打ち出されて床にのたくる記録紙をソナー卓から切り取った。

規則的なパンチ穴の列が延々と続くロール紙を手繰っていけば、ある箇所に来てパンチ穴が途切れた。二間隔分がぼっかりとなく、そしてまた思い出したように始まり、あとはラウ・ジャウに切り取られるまで穴は空いている。海底地形を把握するための記録媒体であるロール紙には方眼が印刷されていて、穿たれたパンチ穴は探針音を反射する障害物のあるなしを表す。つまりここでは、コンクリートと煉瓦で出来た岸壁を。

穴の途切れた箇所は、出力を最小に弱めた超音波が至近の距離の壁を把握しなかったことを示す。誤差、揺らぎというには、ほかは規則正しいのにその箇所のみエラーがでてしまったことがおかしく思える。直進操舵は慎重に行なっただつもりだ。

(抜け水路の話は本当、か……)

ラウ・ジャウは眉間にしわ寄せ、奇想天外な現実にも首をひねった。クアン財閥が、《海鷗x》の前身技術となる小型潜水艇を作り上げた製造会社を買収したのは、開戦の気配こそまだ皆無だが、国民

のあいだに国家意識が高まりを見せ、軍部はローグランドを仮想敵国として模擬プランの作成に入り始めた頃だ。

彼一人の思惑で国家が動いていったのかどうかはともかくとして、いや、仮にそうだったのだとしても、タウジン・クアンには民心の動きすなわち未来を予測する能力があったということであり、軍事企業経営に力を入れた彼の一族の計算も、現代戦闘における潜水艦艇の存在感への先見の明も、ことごとく当を得ていたのは事実だ。

だが、潜水艇製造会社の買収にはもう一つ個人的な理由があったと、ラウ・ジャウは親友から聞いたことがある。

タウジン・クアンの巨大な権力は反ブルジョア運動家や、対立政党、はてはローグランドからも危険視されているために、常に暗殺の危険がつきまとう。

だからいざというとき隠密行動が可能になるように、タウジン・クアンはプライベート・サブマリンを手に入れようとした。もちろん、それは、個人には許されない運行許可ごと、という意味の話だ。そこまではまあ、いい。

こいつはおそらく冗談を言っているのだろうと思ったのは、その先だ。曰く、私用潜水艇を作らせたタウジンは、クアン総帥家の別荘がある神弓湖と運河をつなぐ秘密水路を密かに掘った、と。

それだけではない。水路以外にも、地下、海路、空路、あらゆる抜け道および発進基地を用意してあるタウジンの周到さは、大陸の西海人たちに負けず劣らずなのだ　と。

ラウ・ジャウが信じるかどうか、からかうように飄々と言って、笑っていた。その時のラウ・ジャウも、眉間にしわ寄せて首をひねるしか返すリアクションがなかったものだ。

運河に横穴を開けるなど。

イリーガルにも程がある。

しかし西海人の地下道だって存在したのだし、街の厳戒網を擦り抜けてマオ銀行へ肉薄できる地下通路も、MP本部爆破の事実からどうやら実在していたと見るべきで、ならばもう、何が本当でも驚

いてはいられない。

記録紙の記録をもとに距離と時速をあてはめ、横穴位置を割り出す計算を何度も繰り返し、正確さを確信できるまで繰り返し、ラウ・ジャウは覚悟の深呼吸を一度した。先を考えれば時間が惜しい。浮上沈降に必要な圧縮空気の無駄遣いもしたくない。ぶっつけ本番で進むしかない。

(禁制品配達の往復にはソナー員なんていないんだが)

たった今は一人二役が不便だ。ついでにダブルキャビンも不便だ。(これが終わったら改造すっかな)

しかしリン姐御の酸っぱさにかかつては、例の依頼、本気で貯金が大幅目減りということになりそうだ。改造費用に足りなくなるかもしれない。

いや改造以前に、とにかく正確に横穴へ曲がらなければ大破もあり得るのだった。つくづく人手が足りない。ラウ・ジャウは目隠しも同然に、岸壁へ進路を向けなければならぬ。

(……いや、音が違う……?)

計算地点まで来ると、ラウ・ジャウの感覚はすぐさま違和感を捉えていた。

《海鷗X》が水をかき分けて進む音。水の抵抗。浮力の変化。微量、微妙なそれらの変化を十年選手のラウ・ジャウは精緻に捉えた。自然、身体がそのほうへ吸い込まれるように、操舵の腕が動き、《海鷗X》は水中をゆるやかに折れた。

激突、は、しなかつた。

一回、ガリツという音が右折の右腹で聞こえた。すぐに離れたようだった。

ラウ・ジャウは潜水鏡を覗いたが、蓋されたように視界が黒い。昼近くの水中の色とはまるで違っていた。狭いトンネルに入ったみたい。

微速で進んだまま、だいたいこの辺りで天井が高くなるかなという距離までくると、ラウ・ジャウは水圧計を見ながら艇を水面に近

づける。キャビンの収納から外したランタンを手に、ハッチをひらき、彼は頭を出した。

照らした闇は深くて広い。光の届かない空間の広さだ。《海鷗x》を滑らかに進ませる水面だけ、ランタンを向けると明かりが道を作るように狭くはつきりと照らし出された。

静かな洞穴の中、スクリューが水音をたてて壁に反響する。腕を限界まで延ばして、やっと壁に揺らぐ斑紋を映すことができた。両側は二段になっており、人の歩くスペースがあるようだった。ときおり風の流れを頬に感じた。換気孔設備すらも整っているのだ。

「つたく、あいつ……」

自分の声が四方八方から響いて聞こえた。

人を食った言い方をするから信じにくかった。信じさせる気がないなら、ツエーは何故あんなことを言ったのだろうか？ 気まぐれか？ ツエー・クアンが表に出す言動にはいつでもそれなりの理路が通っていたというのに？

(……いい加減な俺じゃあるまいし)

ハッチに腰掛け、円筒のふちに足かけて膝を抱えたラウ・ジャウは、水路を遊覧する艇の上で、何も見えない前方に向かって目を細めながら考える。

ツエーの理性と知性は間違はなくタウジン譲りのものなのだ。

グループの発展を軍需に見いだした先読みの力も、戦争が終わったそのあとを息子に示唆してみせた思慮も、一方では自己の安全にこれほど大掛かりで周到な用心深さを発揮しもしたタウジンという人物が持っていたものだ。

そんな人間が、ローグランドと我が国のあいだに起きる戦争の帰着を初めから予想できなかったはずがない。遊学してローグランドをよく知るタウジンは、彼我の国力の差も目で見て肌感じてわかっていた。ローグランドのやり方が敗者をどう扱うかだつて。

ラウ・ジャウは膝を抱えた腕の輪に、湧き上がった笑いを埋めた。ああ、あいつは、つまりそれが言いたかったのか。

戦争の黒幕なんてのは、存在するようでしないんだ、と。

（まわりくどいなんてもんじゃねえぞ……わかるかよ）

別に、ラウ・ジャウにどうしてもわかってほしいわけでもなかったろうが。

彼自身が持った確信の材料を、第三者に投げかけて同じ答えに行き着くものかどうか試してみたかったのかもしれない。

いや、クアン・グループが流れに乗って肥大化したのは曲げられぬ事実だから、彼は父親を弁護するにも、そういった湾曲さを必要としたということかもしれない。

当時の国民には、戦争に関わる人や物事を称えこそすれ責める雰囲気はみじんもなかったにせよ。

（わかりにくいようで、わかりやすい。ツエーが大事にしていることは、わかりやすいんだ）

疲れと眠気に侵されつつ、ラウ・ジャウは友が投げかけた謎掛けに自分なりの感想を絞り出す。

どうしてかはわからないが、腕に押し付けた瞼の内側ではオペラハウスで目にした青いビー玉が浮かんで消えた。

（あいつが大事にしているのは、スイと、両親と、……人の心だとか）

睡魔に吞まれたラウ・ジャウの思考は、もつれるように脈絡をなくした。

（憎しみに駆られた人の心は止められなかった）

ビー玉が脳裏の暗闇に跳ね、消える。

『君が運んでくれたものは』

『トリガーだ』

（押し止どめることは……）

我が国に生まれた流れを押し止どめることは、誰にもできなかったのか。

突き当たりの壁の前に立ち、ラウ・ジャウは箱状に壁を切つて埋め込まれたグリップレバーを、掴んで引き倒し、稼働位置に下ろした。それは水門をひらくレバーで、ほどなく開門装置の金属音が軋みをたてて動き出した。レバーボックスの四辺と、水路を隔てる鉄壁に塗られた蛍光塗料が、カンテラのわずかな光源に存在感を返した。

神弓湖はすり鉢状小山の底にたまった大きな水たまりのようにあり、その水たまりは囲む緑の山のおちこちに散らばる屋根の下から優雅な人達に見下ろされ、涼しい風を送り返して、別荘地の価値を作り出している。

それでも運河の水位よりも何倍かの上方に水面はある。水路の構造は、先でどうなっているのか。

音は今や天井付近で工場めいた騒音を起こしていた。ボタンバタンとガラランガラんと、見えぬ機構の歯車が稼働する。水門が動き出さぬうちにラウ・ジャウは通路に寄せた《海鷗X》へ飛び移り、ハッチを密閉した。

コンパネの水中音波通信機をONにし、ヘッドホンを装着した。もしかすると、と思ったのだが、その通り、やがて高周波の信号が水中に聴こえた。

タ・イ・キ・セ・ヨ

重々しい響きをもって鉄壁が開門を始めるや、流れ込む水によって《海鷗X》が揺さぶられた。

ゼ・ン・シ・ン・セ・ヨ

向こうの区画と水位がバランスされようとしていた。

逆らつて《海鷗X》を進め、向こうの区画へ入ると、浮力によって艇がゆっくりと上昇する。調整区画であるらしいそこは、いくらも距離なく次の突き当たりが潜水鏡に捉えられた。通ってきた門が閉まったあと、待機の指示が届く。そして入れ替わり前門が稼働を始める。そこからの水深の深い区画の鉄壁は、今度は上がるのでは

なく降りてひらかれていった。

水路は段階的な水門で仕切られていた。

全自動の水門開閉機構に導かれて、調整池含めて六区画を通り抜けた。三段階高低差を稼いだことになる。

そうして潜水艇が行き着いた場所は、しかし湖の底ではなかった。

水の色が青く変わったことがまず驚きだった。

青く、透明で、水面近くはほの明るい光に浸されていた。

ヘッドホンを外し、ラウ・ジャウは外の世界を確かめに出た。

そこは今までの頑強なコンクリート造りの地下水路とはがらりと趣を異にしている。

焼き煉瓦の壁に水仙をかたどった曇硝子の照明が並んで淡い光を投げかける。第一の水門で稼働に入れたレバーは、地下構造へ引いてある電源をすべて生き返らせたのか。

煉瓦の水路は徐々に広がり、しばらくして広い空間に出た。天井は高く、片側は石窟のように藍色の岩壁がそびえ、そのほうの岸は洞窟内に造られた舞台のように、岩盤が曲線に迫り出している。奥の岩壁は肌に薄い膜のような水の滝を滴らせ、天井から無数に、石灰のつららを生やしていた。照明が幻想的に、氷の屋根のようなつららの一角を浮き上がらせた。

もう片側は、白く塗った木製のデッキがしつらえられ、デッキの上に潇洒なベンチが水路を向く。岸に立ち並ぶ街灯の火はオレンジに輝く。先のほうに突き出した栈橋の突端で、人魚の石像が魚の尾を水に浸け、瞳の彫りのあいまいな顔でほほ笑んで、艇を迎える。

タウジン・クアンの船着き場。……か。

違う、気がした。それにしては、この幻想的な空間は、女性的だ。贅沢さだけならば不思議には思わないが。

独りでは、がらんとして寂しい場所だった。

遊び心は自分のためではなかったらうと思えた。

(用心深さが全てじゃないな)

奇想天外なことをやって、家族の反応をみて喜ぶような子供っぽ

い遊びがしたかったのだな、と感じた。規模が常識外ではあるが。

休暇に何度かクアンの家へ行ったラウ・ジャウも、多忙なタウジンの居合わせは皆無だ。でも、ツエーとスイの兄妹を見ていれば、我が父のような堅物さとは対極の人物であり家庭であることが、自然、感じ取れたものだった。むしろ豪放磊落に過ぎるほどの巨人を父にもつことが、その息子の外面を沈着な性格にしたのだろうと、我が身に鑑みて思ったものだが。

蛙の子は蛙。

占領軍を手のひらに踊らせる演出家気取りのツエーも、結果的に占領軍と組んだりして治安に尽くすラウ・ジャウも、結局その親たちの型を継いでしまっているようだ。

棧橋に《海鷗x》を着け、錨を降ろした。

シートを横倒して外し、マイナスネジで留められた鉄板の床板を開ける。腕を床裏へ差し入れてまさぐり、粘着テープで貼り付けて隠してある塊を、剥がし取った。油紙に包んだ拳銃。配達業務の護身用に、リン姐御から支給されたものだったが、まともに持ち歩いたことがない。こんなもの、持って歩いて公安部員から職質でもされたらよほど危険だ。

学生時代たき込まれて、扱いは慣れているラウ・ジャウだが、たまに思い出したときしか手入れしていない銃など、使いものになるかどうか。《海鷗x》もそうだが、メカニズムとは一にメンテ、二にメンテ、メンテなしには信頼関係は保てない。

友情もそうかしら、……ふと考えて、銃の出番のないことを是非に願いたい、と肩をすくめながら腰のベルトへ差し込んだ。

(と、あとは無線機と……)
「痛っ」

キーを抜いて急ぎ艇外へ出ようとしたとき、裸足の右足がトゲを踏んだ。

浮かした足の裏から剥がれるように落ちてカランと鳴ったのは、ダーツの矢。

拾い上げて、邪魔しない場所に置こうと壁のほうへ腕を伸ばしかけてから、ちよつと迷つて、またそれを間近に見つめる。幸運の矢。験かつぎの矢。生還の。

肩に掛けた無線機の革袋にダーツをほうり込み、靴持ってラダーをのぼる。

デッキもベンチも腐食が激しく、何箇所か踏み抜いて足を取られた。脆い船着き場を抜け、装飾的な蔦模様の鉄格子門に取りつくと鉄が震えて、低い鐘のような音が反響した。引き戸になっているそれをずらして、昇降機ホールに滑り込む。同じ蔦模様の格子扉をひらいて昇降機へ乗った。ボタンは上と下の二つ。電気が生きているし、象牙の押しボタンが透かす、ぼやけた黄色い光。

昇降機は少しならず油の足りなそうな音を鳴らしながら昇りはじめた。

コンクリートの煙突のような孔を延々と吊り上げられるだけの時間は、どうしても長く感じる。何度も腕時計を見る。何度見てもあと少しで二時という針の位置だ。上昇にかかった時間は、正確には五分きつかりだった。二時五分前に着いた降り口は、コンクリートに煉瓦の腰壁を貼った小さな部屋で、地下と同じ格子扉を踏み出せば、急で長い階段が天井に向かっていた。頭がつかえるところで、きつく閉められているのか錆びついているのかわからないハンドルを回そうとして、ちよつとやそつとでは動かない。最後はほとんど絶叫をとまなう渾身の力が要った。指の皮も剥けた。酸素を欠乏させたまま、出口である蓋を押し上げると、枯れた草葉と土埃が頭上から降り注ぎ、くしゃみと咳を誘った。這い出た外はゆるやかな斜面の草地であった。

まばらな薄い木立の向こうに、ただ広い空き地がぽっかりとあるのがわかる。刈られた芝と、均された焦げ茶の土とが、エンボス模様の絨毯みたいに、土地に絵を描いていた。

以前、クアンの別荘がその一帯に建っていた場所だった。

所有の変わった土地は、雨ざらしで早々に傷んだロープと杭に周

縁を区切られ、新たな建造に手がつけられる日を待っている。更地だけでなく、緑の厚いずっと向こうまでをクアンの敷地は含んだ。向こうは湖を見下ろす斜面のはずだった。

歩いていって、解体されていない建築土台が斜面のほうへ張り出しているのを見つける。石造りのテラスもそのまま残る、絶景の場所に入って、ラウ・ジャウは弓なりに横たわる湖の景色を見下ろした。

灰青の絵の具を溶いたような水のたまりにも、木々を渡る風がおこす波の皺はある。そしてさんざめく皺の上を、警備警戒のボートが何艘も、白く航跡を引いて滑るのが、ここからはほとんど静止した絵として見えた。

対岸山腹に視線を移すと、緑の中腹にまわりの邸宅とは大きさとデザインの違う建物がすぐに目立った。ロイヤルホテルの白い壁面は、中空の陽をまともに浴びてまばゆく光っている。

あそこまで近づかなければならないのか、それとも彼らはもっと別の場所に？

あまり近いと、警戒に引っ掛かるはずだ。

視点をさまよわせ、稜線をたどり、ラウ・ジャウは石の欄干から身を乗り出してこちら側山腹から頂上にかけてをも、観察の目で舐めた。

たとえば、母親の実家であるホン家の別荘？ いや、それも駄目だ。とつくに疑われている可能性がある。

まるで、かくれんぼだな。

やはりクアンに土地勘の有利があることで。

(ハンデはなし、か)

吹き上げる風が首筋を涼ませる。

神弓湖。その名は神仙の引く弓を湖のかたちから連想したものとされる。

一説には、この山に立った神仙の弓は月を射落とそうとして、そのとき零れた月の涙からできた島が月落島だとも言われる。もっと

も、こちらはまったく後付けのようだったが。

ラウ・ジャウは、湖が象る弓を思念の中で引いた。

ロイヤルホテルに的を定め、弓づるを引き絞る。……指をかけたその力点。振り仰ぐ。

空の近く。山の峰。

(　　そこにいるのか?)

犬が吠えた。爪音と数人の気配が突如、聞こえて、迫ってくる。

ラウ・ジャウは森の中へと走った。

木々が濃く茂ったほうへ、下生えの深いほうへ分け入って隠れた。鬼が鬼につかまってなんとする。

別荘地の舗装道を、公安部員の三人組が肩を並べて歩いていく。

何度目か木の陰から見送り、息を吐き出した。

尋常じゃない警備の数は、まさに人海戦術だった。むろん占領軍との連携は取られているだろうが、公安部員の役割は通常警備が主とすれば、連続爆破事件がなくても当該イベントはそれだけの危険をはらむ重要事であるということだ。この辺りに姿の見えない占領軍警察は、どうやらホテル周辺の警戒に集中しているようだった。彼らには、歌声　という物理的な射程範囲のことが頭にあるからだ。

背中を見せる三人組は一人がレシーバーで交信しながら角を曲がって消えた。10分もすれば後続の組がまた不審者の影をさらいに来る。異常がなければ彼らは舗装道から出てきたりはしないが、森は深いところばかりではない。ルートの取り方に用心が要った。上またその上の舗装道へと辿り着き、渡ろうとするたびに、警備の回ってくる間隔をつかむため、潜んで様子をうかがうことで時間がかった。

さらに捜査犬を連れて班が通るときは、より神経を使う。

日は傾き、風が少しずつ冷気を混じらせ、もうすぐ黄昏れる。最後の舗装道を無事渡りきり、見知らぬ誰かの屋敷の敷地を通じて、山の稜線に達した。

方向感覚には一応の自信がある。

日の向きを確かめるため、空を見上げた。ひっきりなし蛇の羽音のような回転翼機ガンシップの飛行音が飛び交う。黒いトンボに似た機体は卵を産み付けようとしてもするよつに、わらわらと神弓湖上空に集まって旋回を繰り返す。

峰を見定めて、身体を左に向け、勾配のきつい斜面をさらに越えた。と、足元の土がくずれて横倒しにラウ・ジャウは滑り落ちた。フェンスに阻まれて滑降はすぐ止まった。朽ちたテニスコートが目の前にあった。

戦前戦後の没落は、なにもクアン家だけではなく。

その屋敷も、あるじを失い、取残された遺物だった。

テニスコートを回り込んで敷地の裏手へ出たラウ・ジャウは、煉瓦敷きの足下、つもった土埃に反対側からの踏み跡があるのを目に留めた。

人の真新しい足跡が、目の前を横切っていた。

跡を辿った。

巨石を積み上げた五メートルほどの石垣が前方をふさぐ。蔓のはびこる石垣の端、洒落た螺旋階段がかけられており、その門扉の前まで靴跡が続いていた。

石垣の上の露台は白い石の重ねられたなだらかな階段を兼ねる。

稜線に沿って延びる細道はひび割れ、損なわれた箇所から青々と草を生やしていたが、それはそれで朽ちた城跡のような風流があった。

「一緒に滅びましょう」

のびやかな女の声が聴こえた。

応えはなかった。

沈黙をさやかに揺らす夕風が、丁香のやさしい香りを辺りへ運び放つ。

その香りと花の色によく馴染む、精霊じみた幻惑の声が、言葉を紡いだ。

「時間がきたら、心と身体はもう悲しまなくて済むわ。死にゆけば、会いたい人にやっと、会えるのだもの」

「そうだろうか」

「哥哥ケイグが独りで立っていた暗闇も消える。わたし、とても嬉しいの。わたしの願いを聞いてくれた哥哥を、救ってあげられる」

「……メイファン」

男の言葉へ耳を傾ける人間は、地続きのその場に二人いた。

忍び聞く会話に生身さを感じないのは、姿を捉えずに聴くからなのかと、石柱に背中をつけて明後日を向いた彼は思う。

そうではなくて、身を寄せ合う男と女もまた、ちぐはくなほうへ視線して語り合う、そのせいか。

彼は男の選ぶ言葉を待ったが、ためらいの間は長引いて、結局は、丁香の芳香が夕闇を支配してしまった。

「だれかを待っているの？」

「……いいや」

男は否の意味を強く言った。

「月に光が当たるのを待っているんだよ。約束は、破れないからね」
そう、と女はつぶやく。

「哥哥メイメイの妹妹メイメイはたった一人なのね」
再びうつろな沈黙。

ラウ・ジャウは、山風に冷えた石柱から背中を離れた。

回廊風の四阿屋を歩き、端から石畳に降りた。目線の先には、湖に向いた神仙の石像の足元、円周が階段状になった土台へ段違いに座って、頭の位置を揃え、背中を片側支え合っている、二人。

こちらを向く少女の表情がラウ・ジャウの姿を捉えてもさして動

かないのはいつかと同じ、幻想の人物であるような彼女らしさだったが。

その奥の彼の親友は湖を眺めたまま、いまだに沈黙を彷徨っている。

「ああ、そうか、今わかった。深窓生まれの人間の血は青いとか言うんだったな」

強く吹いた風に額の髪を揺らされた、ツェー・クアンの白皙を見下ろして、ラウ・ジャウは冷淡に言った。

「くだらない演出だったな、三文芝居屋」

ゆらりと正面のラウ・ジャウを見上げた眼は、失望のような、安堵のような、絶望のような、玉虫色の諦念を宿して、はっきりと意味を持たない。

「」

そのまま、答える言葉を選ばなかった。

「ツェー」

首を振って、問い質す。「お前は、どうしたいんだ」

ツェー・クアンは視線を地面におろして、そして口元に微笑を、刷いた。

復讐者の微笑みを。

「……見ればわかるだろう。君は、観劇の作法も知らないのか」

「生憎、ね」

「家庭の教育は素直に受け取っておくものだよ」

「作法だなんだの前に、見る演目は客の自由だろ。つまらん劇しか演れないならとっとと打ち切ってもらおう。裏方が丸見えの芝居なんぞ、興をそがれてしょうがないんだよ、さっさと降りろよ」

ラウ・ジャウの睥睨を、ツェーは冷たく見つめ返す。

「いちばん盛り上がる場所を観ないと言っのか？」

その眼の中に、暗く真摯な光が浮かんだ。

「舞台は血に汚した。拭い去れない汚れた。だからもう譲るつもりはないよ。救いはいらぬ、この手には」

眼前に眺めた手のひら、裏返して宙にト書きするように。

その手が七夜の混乱を描き、演出したのだと。

血に染まった身であると。

ラウ・ジャウは、失笑した。

荒れた石畳の破片を砂埃ごと蹴り上げ、ツエーの仕草に浴びせかけた。

顔背けて砂の余波を避けたツエーが返す尖った眼差しに、肩をすくめて落としてみせてからラウ・ジャウは言った。

「残念だったな。三夜目から爆破は成功してない。ただのキャンプファイヤーが燃え上がっただけだよ。情報統制を逆手にとって対策済みを隠してたのさ。MP本部の余計な一回を除けば怪我人すら一人も出てない」

表情を仕舞い込んだツエーから目を外し、ラウ・ジャウは首の角度を変えた。

「いや、残念はきみに言うべきかな。……メイファン」
もたれる白髪の人形は、命の燃える瞳でこちらを見ていた。

「一幕を書いたのはきみだな」

黒い炎のような瞳。

強く烈しい憎しみの意志がそこにある。

「そして二幕と三幕がお前だ、ツエー」

見ていられなくなつて少女の直視から逃れ、ラウ・ジャウは燃え尽きた傀儡に目を戻す。

「あの男はお前のことだな」

戦地で心を殺した男。ある目的を持つて国境を越えた男。自分が射殺した敵兵士の恋人である女から、胸を焼く絶望を聴かされた、男。

命に代えても女の復讐をやめさせたかつた男。

傍らに迫る丁香の茂みへ手を伸ばしてラウ・ジャウの正答を無視するツエーは、御して零すまいと表情のない仮面を保っていた。それでも繕いきれない心の端から、零れて眉間にしわを刻む、彼の苦

痛。

何故なら男は。

「だから……？」

ツエーが険しい横顔のまま、ふいにつぶやく。

「だから、何だ、ラウ」

眉間の険しさがラウ・ジャウへと伝染する。

「だからどうなると言う？ もうすぐ月が昇って、歌は響く。変えられない潮流なんだよ。彼女の憎しみの火が消せるものなら、とつくに消してる。だが僕にはわかる。許せないことというのはあるんだ」

推敲を繰り返して練り上げられた筋に別のエンディングはありえない。

メイファンの頑なな意志を間近に理解する彼は、あきらめを言い張った。

「迷いがあるから、俺を巻き込んだんだろ。まんまと動かされてやったんだ、拗ねるな。俺は配達屋であって、便利屋じゃないんだけどな」

言ってもツエーはかぶりを振った。

「メイファンの憎悪は、彼女を焼き尽くすまで消せない。せめて僕は彼女の命を無駄なものにしないために動いた。そして最後まで見届けるためにここにいる。ラウ、おまえに託したのは別の役割だ」

「クアンの闇の真相、か？」

少女の心をそこまで駆る過去とは何なのだ。

ここからロイヤルホテルを狙っていったいどんなことが起こせると言うのか？

ラウ・ジャウには情報という一手が足りなかった。

回廊に置いてきた無線機を振り返る。

オペラハウスの夜にツエーがフランツ・カトラとして打った芝居の一挙一動一言一句を牢の中で思い返したとき、ラウ・ジャウは自分に任されたのだから役をおぼろに理解していた。 ツエー・ク

アンの言動に理屈の筋道が通っていないかったことは一度もない。だからあの夜の拳動にもすべて意味がある。

復讐に殉じて死に、そのとき闇の力を世間へ明示してみせることがツエーの役なのだと思えば、死後、闇の真相を暴く別の手が要る。それは誰であつても構わない筈だったが、そもそもラウ・ジャウは何故あの夜、オペラハウスに呼ばれる必要があつたのか。

青いビー玉の荷を群島の祭壇に置いたのは、おそらくツエー自身であろうのに。

ラウ・ジャウに、ファンタジーが絡んだ事件のすべてを見せ、本物の荷物を預けること。

それが、計画の綻びとなる危険を承知してラウ・ジャウを巻き込んだ意味なのだろうと勘は告げた。

でも、本当にそれだけだったろうか？

「ツエー、お前さ、あのとき、初めてリッツ級に追っかけられたときのことを憶えてるか？」

急に変わったラウ・ジャウの話に、ツエーは茂みを見つめたまま怪訝そうな顔をした。

「お前、たいそう立派な自己犠牲を言つてたけど、本当は死ぬつもりなんかなかっただろ。体よく俺に無謀なやる気を出させようとしたな」

「憶えてない」

「思い出したくないんだろう、戦争のことは」

いずれにしる説得するべきは彼を縛り付ける少女のようだ。

「メイファン、こいつがきみの前でどんな格好をつけたかは知らないが、多分きみを苦しめたのはクアンである自分だとも言つたんだろうが、それはきみの憎しみをコントロールするための見栄だ。嘘だ。こいつの本性は、普通の人間と変わらない、平気で人を殺したりできない、ただのツエー・クアンだ。君に贖罪する義務も権利も、彼は持つてない」

「けれど、哥哥には哥哥の憎しみがあるわ。わたしと同じ」

「憎しみと悲しみは匙加減ひとつで行き来する。普通の人間は八年も憎悪で懲り固まれるほど強く出来ちゃいない」

メイファンは瞳をみひらき、

「いいえ、そんなことはないわ」

喉を震わせて言った。

上体を起こして彼女はツエーの肩にすがり付いた。

奪われまいとするようで、彼の存在を確かめようとするようで、突き付けられた疑いに怯えるようでもある。絞るように服地に張り付いた細く白い指が朱を帯びてゆく様が、彼女の心そのものに見えた。

瞳には鋼の刃と同じ光をたぎらせた。

「邪魔をするならあなたを殺すわ」

小さく唇をひらいたまま少女は、意識の焦点をどこか内心へ移した。華奢な喉が蠢くと、少女の横手にある泉を模した水盤の雨水が泡立ち、まもなく弾けた。

泉の周りだけ、振る雨の染みで敷石が黒ずんだ。

「次はあなたの血液を」

現実へ戻ってきた少女の眼差しが、ラウ・ジャウに挑む。

「それがきみにある力？」

「そうよ」

精霊と結ぶみたいでエネルギーを生む、その歌声が。

「フュエルは座標に過ぎない」

傍観者の口調でツエーが言う。

「山ひとつ崩すときに、的は必要ない」

「山ひとつ？」

神弓の山の全体を？

人魚の歌は大地を動かす、移動する大陸が海を攪拌した

背後の景色を横目に見渡せば、暮なずむ夕、逢魔ヶ刻、山肌のそこかしこに暖色の灯りが瞬く。ロイヤルホテルのみならず、別荘地の端々までが、この時季にぎやかに華やいでいた。蛭が甘い水に誘

われるように、同盟要人の集結は、我が国の政治家、企業家にとつてもじつとしていられない時機なのだった。

ローグランドに誘導された新体制の元で地歩を固めた政治家たち。新たな価値観の元で富を数える富裕層たち。

大地を震わすエネルギーが地滑りを誘引すれば、彼らごとく、斜面に張り付いた家々が湖に沈む。

「あーそいをたべて生きているひとたちに、精霊の怒りをつたえるのよ」

静かな殺気がラウ・ジャウを捉える。

そのとき、ザ、と無線機が鳴った。

ラウ・ジャウは後ずさった。

耳を圧迫するトンボの飛行音が頭上を過ぎた。

キーーーーーー

ノイズをたてる無線機へとラウ・ジャウは駆け寄って、取り付く。

「リン姐っ?」

「ラウさん、ウーピンです。今どこにいますか?」

「神弓の頂上だが」

「貸しな。切羽詰まった声だしちゃって、あーらー珍しい」

「リン姐御、依頼は?」

嘲笑を受け流してラウ・ジャウは訊いた。

「頂上のどこ?」

問いを無視したリン姐御の余裕にラウ・ジャウは眉をひそめる。

「どこって、ロイヤルホテル対岸の峰だ」

「ウーピン、近づいて」

え。

はたはたはたと風をなくプロペラの音が耳に近寄る。ラウ・ジャウはまさかと頭上を振り仰いだ。

峰の向こうから空気の階段を駆け登るように現れて去ったガンシップの丸い胴。

圧された木々のばたつきが周囲に湧いた。

はるか上空のその一機を、信じがたいまま目で追いかける。

『見えたわ、土管男が』

「うそだろ？」

『あんた社長様を嘘つき呼ばわりしたね！』

「げ」

やや高度を落としたガンシップのハッチが横滑りにひらいて赤いマンダリンドレスの女が半身を宙に乗り出した。

閉所は得意だがいささか高所恐怖の気があるラウ・ジャウは見ただけで血の気が引いた。

「おいおいおい、だつて占領軍の機体じゃないか」

『ちようどこの山目指して浮き上がるところだったんだから借りたつていいじゃない？ 車で来る途中、基地で顔なじみを見つけたものだから、ちよつと貸しを返してもらっただけ。あたしにかかればこんなものだよ』

どんなものだよツ？

子供のおもちゃみたいなきざまをして扱っているが、横流しで弱みを握られている基地指令でもいるのでなければ後の收拾がつかないだろう。自分も含め、どいつもこいつも情けない、とラウ・ジャウは少し呆れる。

いくら平和時だからといって。

『え、誰がエースですって？ もういちど言っでご覧』

「すいませんでした。大口たたきました。姐御さんです。社長です。《海鷗X》と俺なんかまだまだひよっこです。姐御の貫禄に比べれば。リン姐御、荷物持ってるんだよな、さわりだけでいいからかい摘まんて読み上げてくれ」

『そんなオポジションあるわけないでしょ。ウーピンなら料金一割増で引き受けさせるけどお？』

「……頼む」

一割増しどころか基本料金も教えてもらっていない、引きつる心地で思いながら音量ツマミを回す。

「無老配達会社が依頼の品をお届けに参りました」

x x

男は砂漠沿いの国道を歩いていていた。

影も焼け付きそうな日差しの下。

黒い鳥が砂塵を上げて砂漠に降り立ち、石の下の虫をついばむ。

故郷の真裏にひろがる礫砂漠は、生き物から情緒を絞り取る苛酷な土地だったが、不毛さえものすようにアスファルトの広い道が、

この国ではどこまでも渡っていた。

この国では。

この国では。

この国では。

それを一つずつ知るたびに、故郷が近づくのだろうかと思っただが、そうはならなかった。

男は密航者だった。

彼が故郷を出奔したのはこの国を知るためだ。

彼の妹を虐殺し、父の名誉と命を奪ったこの国を。

自分の目で見て、知らなければならなかった。

必ず、復讐の一矢を報いるために。

彼がいた戦場は五分と五分の世界だった。戦闘員同士の交戦は、しごく簡単なルールにのっとった。そこには恨みも欺瞞もない。殺そうとしていた相手に殺されるのも、殺されようとしていた相手を殺すのも、対等のことだ。文句のありようははずもない。

だが戦場の外側、戦争の外部には、五分と五分のやりとりをのみだすアンバランスが存在した。

それをこそ彼は憎悪した。

彼は、勝者が手にした数の余りを理由に、この国を否定し、失われたものの仇を討たなければならない。

……理屈はそうだった。

けれども憎しみは、別の顔を持っている。

絶望の蓋という顔だ。

夢の中では蓋がしゃべる。 おれがいなければ、おまえに残る

のは死、たったの死だけだ。と。

死ぬのは困る。と男は返す。 死んだらきつと妹が許して

くれないだろうから。

だったらおれに従え。

そう言つて蓋は転がっていく。

いくつも町を通り、街を知り、都市に潜んだ。

彼の父が暮らした都市にも住んだ。

父が彼をこの国へ渡らせなかつたのは、父がこの国を愛していたがゆえ。

不幸な時代に生まれた息子へ、戦争前夜の差別感情の高まりに染まつたこの国を、父は見せたくなかつたのだ。

いつときの熱の去つた戦後において、彼の同胞民族は取るに足らない扱いを受けていた。

取るに足らない負け方をしたのだから当然だ。

同胞のコミュニテイに混じつて暮らした彼は、あるとき、この国では隠している彼の名を思いがけず耳にした。西の砂漠に、その名の関わりの遺産が公とされず運び込まれていたらしいという噂話だった。警備の軍人たちが砂漠の酒場で漏らすところ、気味の悪い実験が大勢の人間を使って行なわれているという。

彼は噂を求めて大陸を横断した。

膨れ上がる数々のその名にまつわる話が男を混乱させていった。

たどり着いた砂漠の荒涼と、彼の心象とは、もはや区別のつくものではなくなっていた。

ハイウェイの道沿いを歩く男の目が、遠く前方の砂地に横たわる巨石の影から生える、白い枯れ枝を捉える。直射する日差しを受け、珊瑚のように眩しく白んでいた。彼が仲間と過ごしていた島で

は、波に打ち上げられた珊瑚が埋まった浜で、夜はつましい食料を持ち合いよく宴会をした。昼はそこで手紙を書いた。たいして昔のことではないのに思い出は遠かった。あの島で彼と過ごしたほとんどの人間が今この世にいない。

陽炎の晴れる距離まできて、枝と思っていたものが、小さな人の足だと気が付いた。

石の影に、少女が倒れていた。

砂よりも白い肌と髪の色をした少女は一見見下ろしただけでは人形にも見紛う。あるいは風が掘った化石かもしれないとすら。ひび割れた唇からにじんで固まった血の石榴色と、無惨に爪を剥がされた両手両足の指に膿んだ紫色が、目を閉じた少女の持つ色彩だった。元がほとんど筒状でしかない布がさらにぼろぼろに焼け焦げて纏いつく身体は、やせ細って骨と皮のありさまだった。それでも、口元に手を翳せばわずかにくすぐる息があり、触れる首には脈と熱が。

抱え起こして水を含ませた。

意識の戻らない顔をはたく。と、砂にまみれた睫毛がわなないた。微風の間違いかと思うほどの間をおき、ふたたび全身をふるわせた。腕の中で二つの弦月がのぼるように、少女の瞼が持ち上がる。ひらききらないまま、虚空を見つめた。小さくて汚れた手が男の首へのぼった。

衰弱の末、もうすぐ身体を手放すかそけき精神が、消滅のきわに見ていた夢。夢の続きに探し当てた誰かを少女は呼んだ。

“……一ゲ”

男は目をひらく。

それは彼の故郷の言葉の響きで、兄を意味した。

いや、もう一つ、その響きは意味を持つ。

若い恋人同士のあいだに、女が相手を甘く呼ぶ響きとしても使われるのだ。

通りすがりを掴まえたトレーラーの運転手は、三日前に大量の軍車両とすれ違ったと言う。砂漠の軍事施設で大規模な火災があったらしい、火災事故にしてはものものしい行列だったと、訝しげな顔でハイウェイの先を見つめた。

男は荷物に銃とナイフを隠していた。隣州まで男と衰弱した少女を乗せてくれたドライバーは、ひょうひょうとして陽気で親切な中年男で、珍妙な連れ立ちのヒッチハイカーに事情を問うこともしなかったが、コートにくるまれたぼろぼろの少女を見て、かねてから噂の多い砂漠施設との関係に思い至らないほうがおかしい。休憩のたびにドライバーの行く手を彼は見守った。目的地の州境に着いたら、口外無用の約束を銃口とともに突き付けるつもりでいた。だが、抱えた少女と地面へ降りて振り返ったとき、二回り年上の筋肉質な典型的ローグランド人労働者であるドライバーは、“幸運を、ごきようだい”と気持ち良く笑って言った。

ドライバーの前で少女を妹だとしたことがあったか、男には覚えがない。少女の容姿はまったく自分の妹には見えやしないから、最初から無理に取り繕う説明を彼はしなかった。……なのに。

西海人にとって、東海人はすべて同じ顔に見えるともいわれる。

“あんたの話、面白かったよ。わしは字はよめねえけど、本は運べるんだ。いつかあんたが世に出した作家の本も運ぶかもな”

道中、駄賃代わり人の夢を聞くのが好きだというドライバーに、褪せて棄てた夢だと思いつつ、翻訳出版だと答え、この国で読んだ本や、故郷の古典の筋を聞かせた。

そうやって、人の夢を集めることが、延々とハイウェイを行ったり来たり往復するだけのドライバーの趣味だった。もしかして自分に違う人生があったらと、運転中暇つぶしにする夢想のために。

砂漠にわけありふうに行き倒れていた東海人の兄妹も、想像力たぐましいドライバーにとって、《もしかしたらの人生》の一つなのだろうか。

人を信じるこざっぱりした笑顔が、男の知っている誰かに似てい

る気がした。独りでいることを愛しつつ、他人の都合に節介を焼く人間を彼は知っている。

男は席を借りた礼を言つて、クラクションを鳴らして去るトレーラーに手を振つた。銃は荷物にしまったまま。

街の外れの打ち捨てられてガラクタ置きになっているような廃工場で、男は少女の回復を待った。たまに意識はもどるが、いつも朦朧としていて、微熱が残る身体は、自力で歩くにはとても及ばない。安静に寝かせて栄養を摂らせた。

環境に落ち着き、必要な滋養が干からびた身体に行き渡ると、少女はとめどなく涙を流すようになった。泣いては眠り、目覚めては泣く繰り返しだった。赤ん坊のようなサイクルだったが、声をともなわない放心の涙だ。

“ どうして、たすけた ”

と少女はある日、涙に疲れて眠りに落ちる前、男の腕を掴んで言った。立っていただろう爪が、その指にはない。

“ まだ君は死んでいなかったから ”

戦場ですら、違いが意味をなす。兵士たちの良心はすでに魂の去った相手には向かわないのに、命を残した捕虜に対しては規定に従い救護の手を割く。あくまでルール上は。

“ もう、しんでるのに……！ ”

怒り震える黒瞳を見て、男は思わず息を止め、知る。

少女は男へ、そして、身体という現実の誤りへ、怒りを向けていた。心にはもう生きるすべがないのに、なぜ身体はのうのうと生きている？

同じ怒りに崩れた日が、自分にはある。

“ …… そうだね ”

腕を捕らえる手に手を重ねた。

“ 大丈夫、ここは死にきれない死者の国だよ ”

二人だけの暗闇の国だ。

男の声音にか、言葉にか、少女は驚いて指の力を抜いた。

“おまえは、だれ？”

高ぶりが障って荒い息をしはじめた少女の肩を押さえて寝かせながら、

“妹妹メイメイをなくした、哥哥ケケだよ”

と答えた。

“逃げだそうということになった。みんなで、もう、耐えきれなくなつたから、ぎせいがたとしても、やってみなくちゃ、あの人が言つた”

男の故郷の内陸内海に浮かぶ群島で少女は生まれた。十五のとき、島の外から科学者たちが、徴用の指令書を持って彼女の村へやってきた。研究に協力してほしいというのだった。戦時下のことだ、少数部族といえど、国民には違いなく、国策に否やは言えない。連れていかれた研究所での生活は、島よりは毎日が窮屈で何をされるのが不安としても、今思えばまだ人として扱われていた。飲まされた薬が不幸にも少女の成長を止めてしまったとき、担当の科学者は断腸の顔をしながら、この大地が西海人たちに蹂躪されないために必要なことだと思つてくれ、と言つた。君たちの秘めた力が我が国にとって回天の希望だ、と。

父と母と、研究所で急速に心を寄せ合つた恋人と、一緒にいられるなら、幸せに思うべきだった。戦争の世の中では、家族が揃つて暮らせることのほうが稀だ。恋人は徴兵されずに、ただ毎日の検査と実験に協力的でさえあればよい。

村人の内にある力は、兵器として運用するには安定が足りなかつた。研究を重ねても一向改善にたどり着かぬまま、ついに敗戦を迎えてしまった。研究所はすみやかに解散となつたが、戦後の失職を恐れた一人の研究員が密かに、ローグランドへ研究の事実をリークして売り渡したことで、島に戻つていた村人たちは再び、島の外から来た者たちに取り囲まれることとなつた。

今度は輸送機に乗せられて、砂漠の真ん中の施設へと運ばれて、右も左も説明されずに押し込まれた。肌の色が違い、言葉も通じない科学者たちは、異国の村人を実験用動物のように扱った。西海人は動物に対しても生き物の権利を尊重して扱う。清潔な個室を与えられ、検査と実験のために合理的な衣服を与えられ、毎日決められた時間に健康維持の散歩をさせられ。……だが、進んだ設備を持つ無機質な実験棟は、物資も窮乏していた敗戦国の質素な研究所よりもよほど心細い場所だった。家族、恋人とも決められた時間しか会えない。

合理的な科学者たちは、既存のデータを元にして早速、不安定の克服に取り掛かった。最も効果があるとして採用したのは、恐怖を用いる方法だった。

村人たちはありとあらゆる精神的、身体的な恐怖を体験させられ、そして次々と効果を証明した。安定性すなわち呼び出し可能とは、逆さまに言えば、思い出すだけで恐慌に陥らせるほどの恐怖を植え付けられた状態のことだ。

心の強い人間ほど、強い潜在能力を秘め、そして恐怖にも強かった。心の強い人間ほど、繰り返しの拷問を受けた。少女も、恋人も、心が弱く、薬を使った実験で死亡した者もいる。少女の母がそうだった。

“あの人は、わたしの目をみて、もうわたしが限界だとおもったんだろう”

監視の眼の中で少しずつ計画を立て、逃亡は実行された。

だがやはり、無謀なことだった。非道な研究は絶対に外部に知られてはならないものだったし、内部から漏れてもならないものだった。研究員さえ、実験棟に閉じ込められているも同然だった。だから狂気じみた実験を続けた科学者たちも、半ば恐怖に狂ってしまったのかもしれない。

警備の兵隊に撃ち殺された仲間の死体を踏み越えて脱出路を探した。あちこちで能力を使った仲間が火の手を起こしたが、まとまら

ず消火機構に消されてしまった。少女の父が目の前で掃射されて死んだ。恋人も銃弾を受けて足を引きずりながら、少女を父のそばから剥がして先へ連れていった。

“あの人が能力で兵隊をころして、わたしと外にでた。でもそこでもう、血が身体からすぎていて　わたしのひざのうえで、あの人は……”

そのとき恐怖が彼女の心を壊した。

そして誰よりも強い、力が目覚めた。

研究棟は地鳴りとともに倒壊し、併設のガスタンクに誘爆して燃えた。

“わたしだけ、風でふきとばされて、気がなくなって、気がついて、あの人の身体をさがしたのに、どこにもなかった。ずっと、砂漠をさがしてあるいたんだ、なのに”

探し当てられず、のちの世界へ会いに行くこともならず、彼女は生き残ってしまった。

廃工場の床を炎が一線に流れていた。倒れた木椅子から落ちて散乱する残骸は、風防の割れたガスランプと砕けた消毒アルコールの瓶の破片、焦げて消失してゆく包帯、アスピリン錠も……。

語ることで時間を巻き戻した彼女の、心の震えが起こした力だった。

手で触れもせず。

声帯に宿る力のみで。

少女は、　いや、少女ではない、実際の年頃はすでに女だ。メイファンという名の女は、ローグランドの研究棟における生活で、精神的負荷から髪の色素を失った。

“あの人が初めて口づけてくれた黒髪も、もうない。なら、生きていくいみもない”

一カ月が経つても、彼女は男が無理やり口をこじ開けるのであればものを食べようとしない。

ナイフも銃も、遠くへ埋めて隠してこなければならなかった。

自らの歌が自らを死に至らしめないことにメイファンは憤った。

“はやく、あの人のところへいきたい”

男はしばらく沈黙し、彼女を死なせない手立てを考えていた。

“おまえだつて、そうだろう”

絶望の、蓋。

“メイファン、……君からすべてを奪った者たちが憎いか”

“もちろん”

“殺したいか”

“彼らはしんだ。でも、なんどでも”

苦悶とイコールで結ばれる憎悪が、女の声にこもっている。

“何度でも、殺してやりたい、か”

“なんども、なんども、わたしたちはころされるみたいにくるされた”

“僕は、研究の発端である者を……群島の村人が持つ力を利用してよ
うと、最初に思いついた者の名前を、知っている”

“どうして、おまえが知っている”

“その一族がいなければ、その資金がなければ、研究は始められな
かった。君の成長が止まることもなかった。君たちがローグランド
へ連れて来られることもなかった”

女の瞳が、漆黒に染まった。

“……”

“許せないだろう。許してはいけない”

“……そのにんげんは、生きているの”

“いや、死んだ。でも、その名を殺すことはできる。継ぐ者がいる
からだ。君たちを苦しめたと同じ資金で、何不自由なく育ち、愛さ
れ、さまざまなものを得、闇からは遠ざけられて長いあいだ呑気で
いた、健康な息子が、一人いる。それが僕だ”

男は瞠目したメイファンの混乱に付け込み、畳み掛けた。

“ツェー・クアン。僕の名前だ。クアンの名を聞いたことがあるだろう。君の仇だ”

ひあ、と声を喉にひきつらせてメイファンは身をよじった。

彼女を親身に助け、生かす目の前の人物が、ただの見知らぬ男であることを思い出したように。

“君からすべてを奪った、クアンだ”

“い……や”

湧き起こる憎悪に、奪われ続けた日々の記憶を呼び戻され、女は恐怖で顔を歪める。

頭を抱えようとすするメイファンの腕を、男は掴んで乱暴に引いた。

“やすらかな死すらも君の上から蹴散らしてしまった。君を絶望の暗闇に引きずり戻して、留どめた。……僕が”

“や！”

そのかたちで口をひらいたまま、メイファンは抑えられぬ憎悪と恐怖を目の前の男へ向けた。

人魚の歌をつむごうとする唇を、しかし男は片手で塞いだ。

もがく少女の身体をたやすく抱えて男は語る。

“そうだ。君は僕を殺すべきだ。でも、ただ殺したところでなんにもならないよ。話しただろう、僕も君と同じように死を望んでいる。君は僕を救ってしまうことになるよ。ただの死じゃあ、駄目なんだ。僕をクアンの名とともに、破滅させて殺せばいい。世界にローグランドとクアンが手を染めた悪魔の所業を知らしめて、完璧な復讐を果たせばいい。そうして初めて、仲間たちの無惨な死が、救われる”

暴れていた女が、動きを止める。半ば脱力した身体が彼の胸にもたれてのしかかる。そうしても羽根のように軽い、この地上に抛り所のない女の身体。

死の扉ばかりを見つめていた虚ろな瞳は、憎しみを思うときだけ命の輝きを燃やした。

そしてたった今、男の言葉で炎はより確かな熱になった。

女その瞳を覗いて見つめ、口元覆った手を離す。

女の唇が、彼の落とした言葉をなぞる。

“ふくしゅう”

そつと女の白髪を撫でた。

“ 生きる ”

君は生きる、哥哥を悲しませたくないなら。

ためには、前を向くためには、今は、つかめる藁はなんだっていい。

“ はめつ ”

クアンという名を喰ってつなげられる命なら、喜んでその破滅を捧げよう。

国ひとつはおろか、男の妹の命ひとつ、助けることができなかつたその名なのだから。

当然の罰だった。

メイファンを連れて、男は彼の父の、この国での旧友をたずね、その懐にもぐりこんだ。

その老人が知るかつての父は、男のよく知る父だった。若き青年時代の父は、豪気で屈託のない青春をこの国で送っていた。まだ政治を知らない時代の父と、家庭の団欒を過ごす父とが、男の記憶の中で重なる。

頭蓋に鉛弾を撃ったときの父の中身は、この国で遊び尽くしていた頃とは様相をどれだけ変えていたのだろうか。

少なくとも写真の中の青年は、脳漿を吹き飛ばして葬り去らねばならないほどの闇など、まだ知らなかつた筈だ。

男は屋敷でメイファンにこの国の言葉を教え、ゆたかに知識を吸収する彼女へ、彼が導ける限りの学問を習わせた。療養するあいだのなぐさみのつもりだったのに、次から次へ、彼女は図書室の本を読み進んでしまった。いつしか逆に、彼ですら知らない物語を聞か

せるほどになった。魅力的な言葉の連なりに、何という作家の本かと訊けば、それはメイファン自身の創作なのだった。

一見して穏やかな日々。しかし、たやすく均衡の失われるメイファンの心。彼女は屋敷の客に軍人や、支配階級の人間の姿を見るだけで、憎悪を抑え切れない。軍服は彼女の父と恋人を殺した兵隊たちを思い出させ、まつりごとに馴染んだ策略家たちの余裕は、彼女たちの未来をひねりつぶした国家というもの、そのものだった。

つまり復讐で終わらせてしまっただけではない。言い含めても、心からの悲鳴は制御が利かないから悲鳴なのであって、抑止の効果はない。彼女の悲鳴は人を殺めることができる。

ダジリタ

ローグランドの研究所で、彼女はそう呼ばれた。それはまた、極秘の研究を総称する秘密コードでもある。ドラマチックな感情を声のにせられる天性の歌い手。尊重されるオペラ歌手の声質になぞらえて付けられた呼称の通り、メイファンは昂ぶる感情を歌った。

ときに鎮静剤を使わねばならないことさえあった。人前にメイファンを出せなかった。無為に流れる時間だけでは、いくらかけてもメイファンの憎悪をやわらげることが無理なのだと、月日の経つうち男にもわかった。

身体が回復しても、一向、メイファンの悲しみと怨念は癒えない。それどころか焦れるばかりだ。

“哥哥、哥哥は嘘を吐いたのかしら”

素朴な直情はなりをひそめて、でも芯にある苛烈さが瞳の奥から男を射る、彼女のたわむれな皮肉。

“準備が要るよ”

“どのくらい?”

“あと少し”

知識と教養を身につけた彼女は、むしろ以前よりも復讐の論理を我がものとして強め、焦れていた。

人を歯車にして使い捨てる世界の仕組みを知ったからだ。

あゆみを止めれば炎は彼女自身を身の内から焼く。

計画を進めなければならぬ。

“ 転がりだせば、失敗はできないよ ”

そう言つて、男はメイファンの前へ、一人の専門家を連れてきた。

“ このガラス玉に、人魚の末裔である君の声を封じるよ ”

深い催眠状態に落ちたメイファンへ聞かせる、未来の約束。

“ 声を君に返すときが、復讐の幕開きだ ”

そうして表舞台に出るため、メイファンは声をなくした。

お伽話でも人魚は、陸に上がるため、引き換えに声を失う。

メイファンが絶望によつて泡と消えてしまわぬためには、いつか必ず、ガラス玉に封じられた力を戻さなければならぬだろう。

そう長くは待てないだろう。

あの人を殺されたわたしと、妹を殺されたあなた。そう、あなたを生かしているのは、妹妹との指切りと、復讐の心なのね。わたしとおなじ。そしてあなたはわたしに妹を重ねたから、この命を砂漠で拾わずにはいらなかったのね。なのであればわたしは、あなたを兄と呼びましょう。仇であるあなたを、あなたが愛した妹と同じ響きで呼んで、苦しめてやりましょうか。望みの果たされる、その日まで。一日でも早い、その日まで。

復讐は男のものでもあるが、時が来ることを今の男はおそれた。

その先にぼつかりとひらいている、女を飲み込む死のあぎとをおそれた。

彼の愛する人がまた、運命に噛み砕かれて死ぬ。繰り返しをおそれた。

男は結局、この今もまた無力だ。

誰ひとりとして、守れない。

何一つとして。

血を流すのに刃はいらない。

人魚が元の姿へかえるためには、彼女を裏切った男の血が必要だ。

x x x

山の峰へと忍び寄る帳が、空気を冷たく、重たく塗り替えていった。いつそう丁香の香りが濃く増し、辺りを幻想の舞台に整えようとしている。

ラウ・ジャウは闇の中で胸に痛む呵責を抱えた。

理不尽な過去が、世に存在する。

自然の島に育った一人のごく普通な少女を、怨みの亡霊に変えた、むごい出来事が。

許せないことというのは、ある。

その通りだ。

反論できないし、したくなかった。

許せないことというのはある。

けれど。

舞台上で、人は一人一人役割が違った。

同じ思いを持ったとしても、一人一人の心は別々のものだった。

メイファンの怨みが晴らされて彼女の心が救えるのならどんなにいいかと思う。

だが、ラウ・ジャウは、二人の破滅を許すことができない。

それが彼の役割だ。

メイファンの願いを否定しなければならぬことに、重い呵責を抱えながら。

「こいつはきみを最初から裏切っていたんだ、メイファン。きみを

死なせたくなかない一心で、復讐なんぞを持ちかけた」

足元の無線機を前にして、ラウ・ジャウは親友を代弁した。

「俺が運んだ青いビー玉に込められていたのは、きみと過ごす幕間の終わり、機会の到来を苦しむ彼が、心から流す血だ」

丁香の赤い花に手を伸ばして、一輪を摘み取ったツエーの横顔には、放心とあきらめの白さしかない。

メイファンに彼の苦悩が知れたところで、どうして仇の苦しみが彼女にとって意味をなすだろう、ツエーはそう思っている。

「ツエーは、きみを失いたくないんだ」

「けれどそれは錯覚なのよ。哥哥はわたしに妹妹を見ているだけ。まぼろしだわ」

「そついう劇だったからな。俺も初めはそう思って、騙されかけたが」

「わたしたちは、欠けたものを補い合つて共犯しただけなのよ」

「きみはそう思っても、俺には違うように見えだしてる。きみはツエーの揺らぎを不安に思ったからコンスの俺のところへあの日、牽制に来たんだろ？ でも、彼の持ってた復讐心を、妹の死に対する復讐心を、揺らがせているのは、他の誰でもない、きみなんだ、メイファン」

「いいえ、だつて、この身体は……」

メイファンは目許を歪めて地面へ顔を背けた。

その身体は永遠に、……少女のまま。

十五歳は彼の妹が人生の時を止めたのと同じ年頃だ。

だからだと、言うのだろうか？

だから自分は妹妹の代わりの幻想でしかないと？

だが、少女、など、幽霊、と同じ、ただ遠くからおそるおそる眺めて言う、表面的な型にすぎない。

リン姐御のように、ひと目見ただけでメイファンの中の女に気が付く人間もいる。

ふと、神仙像の額こしに宵の明星の輝きを見つけて、ラウ・ジャ

ウは目を留どめる。

遠くて近い、あかるい笑顔の記憶。

「スイは彼の大事な妹だよ。すごく仲のいい兄妹でさ、……誰であろうと、スイの代わりにはなれないよ。二人といたい、彼の大切な妹で、家族だった。でもきみはちがう。家族じゃない」

これ以上は、ラウ・ジャウが言うべきことではない。

「……そうだろ、ツエー？」

立ち尽くすメイファンを仰いで、ツエーは彼女の動揺を見守っていた。

彼はそして俯いた。

「君を、愛してはいけなかったんだ、僕は」

愛したその瞬間から、メイファンの望みを共に望めなくなるからだ。

彼女の望みは死、それだけ。

「ごめん、何よりも、すまない」

何より罪深い罪であるように、そう言った。

ぱっとしない、閉じた告白だな、とラウ・ジャウは思った。

あいつは人の心を大事に扱い過ぎて、なりふりかまわずぶつかって壊すことを選べない。

そういうところが見栄っ張りに見える。それでいて、自分の望みどおり人を動かそうとする計算には長けてる。典型的なボンボンだ。「リン姐御、修正稿とクアンの研究詳細は、その場で燃やして捨ててくれ。以上で依頼終了だ」

呆然とした表情でゆっくりと首を振り始めるメイファンを、慎重に見据えながら、遠方をカモフラージュのため旋回しているガンシップヘラウ・ジャウは無線した。

ツエーがはつと顔を上げた。

「……ラウ」

ガンシップから夜空へほの白い塊が蹴りだされる。

落下傘の傘がひらき、湖上空にたゆたった。

くるりと機動したガンシップの腹から、ミサイル弾が落下するようになり、噴射の炎の残像を引く。命中して、派手な火花を湖面に映した。

用意がいいのは、ラウ・ジャウの行動を見抜かれていたのかなんなのか。『上空に不審物を確認、爆破処理した』占領軍上空警備を偽装するウーピンのスカしたローグランド語が無線越し聞こえた。

いささか大仰な花火だったが、終幕の演出としてはこんなものか。悪趣味はお互いさまということだ。

「いまさら、滅びた財閥の閥なんか、暴いたってしょうがない。同じく隠したいローグランドとのあいだで、下手な争いの種になるだろが。それで苦労するのはうちの親父たちだから、まあ、悪くもないが。でも島にはまだ住民も大勢残ってるんだ。あとのことを考える。彼らはたかだか復讐心で弄んでいいフィクションじゃないんだ」

答えるラウ・ジャウはツエーを見なかった。

正面向いて首振り続けるメイファンを注視して、懸念を眉間に刻む。

「違うわ……いや……い、や、……」

つぶやき。必死にメイファンは否定を重ねた。

否定しなければならぬ感情が彼女にある。

彼と過ごした七年のあいだに生まれた情が、ある。

もしかしたら情以上のものなかもしれない。

それを頑なに追い出そうとしてメイファンはかぶりを振り続けた。

「そんな……違う、忘れていないわ、忘れていないわ……わたし、

哥……嫌っ、シェンイー……！」

揺さぶられて流れ落ちる白髪の毛先、胸元の服地を片手で耷るように握り締めた。

「パーパ、マーママ……！ 忘れてたくない、忘れてたくない、忘れてたくない、忘れてたくない……忘れてない……」

零れない涙の光る瞳で昂然と頭を上げた。

「そうだわ」

胸に確かめた思いに安堵したように、はつきりと囁いた。

「歌わなきゃ、時間だわ」

あとずさって、段を一段、二段、靴の踵で確かめながらのぼった。

「駄目だメイファン。……ツエー」

彼女を引き留める。

だが、ツエーは傍らのメイファンを見上げ、無言の懇願を捧げるだけで。

メイファンはツエーの肩に手を置き、淡々と滅びへ誘った。

その小さな白い手指の上に、ツエーが手を重ねる。

「ありがとう、哥哥」

銃を抜いて構えたラウ・ジャウへ、メイファンが底無し沼のような黒瞳を向けた。

「そうね、わたしを殺すしかないわ、止めるには。この力は、明日だって、明後日だって、響かせられるのだもの。明日でも明後日でもわたしは復讐するわ」

それは怒りでも怨みでもなく、哀しみだった。

そうせずにはられない、メイファンという女。

死を与えない限り、悲鳴はやまない。

人知の範囲の外に響く人魚の歌が、山中に胎動を促しはじめる。

地面の下にぞわりと蠢いたこの音は水だ。ラウ・ジャウにはそれがわかった。五感の全体で感じ取れるしなやかで圧倒的な質量の気配

水に棲むことを半生としてきた彼にとって、馴染み深く、懐かしく、恐れ多く、生存本能をたかぶらせる、幾年付き合っただけで飽き足りない共棲相手。浸潤し、圧迫し、破壊し、息を奪う、水。その水がいま、土の中で歌っていた。ラウ・ジャウは確かに感じた。彼だからこそいち早く感じる事ができた。だが同時に、およそ状況と掛け離れた感情が彼を襲った。嫉妬にも近い疑念だった。彼にとつて戦いと競争と利用の相手である水の破壊力が、一人の少女の意のままに踊っているのだ。ラウ・ジャウにはけして触れられぬ一面を

見せている。人は自然の元素を兵器のごとくして操ることなど出来ない。しかしメイファンという女はそのままに大地に染み渡る水と共鳴していた。理屈を越えた現象がおきているのだ。

それは亡霊の呼び起こすファンタジーだった。

人魚の末裔は湧く水を通して山の精との感応を果たしたのだろう。幻想に眩む額を振り、現実として迫るカタストロフを最大限に肌で感覚しながら、叩き起こす戦闘。振動を生じながらひたひたと押し寄せる瞬間との間合いに、焦る思考が退路を探してのぼりつめていく。

大地の鳴動が聴こえた。

ラウ・ジャウは照準を女に重ね、身についた動作の通りグリップを握り直す。

せめて友だけでも生きて連れて帰る

夜空の遙かに、宵の明星が、瞬いた。

(……違う、駄目だ)

ラウ・ジャウは心中で頭を垂れた。

メイファンを殺せば、ツエーの心が死ぬだろう。

ローグランドの砂漠で、わずかばかりの泉を見つけて、仮初めにも息を吹き返した彼の心が、今度こそ完全に死ぬ。

視線を振る。歌声に喉を預けたメイファンをじっと見つめるツエーの表情は、夜の海上で敵兵の命を数えていたときのやるせなさと同じものをのせていた。今の彼はそこに、メイファンと自分の命を数えようとしている。

殺して生き残るのは駄目だ。

戦争は終わった。

「ツエー・クアン、許せよ」

ラウ・ジャウは、渾身込めて腕を振り切る。

夜闇を赤い羽根の矢影が真っすぐに飛び、女のほの白い喉元に突き刺さる。

ふつ、と皮膚の破れる音をたて、歌声がやんだ。

女が崩折れる。

メイファン、と、悲痛な叫びが闇を割った。

そして覆いかぶさる轟音とともに、足元の地表を闇がなだれた。

埋まったのか、と思った。下から迫る水で死ぬことはあるかと思っていた人生が、いざ終わろうとしてみると上から土砂に降り込められた圧死という結末を迎えているとは、つくづく天邪鬼な自分だと。だが案外簡単に腕が土くれを突き抜け、掴んだ空。ラウ・ジャウは横倒しに身体を埋めて止まっていた。首に力を入れると頭が動き、窒息しかけていた鼻や口のまわりに空間ができた。彼にかぶさる土は軽い。雪崩の表層を滑って来ただけか。泳げるほどの浅瀬だ。蓋ともいえない土のコーティングを撥ね除けて起きた。

(二人は)

完全に日の落ちた暗闇で、四方を見回した。足に引っ掛かる革袋が重りとなり、つんのめる。無線機に引きずられてここまで流されてきたようだ。

「物持ちいいよな、俺……」

体重を移すたび小石交じりの土砂がさらさらとした音たて転がる足場の不安定なここから、どこを見上げても、東屋や神仙像はおろか茂る林の影も形もなかった。どす黒い土の斜面がラウ・ジャウを見下ろしていた。

ふいに聴覚がそれを捉える。鳴動を途絶えさせた山の静寂の中から、破れた命が零すいまわの呼吸音が聞こえた。

黄色い光の明滅。倒れて柱の半ばまで土に埋もれながら街灯が生きている。その向こうに見覚えのある空き家の屋根のコンクリートが白く見えていた。

土砂に押されて傾いた屋根を足場に、亀裂を抱いて裂けたテニスコートへ飛び降りた。

「何やってる、ツェー、気道確保だ」

露出した水道管からどくどくと流れ出てコートを洗い、二又の川をなす水の中洲で、泥に塗れた人影がもう一つの人影を緩慢に横たえたところだ。

駆け寄ったラウ・ジャウはただ呆然とするだけの友を叱咤し、息をふさがれてのけ反る少女の喉からダーツの矢を引き抜いた。血が溢れだし、不吉な音が呼吸と合わせて鳴る

「押さえてる」

潰れた声帯組織と骨が気道を塞いで、窒息しかけている。血が詰まれば時間の問題だった。

ラウ・ジャウは矢を逆手に握り直し、刺さった傷より下、鎖骨のくぼみの三センチ上あたりに先端を当て、突き刺した。

勢いよく朱が吹き出した。溜まっていた血が除かれる。

穿たれた孔からメイファンの身体は息を取り戻した。

笛の空鳴るような息苦しい音が闇の峰に連続した。

「《海鷗x》に処置箱がある。急ぐぞ」

掻き抱いて女の背をさする、彼女しか見えていないツェーを正気づかせるよう言った。

ツェーがとつさに疑問の眼を返した。

「帰るぞ」

「どっこい」

「帰るんだよ、生きて」

眼を見ひらいた友を残して、さっさとラウ・ジャウは無線機を拾い、平穩無事な神弓湖畔の景色を確かめると、来た道を駆け出した。

舟付き場にたどり着いてようやく、警戒配備を気にせず声を高くして話せるようになる。

「海北島へ行け、送ってく」

前席ハッチのハンドルを回しながら、ラウ・ジャウは棧橋でメイファンを抱いて立つツェーにそう言った。「あそこは無法地帯だからな」

意識の半分をメイファンの呼吸に割きながら、ツェーは複雑な表情でこちらを見上げていた。

「闇医者を知ってるから、無線で救急の準備してもらっとく。あとは長閑な田舎でも見つけろ」

「気後れする」

ぼうつとした声音で呟いた。「現役なんだな、二十三番艇……」

「なんとかね」

ポンコツなりに、昨日今日はどうやら調子がよかった。やる時はやるロートルだ。

無機質なメカニズムはしかし、八年振りの元クルーが感じる引け目なぞ意に介さない。

「外海に出て燃料が持つのか」

「心配には及ばない、中尉」

ふざけて言っつて、ラウ・ジャウは口の端をゆるめた。

「こんなこともあるうかと、財布がすっからかんになるほど買い置きしといた」

前席から油缶を持って艇体にのぼり、入れ替わりメイファンを上で受け取る。

艇外ラダーを上がったツェーに、彼女を渡す。

「シートも取っ払っちまっつて無いが、辛抱しろよ」

次いで、後席から処置箱を放り込んだ。

挿管パイプを切開孔に挿してツェーがメイファンの呼吸を安定させるあいだ、ラウ・ジャウは燃料を艇に補給した。

「上手くいったか？」

戻って覗くと、穏やかな息になったメイファンが彼の膝に寝ている。灯りから背けて壁に向く表情は見えなかった。ツェーからも顔を背けていた。彼女の流れる白髪のほんの毛先をツェーの指が握っ

ていた。ためらいだ。それが裏切り者の精一杯であるというような。

「ああ。……ラウ」

首を反らしてツェーが真上のハッチを見上げる。

感情を零しそうな目許をして言いかける彼の、機先を制する。

「待った。礼も謝りもやめろよ」

「」

「俺は彼女を否定してその肉に傷つけたんだから」

ラウ・ジャウはハッチを閉じた。

配達屋は操舵席に着きながら肩を縮めて大きく息を吐く。

やれやれ。

とにかくも懸案の大荷物は回収完了。エンジン・電源系統に異状なし。排水機構テストよし。各種計器異状なし。燃料計はフル。

「昼から何も食ってないのは俺だよ」

床に散らかした朝食べかけの非常携帯食は、水もなくては半食分も進められていなかった。湿気たクラッカーのひとかけを齧って、操舵桿を手にする。

《海鷗X》は運河経由外海への航行を開始する。

エピソード

エピソード

カモメが群れ成して空を泳いでいった。

目指す方向にさらなる群れの鳥山が、海に沸き立つ入道雲のようだった。

雑多な匂いの混じる潮風を吸い、ラウ・ジャウはとぎれとぎれ故郷の歌の口笛吹きながら水平線を眺めた。

人の行き交う岸壁は、もやい作業をする男たちの世間話や漁船の洗浄作業などがやかましく耳を打つ。平たい貨物船、廃品を載せた小型船、タンカー、周辺島国の国籍もさまざまなそれらが、小さな港にひしめいて揺れていた。

そろそろ家路にとって返すとしようか。ミス・フウフウが心配だ。ローグランド製の香料炭酸を喉に流し込み、瓶を手にはぐら提げて港を歩いていくと、町に続く道の先から上着を腕にかけて歩いてくるツエーが見えた。

「手術中は追い出されて……」

朝市の露店で買った包子の包みを、借りた財布と一緒に放って投げ、

「安心してけ、場数踏んで腕はいいから」

ラウ・ジャウは保証する。

友は素直に頷いた。

二人は岸壁を見下ろす護岸道のへりに寄って歩き、錨を降ろして浮かぶ《海鷗X》を眺めた。

「あとはお前がなんとかしろ、ツエー」

彼女の心も。

半身を失った同じ哀しみを持つ彼なら、きっとできることだ。

望みという行き先をなくすれば、もつと身近に目を向けられる。いや、目を向けなくてはならない。それで気が付くこともあるだろう。

「うん」

覚悟の息を吸うように瞑目したのち、もう一度頷いた。

ツェーはそして、横に並ぶラウ・ジャウの、足元の地面を見つめた。

「……礼も謝りも言えないなら、何を言えればいいんだろう」
「別に」

顔を見合わせ、ラウ・ジャウは肩すくめ、ぬるくなった炭酸の残りをあおった。

凧いだ海の深い藍色に、鎮められる頭が、いろいろなしがらみを思い出す。記憶から取り出してきては、ラウ・ジャウに罪の軽重を吟味させた。

「メイファンのことがなくても、片一方には不義理を残してきたかな、いいことしたって感じじゃないんだ」

それに、とラウ・ジャウは続けた。

「お前の物語を完成させたのは、俺じゃないよ。お前でもない。……俺に二、三幕の男の話を教えてくれたのは、偶然だがヤン大尉の甥だった」

「ヤン大尉の……?」

ラウ・ジャウは話して聞かせた。

ローグランドから来て葛藤を溶かした青年の話。彼の叔父がしたためていた決意の話。牢にいたワンという男の戦前戦後の話。《海鷗X》のまとう 隠れ蓑 が、今また、まるで往時の性能をそのまま発揮して《海鷗X》と乗組員を守ったこと。

一つでも欠ければラウ・ジャウは真実に追いつくことができなかつた。

それらは全部、偶然だった。

偶然も重なれば物語が生まれる。

「そう思うだろ。だから、俺達は過去に助けてもらった、ってことにしようぜ」

「あの日、僕らのみが生き残ったのも偶然だった」

「ああ、そうだな。でも……」

ラウ・ジャウは水平線に目を細めた。

「それなりに、彼らの視線をプレッシャーにして生きていくことも大事だな。俺が偉そうなことは言えないが、まあ、とりあえず行動より、反省の問題として、ね」

ツエーが目を伏せる。

「許されないことをした」

「せいぜい後悔を」

今更クアンが公に出て罪を償おうとしたところで、厄介を呼ぶだけだった。人魚の歌の研究はローグランドの隠蔽努力が功を奏して彼の国の中でさえ詳細を知るものは極少ないという。寝た子を起すような騒ぎは誰も望まない。人魚の血をひく末裔たちは特にだ。

その名の闇を暴こうとしたツエーが彼の父を本当は今どう思っているのかは訊かない。

確かにそれは、時代が変わった現在から見れば暗い闇だが、現在から見れば戦争の時代そのものが逆光の影の中だともいえる。あの時代の我が国は、着地点を見出せないまま、転がり落ちる坂道をなんとか上手く転がり続けることにしか活路がなかった。少なくとも、そう信じる人間が多かった。タウジン・クアンはそういう人間が多にいる母国に尽くした。国に尽くして闇を抱える覚悟は、かつてのラウ・ジャウが軍人として見据えていたものでもある。自分はそれをまっとうできたかと言えば、中途半端に終わったのではなかったか……。

一人の女に尽くして許されざる破壊計画を持ったツエーに、父の気持ちかわからないはずもない。

まして、彼は昔から、間近に見る父をよく理解してやっていたのだから。

沈黙のあと、ツエーは顔を上げて、今出せる答えをはっきりと言った。

「おまえに、約束するよ、ラウ。死ぬまで後悔して生きていくと。後悔に齧り付いても生きていく。それから、これだけは言わせてくれ、僕からじゃなく、代わりにだ。スイとの約束を守ってくれて、ありがとう」

「いいかげん妹ばなれしろっての」

苦笑で答えてラウ・ジャウは、さて、と身体を返す。

ツエーの後ろを通り、岸壁へ降りる階段のほうへ歩いた。「じゃあな」

「ラウ、おまえは？」

これからどうする。直近の面倒と、未来と、二つの意味を同時にツエーが訊いた。

「俺？ ああ……。一応出頭するつもりだが、なんとかなるだろ。せつかく飼い馴らしたジャウツアイの飼い馴らしにくい息子のほうは、あちらとしちゃ、泳がせて無害化してるつもりらしいからな。何の害だか知らん。知らんが、泳ぐだけはまあ得意だからのっかってやるさ。……俺一人じゃ出版社は無理だし。金もすつたし」

ツエーは寂しげに笑っていた。

だが穏やかで自然なその顔は、作り上げた役割の表情ではないから胸にすがすがしく映った。

「達者でな」

「幸運を」

二人は別れた。熱血や湿っぽさにそっぽを向くラウ・ジャウの性格を知っているツエーは《海鷗X》を見送らず町に至る道へと歩いて消えた。

乱脈な島にこれから隠れて紛れる彼らと二度会うことはないだろう。

《海鷗X》の元へ戻って艇体にのぼり、ハッチをひらいたラウ・ジャウは鉄の熱さにふと空を仰いだ。

青くて青い、空気に満ちた天井が、海よりも果てしなく広がっている。

いつか見ていた空、いつも見ていた空が、そこにある。

（陸にしていると潜りたくなる。潜ると空が見たくなる。変わらない、繰り返した、でも）

誰のものでもないように誰のものでもある空は、人と人の心に共通して普遍にひらけていた。

争いなど知らぬ顔の青が。

見たいと思う限り、ずっとそこに、あるだろう。

キャビンに響くノイズの向こうで、犬と社長が吠えている。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1813q/>

『シレーナ・ダジリタ』

2011年2月9日20時10分発行